
奏でる旋律を

幾崎炉工

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奏でる旋律を

【Nコード】

N26800

【作者名】

幾崎炉工

【あらすじ】

私、水島奏は迷っていた。

それはどこにでも誰にでもあるような、一度は経験することのある悩みであるし、一部の人によってはそもそも悩みとして処理されることのないようなものだ。しかし私はそれに深くこだわり、どこまでも答えが出ずに、鬱屈とした日々を過ごしていた。

そんなときだった。

そんな秋の日の、帰宅途中だった。

その日を境に、私は次第に変わっていった。悩みは徐々に解消さ

れていった。自己を獲得したともいえるし、自己を放棄したともとれる変化だった。それまでの私は、間違いなく死んでいった。

そして、ついに真の問題へと直面することとなる。

それは、初恋とも思い出とも一線画した場所に存在し、さながら私を構築する核になっていたものなのかも知れない。一種の自己の誕生をも感じる出来事だった。

三年の時を経て、私はついに相対する。

それは、とある「天才」の死

序章

子供の頃の夢は何か、と聞かれたら私はこう答えるだろう。

天才バイオリニスト。

頭に『天才』なんて付けているところが子供らしいといえば、子供らしい。自分の才能の有無を考えずに言っているのだから。事実これは私の部屋の押し入れに収容されていた、幼稚園生の時の文集からそのまま抜粋したものだ。つたない字で、ページからはみ出してしまいそうなほどの大きな字で、それは書かれていたことから、よほどの執着心があつたのだろう。

そしてその『天才バイオリニスト』という夢は、高校生となった今でも尚、自分の才能のなさに落胆し続けながら生きる今でも尚、妥協という選択肢を以ってして、私の根幹に染み付いている。

天才は無理だとしても、プロのバイオリニストにはなれるのではないか、という淡い期待。

出場したコンクールでは、数々の賞を受賞した。しかしそれらはどれも、銀賞や審査員特別賞といった、一等賞や金賞に当たるものではなかった。つまりそれこそ私の才能のなさを如実に示していたのだけれど、当時の私はそれに気づくはずもなく、賞状を部屋中に飾るなどという行為をした挙句、優越感に浸っていた。

自分の才能のなさに気づいたその瞬間、それまでの自分の行いが急に恥ずかしくなって、飾っていた賞状は全て片付けた。練習の間はしだい短くなり、バイオリンにさえ触れることはない。そんな日々が、しばらくの間、続いた。

そして、そこからの脱却を果たしたとき、私は、自身や他者の才能を考慮することはなくなった。

しかしだからといって、途端に上達するなど、そんな都合のよい話などあるわけがなく、それはつまり、下手の横好き、というものだった。

結局、そのままこれといった変化もすることもなく、高校三年生の、進路選択が必要なこの時期になって、私は迷っているのだ。

バイオリンを続けるか、否か。

無論のこと、今の今になってその問題に立ち向かったわけではなく、それこそ中学生の頃から、迷い続けている。

続ける、とはつまり、音大への進学、そうでない場合は地元の国立大学への進学をそれぞれ意味する。迷いながらも選択の時に困らないためにと、幸い勉強は万全に備えてあったので、どちらも安全圏ではあるが、初めて迎えたであろう人生の岐路、そして後ろにはもう道がないという状況に、私は足がすくんでしまっているのだ。

長年の問題を、そう短期間で解くことなどは勿論のことできるわけがなく、さらにいうなら友人たちはほぼ、二年生の頃には 進路選択は終了していて、一つ季節が過ぎる度に私と同じような人はみるみるうちに減っていき、遂には私一人になってしまった。

教師からはまだ決まらないのか、と急かされ、両親からは自分の好きなようにしなさいと言われ。誰も彼もが保身のために、私に強く言わないことがよくわかる。ただでさえ友人たちは受験を控えて切羽詰まっているというのに、私のことなど見ている暇なんてないのだ。迷惑をかけるわけには行かない。次第に、友人たちを避けるようになっていた。

冬が近づく、秋真つ盛りの十月中旬。すでに冬服に衣替えは済んでいるが、時折吹く真冬のような凍てつく風に、どうしても体は冷え切ってしまった、数分歩いただけで指先の感覚は薄くなる。両手を顔の前ですり合わせ、吐いた息が、ほんの少し白くなったのを見て冬の訪れを実感し、わずかながらも暖かくなった手をポケットにしまい、また歩き始めた。

家から学校までは歩いて約二十分。この時期はどうしても歩くのが遅くなるから、だいたい三十分。左手の腕時計を確認すると、学校を出てから十分しか経っておらず、家に着くまでまだ二十分近くは歩き続けないといけない。

登下校に使う川沿いのこの道も、歩き続けて三年目となるが、とくに変わった風もなく、いつものように土手の下の河原では小学生たちが野球をしていた。

あの中に、本気でプロ野球選手を目指す子は、いったい何人いるのか、最近では気になって仕方がない。近年、野球はサッカーに人気を持って行かれつつある。が、そんな話は関係なく、野球だろうとサッカーだろうとバスケットボールであろうとテニスであろうと、それでプロを本気で目指す人間は、一体全体、今の世の中に何人いるのかということだ。

それはつまり、私の現状。

極端に言えば、その答えによって、私は進路を決定してしまうだろう。

つまり、今の私はほんの小さな動きにも傾いてしまう、やじろべえのようなものなのだ。能動的には動くことは出来ず、外力を以ってして、受動的に動く。そしてその二つの選択肢の、どちらが傾くことを想像しても、矢張りその先の自分を想像できないのだ。

一つ、溜息を吐く。

いつものように、考えが行き詰ってしまった。一度、大きく伸びをしてから、なんとなく、河原に目をやった。気づかないうちに結構歩いていたようで、野球少年たちの姿は小さくなっている。さらに、付近に人がいないことを確認してから、私は土手へと、足を踏み出した。

初めて来たわけではないが、幾分こんなところに来るのは久しぶりなので、少し慎重に下りきって、芝生のように生え揃った雑草の上を歩き、砂利の上を歩き、後一步踏み出せば、河に落ちてしまうところまで歩いて、そこで立ち止まった。

ぼんやりと眺める川面は、ほんのり赤く染まった空と、鱗雲を映し、時折吹く風によって、さざめきたっていた。上体を折り曲げて覗き込むと、それなりの深さがあるはずなのに、川底が見えるほどまで、澄んでいる。そしてそれは同時に、私の顔も映し出していた。

自分の瞳を覗き込んでみる。黒く、深い色をしたそれは、同じように私を覗き込んでいるのだろう。水面に向かって垂れた髪は、それを眺める私を、まるで拒絶するようにこちらに向かって伸びる。無表情といって差し支えないほどの、見飽きた顔が、そこにはあった。

もう一度溜息を吐き、上体を起こす。頭に血が上ってしまったのだろうか。少しくらくらする。そのままの姿勢で振り返り、数歩歩いたところで、靴に触れるものがあった。

石。

どういうわけか円状に組まれているそれは、その辺りに散らばっている砂利とは一目で、異なると判断できた。そのうちの一つを拾い上げ、眺めて見る。それは他の石よりも小さなもので、ちょうど手におさまるサイズ。そして何を思ったのか、左手に持っていた靴を下ろし、振りがぶつて、投げる。投げた石は暫くの間放物線を描き、向こう岸まで四分の一ほどの辺りで、ぱちんと気の抜けた音を立て、控えめな水飛沫を上げて、沈んだ。そこを中心に波紋が円状に広がり、次第に、流れによって、かき消される。

すると、不思議な気分になった。自分の中の悩みが、するりと抜け落ちていくかのような感覚。冷え切った手に息を吐きかけ、もう一度、としゃがんで石に手を伸ばそうとしたときだった。

「おい、女子高生。一人青春ごっこか？ 全く、学生はいいよな、のほほんと学校に行ってるだけでよ」

突然、後ろからの聞いたことのない声を聞いて、私はそちらに目をやる。

しゃがんだ姿勢から、まず目に入ったのは、履き古したスニーカー。そして黒いジーンズ。あちこちが破れたり、ほつれたりしているが、おそらくこれも最初からの加工ではなく、長年にわたって穿いているからだろう。そして少し顔を上げると、無地の黒いシャツに、その上からフードつきの裾の長い、または黒いコートを羽織っている。

そして、その顔を見たとき、私は思わず、息を呑んだ。男性にしては長い黒い髪。後ろは肩ほどまで伸び、横は耳を隠し、前髪は目の位置よりも長い。顎や鼻の下には無精ひげを生やし、そして、その瞳は、身にまといっている衣服よりも黒く、暗く、私を見下ろしている。

「よう」

にやりと笑いながら、彼はそう言った。

第一章

001

私は即座に立ち上がり、自分から五メートルほど離れたところに佇む男と対峙した。私に比べて随分と背が高い。百八十センチはゆうに越えているだろう。人気のない場所、加えては黒尽くめの男というシチュエーション。これ以上はないのではないかというほどの貞操の危機を感じつつ、それによって抱いてしまっている恐怖感を気取られないような口調で尋ねる。

「なんですか、突然。変態ですか？」

言った途端に、質問を間違えたと後悔したが、彼はそれを気にする風もなく鼻で笑い、「よくも初対面の人物に向かってそんな言葉が吐けるよな」と答える。

「最近の女子高生って荒れてんのかよ」

「ええ、まあほどほどに」

私の返答に、ふうん、と特に興味のないような返事をし、こちらに向かって歩いてきた。その行為に身構えるが、彼は私の横をすり抜けると、先ほどまで私がいた川べりに立つ。後ろ手に、折りたたんだ段ボールが見えた。彼はそのまま川面を眺めながら、「まったく人のもんを川に投げ捨てやがって」と言う。私は「人のもん？」と返す。

「もしかして、あの石……じゃないですよね？」

「それ以外に何があるかよ。あーあ、またあのサイズ探してこねえと」

面倒くせー、と呟きながら、彼は振り返ると、私の正面へと戻り、その場に段ボールを敷いて言うには、「まあ、なんだ。俺、ここに住んでんだよ」

「俗に言う『あれ』、な」

「『あれ』……ですか？」

おう、と短く返事をし、彼は段ボールの上へと腰を下ろした。きよんとしたまま動かない私を見てか、「ああ、ホームレスだよ。ホームレス」と言った。

「んー、住んでるつつつても、今日からなんだけどな。なかなかいい場所が見つからなくてさ、やつとのことで念願かなって、うきうきしながら材料調達やらの準備に出かけてたら、ほれ、ついさっき俺が作った手製の竈が破壊されてたってわけだ」

そう言われて、円状に組まれていた理由が分かった。成る程、あれは竈のつもりだったわけか。

「これが竈ですか？ 石を丸く並べただけじゃないですか」

「馬鹿野郎。これでも俺にとっちゃ竈なんだよ。謝れこら」

「すいませんね。青春真つ盛りなもんでして」

「青春なんて安っぽいこと言ってるなよ、女子高生」

自分で言ってたんじゃ、と小さく呟くが、それが聞こえたのか聞こえなかったのか。彼は段ボールの上に腰を下ろす。そして顎鬚をさすりながら、「青春真つ盛り、ねえ」と続けた。

「こんなところでいい年した女子高生が、たった一人で石を川に向かって投げるシーンは、そりゃ青春ものを彷彿とさせるがな。さすがに、そんな一言じゃ、表しきれねえだろ」

まあ、とにかく座れ、とまた彼は段ボールを、今度は私の足下に敷く。立ったまま話を聞き続けることにも疲れてきたので、大人しくそれに従い、その上に座る。見た目ほど厚いものではなくて、砂利の地面の感触を、間近に感じられるそれは、お世辞にも座り心地のいいものとはいえないが、足を休められるのは、若干助かったように思う。そして座った私を見、にやりと笑ってから。

「ちつとだけでも、その理由を聞けないだろうか」

「いやです」

私は即答し、反射的に立ち上がる。彼はあからさまな舌打ちをした後、「まあ、聞けや」と、話を続ける。

「俺は困ってそうなお前を見て、こうして親切心で、相談に乗ってやろうとしてんだぞ？　ここは大人しく俺に感謝して、悩みを打ち明けてみるよ」

「言葉と表情が一致していませんが」

「にやけ顔を湛えながらそういう彼は、寧ろ表情を隠そうという気すら持っていないのかもしれない。一応口元を隠すようにはしたが。」「おいおい、そんな連れねえこと言うなや。特別に相談料はタダだぜ？」

「もしかして、本来なら料金をとるんですか？」

「当たり前だろ、数少ない収入源なんだから」

「これで飯食ってるようなモンなんだぜ？　と彼は言うが、こんな人間に相談にするような人が今までにいたのだろうか。是非お会いしてみたいものはあるが。」

「それに、お前が投げ捨てた石のこともチャラにしてやろうってんだ。その代価として悩み、打ち明けるよ。ほれ」

「見下ろす私に、彼は右手を差し出し、掌をひらひらと舞わせる。」

「もし、私があなたに相談をしない場合は？」

「お前が投げたのと、同じくらいのサイズの石を拾って来い」

「了解しました」

「それでは、と立ち去ろうとする私を遮るように立ち上がって、「待て待て！　やっぱなし！　石はなし！」と慌てて引き止めようとする。」

「んつと、そうだな、うん。俺に職を提供しろ！」

「無理難題を押し付けてきた。さらには自慢げに笑みまで湛えながら。」

「どうだ、無理だろう？　この俺に職を提供なんて、出来るわけがないだろう？　ふん、これでお前は俺に相談するしかないってわけだ。さあ話せ、今すぐ話せ！」

「そのニュアンスじゃ、職を探すことよりも、あなたを職に就かせるほうが難しいように感じるんですけど」

「そりやそうだろ。俺は、結構好き好んでこの生活をしてるんだから」

「じゃあ、職を探してきましようか。とびきり重労働で低賃金なもの」

「やめてくれ！ とこれまた結構必死な風に、私を引き止めようとする。」

「嘘ですよ。無理に決まってるじゃないですか」

「いや、万が一ということもあるだろう？ もし俺のこれから的人生をお前に捻じ曲げられたりしたら、俺は一体どう生きてけばいいんだよ」

「同じ言葉をあなたに返します」

自分でわかっていなかったのだろうか。

「ふん、うまいこと言いやがって。そんなことで石の恨みを忘れるとでも思ったか！」

どこまで石に執着するのだろうか。何か思い入れがあるのだろうか、あの石に。

「ふん、俺は石には意思が宿ると思っているからな。俺の兄弟のようなものだ。それを投げ捨てるとは、兄弟を殺されたこととも同義！ 弟の恨み！」

「駄洒落ですか」

それに若干、中学二年生的要素も付加気味。

「じゃああなたは自分の弟を、火を囲うために用いて、その上に鍋を乗せたりするつもりだったんですか。ひどい兄貴ですね」

「ああそうだよ、悪いが」

「悪いとは、言いませんよ」

そう言っ、私はまた段ボールに腰を下ろした。正面に立っていた彼は目を見開く。

「どうかしましたか？」

「いや、お前、なんでまた座ってんの？」

「脚が疲れたからです。なにか問題でも？」

そう言つと、「いや」と彼は呟いてから、同じように段ボールの上に腰を下ろした。

「で、そうして女子高生は俺に悩みを打ち明けるのであった、と」「誰もそんなこと、一言も言つてないじゃないですか」

ふむ、と顎に手をやり、彼は少し何か考えるような顔をする。

「そういえば、名前訊いてなかったな」

「少しは話を聞きましょうよ」

「いいだろ、別に」と、彼はぼさぼさの頭をがしと掻きながら、それに、お前もいつまでも女子高生女子高生言われるの、嫌だろそれは、確かに。

「いやですけど……」

「けど、なんだよ？」彼は尋ねる。「なんか悪いことでもあるのか？」

「いや、だつて相手はホームレスさんですし……」

偏見半分、冗談半分だった。

「なんだよ、そんなことか」

彼はそう言つと、コートのポケットに手を突っ込む。もしかして怒らせてしまったのだろうか。わかつていたのに、注意が足りなかった。私は直ぐにでも逃げ出せるように彼の手元に集中する。

そして彼が引き出したのは、煙草のケースだった。

自分では隠せたつもりだったのだが、どこか安堵した風に見えたのだろうか。彼は「なに身構えてんだよ」と言いながら、ケースのふたを開け、その中から一本を取り出す。

「俺がなんかの武器を持つてるとでも思ったのか？ お前の言葉にキレてお前を攻撃するとも？」

ちつとばかり妄想が激しいんじゃないか？ と彼は嘲笑うようにして、同じケースに入れていたライターを用いて、煙草の先に火をつける。ジジジ、という音の後、煙が上がった。なんともいえない匂いが広がり、それは鼻をつき、脳を揺らすように、私に感じさせた。

「いや、妄想じゃないか。俺と同じような境遇の奴らが、まあその中でもごく一部のだろうが、そんなことをしてきたって根拠はあるんだもんな。事実に基づいていたわけだ。いやあ、失敬失敬。それはお前の偏見じゃなくて、世間の偏見だったわけだ」

どっちにしろ、つまんねえがな。そう呟くように言う彼の瞳には、どこか哀愁のようなものが含まれている気がした。

「まあつまり、俺はそんな偏見みたいなのが嫌いなわけだ。だから俺は俺の全ての情報を曝け出してやるよ。お前がお望みとあらば、どうぞご自由に身体検査でも何でもすりゃあいい。身ぐるみ剥がしやがれよ。そのかわり」

変な色眼鏡を、はずせ。

「……承知しました」

嫌いな煙草の匂いを嗅ぎながら。まして、つい数分前に出会ったばかりのホームレスに自分の存在を否定されては、これはもう平常を保つてなどいられない。多少は彼の発言に思うところはあるが、大人しく従う。先ほだからやけに寛容になっている気さえするが、これも彼の言う偏見によるものなのだろうか。

「もうあなたのことは疑いませんよ。こんなことを平気に言っておいて、もしあなたがそのごく一部だった場合は、もう二度とはずせない色眼鏡を掛けるんでしょうけど、ね」

「安心しなつて。俺は絶対にそんなじゃないからさ」

ここで、彼は表情を崩す。せめてもう少しの間だけでも真面目な顔をしていてくれたなら、信じようがあるのだけれど。一気に真実味が薄れてしまっていることに、気づいていないのだろう。

「俺の名前は、な」

彼はわざわざ手を伸ばし、例の竈の石のうちの一つを手にとると、そのまま砂利の地面にそれを押し付け、ガリガリと文字を書き、私にそれを読むように促す。成る程、一目で読めるような簡単な名前ではないらしい。向かい合って座っている私が読めるように、上下逆様に書かれていた。あまり、上手いとは言えない字ではあったが、

確かに『京都弦一郎』と読める。

「きょうと、げんいちろうさんですか？」

それを聞いて、彼はにたりと笑った。あまりよい笑いではない。若干、苛立ちのようなものが立ち込めるが、どうにか押さえ込む。

「みやこ、って読むんだよ、京都は。だから俺の名前は京都^{みやこ}弦一郎
ってんだ。女子高生よ」

「どっかの地名にもあるらしいんだけどな」と付け足し、「だから
地名姓なのかもしれねえんだけど、まあ、とにかくそんな名前なん
だよ」

「知らないんですか」

なんだよ、彼は拗ねるような口調で言う。

「下の名前ならまだしも、苗字の由来なんて知るかよ。じゃあ、お
前は知ってんのか？」

「そりゃ知りませんけど」

あなたのような奇妙な苗字じゃないんですから、という言葉と
もに、彼から石をひつたくと、彼がしたのと同じようにして、地
面に名前を書いた。上下逆に書くというのは初めての行いであつた
が、それほど難しいものではなかった。「どうです？ 簡単に読め
るでしょう？」

「水島^{かなで}奏、ね」

確かに難しい読みじゃねえわな、と彼は笑った。

「水島なんて、一体何処だよって話だ。そもそも地名姓なのかさえ
も分かんねえじゃねえか」

「そうでしょうね。調べる気すら起こりませんよ」

「探したら、きつと見つかるぜ。そこら中にぼんぼんと」

そこで彼は銜えたままであつた煙草の灰を落とした。およそ半分
ほどが灰となっており、彼が指で叩くたびに地面に落ちる。全てを
落とし終えて、彼はもう一度それを銜え、その煙を深く吸って、深
く吐いた。白い煙が同じく宙に舞い、霧散する。私が怪訝そうな顔
をしたせいであろうか。彼は、「ん、煙草、苦手だったか」と今気

づいたようだった。

「いや、すまん。全然気付けなかった。今消すわ」

「いえ、構いませんよ、別に。できればこっちに煙が来ないようにしていただけると嬉しいですけど」

「じゃあ場所変わるか。このままじゃ、お前の方が風下だし」

その彼の言葉に従い、段ボールをそのままに、私たちだけ位置を入れ替わる。彼の言うとおり、私のほうが今度は風上になったので煙がこちら側に流れてくることはなくなった。そのおかげもあってか、幾分落ち着いたようにも思う。ただの気分的な問題だけれど。

「その煙草って、どうしたんですか？」

だから、ここで質問をする余裕が出来た。「どうしたってなんだよ？」と彼は訊き返す。

「いや、えと、まだあなたのことはよく知りませんが、仮にもホームレスなんですよね」

「おう、そうだが」

「働いてないんですよね」

「さっきも言ったはずだぜ？」

「じゃあ、その煙草代は、いったいどこから」

「ああ。成る程」

そう訊きたかったわけな。そう言っつて、彼は笑った。「まどろっこしいんだよ、お前は」

「これはだから、拾いもんだよ。何処ぞの禁煙し始めの奴のな」

そして彼は、ポケットから煙草のケースを取り出し、私に見せた。形はいくらか新品のそれに近いが、側面には握り潰したかのような跡が残っている。これを見て、彼は禁煙を始めたばかりだと推定したわけか。「な？」と言いつつ、既に一本目を吸い終えていて、ちようど二本目を取り出そうとしていた。まだ中にも、いくらか入っているようだ。つまり、買ったばかりの煙草を握り潰し、捨てたと言っわけか。このご時世に、なかなか気前のいい人間もいるものだ。気前と言っか、無駄遣いというか。

「そんな奴がいるから、俺もこうして禁煙することなく過ごして
られるんだよな。いやあ、感謝感激ってやつだよ」

「禁煙しようよ。そんな生活も直ぐ出来なくなりますって。そ
れに、世間は禁煙ブームですよ」

「案外どうにでもなるって。それに、俺に世間の話をするなんて、
無駄なことしてんなよ」

「そうですか」

「あ、いや、でも禁煙ブームに乗った奴のおかげで吸えてん
か。じゃあ禁煙ブーム様様だな」

「世間を褒めてるじゃないですか」

「悪いかよ。いえ、別に。そう言い合って、一呼吸。」

「さて、本題には入ろうか。お前は、どうしてまたこんなところに
来てたんだ？」

「それ、本題ですか？」

「本題だよ」

彼は半分ほど残っている煙草を地面に押し付けて消し、にやりと
した笑みを再び湛えつつ私を見た。どこか見下されているかのよう
な、見透かされているかのような、感覚に陥る。

「あなたに話すに値しない、つまらなくて、くだらない話ですよ。」

何処にでもあり、誰にでもある話です。勿論、色恋沙汰じゃ、あり
ませんよ」

「分かってるよ、そんなことは。お前は見る限りにそんなタイプじ
やないだろうし、な」

「話の内容も、分かってるんじゃないですか？ そんな顔ですけど」
「エスパーじゃあるまいし」彼は馬鹿にするように鼻で笑う。残念
ながら、話を逸らす事が出来なかった。まあ、それほど期待したわ
けではないけれど。

「じゃあ、まあ、俺がエスパーだとして。お前の考えていることが
分かっているとして。その答えあわせといこうじゃないか。ほれ、
話せ」

「答えあわせならその前に、あなたの意見をお聞きしたいです。ほ
ら、テスト用紙は提出しないといけないじゃないですか」

「自己採点でもいいじゃねえかよ」

「そういうわけにはいきません。先生は許しませんよ」

「先生、ね。お前がいつ先生になったんだか」

「それに、教師なんて仕事するもんじゃねえよ」彼は言う。その現
状を知っているかのような話し振りが気になり、尋ねてみる。

「ああ、大学時代、教員になりたがってた友人がいたんでね。よく
文句やらを聞いてたんだよ……」って、話を変えようとすんなって」
さつさと俺に打ち明けてみな、と。ああ、また失敗した。これは
もう話すしかないのだろうか。他の選択肢を探すが、見つからない。
そして、浮かんだものが、一つ。
逃げる。

しかし、その選択肢は即座に排除した。理由は、やはり何をされ
るか分からないからだ。多少はリラックスできたとはいえ、多少は
打ち解けたからといって。彼の言うところの『色眼鏡』とやらをそ
う簡単に外すことは、できていなかった。もしかすると、どこかで
私が行為を拒否し、否定しているのかもしれない。事実、私は
いつでも逃げられるような姿勢を最初からとっている。彼との会話
に半分、残りの半分の神経を、なにかがあればすぐに逃げるとい
うことに傾けていた。

何故。

何故だろう。どうして、だろう。それほどまで、十七年と少しと
いう歳月で積み重ねられてきた、あたかも実体験のような生々しさ
を持つそれが、私の大部分を支配しているのだろうか。分からない。
自分の心が。

分からない。

それは、進路についても、同じ事で

「俺がすぱつと解決してやろうか」

その声に、私は顔を上げた。いつの間にか俯いていたようだ。彼

は先程のような、全てを見透かしたような笑みは浮かべておらず、おそらく、真面目な顔をしているのだろう。今になって、初めて見た顔だった。

「今お前が思っている事も含め、これまでのお前の悩みも全て。それこそ根こそぎと言っているほどに、俺が解決してやるよ。これでどうだ？」

「いや、どうだ、と言われ、まして、も……」

全てを吐露してしまいたい。そんな感情が、押し寄せてきた。そうすれば楽になると、心のどこかで誰かが囁く。それを必死で自制し、そのために、今度は自分の意思で、俯いた。

自分の弱さに、反吐が出そうだった。やっっていることが昔から何一つとして 変わっていない。まるで生き物のように私の内部がうねりをあげる。それが心というもののなのか感情と言うものののか。それすらも、分からなくなってきた。何もかも、分からない。次第にループを始めた思考は留まることなく、動き回る。ここから出せと、壁を叩き、それとともに、鼓動は速くなっていく。

苦しい。

「馬鹿か、お前」

その声に、視線だけを送った。少しばかり、彼の瞳には同情に似たものも混じっているような気もする、気のせいと言われればそれまでだが、それでも、感じてしまった。

「お前、今、俺が同情してるとか思ってたんだろ」

そういうところが馬鹿なんだよと、彼は、面倒そうに頭を掻く。

「俺が、色々とつらくなるんだよ」

お前を見てると。そう言っ、笑った。

002

それから、数分後か、十数分後。或いは、数十分後かもしれない。ともかく私にとってものすごく長く感じられたその時間は、ついに

今を以って終了した。沈黙の中で私は小さく息を吐くと、鼓動がいつになく速いことに気がついた。無音という今この状況も相まって、心音を伴い、それは私を中から侵そうとする。もう一つ、息を吐くことによってどうにか抑え、それから彼を改めて見た。

彼は少し視線を落とし、思いに耽っているようであった。これまで私が話した内容を脳内で復唱しているかのようにも見える。暫くは口を開かないであろう。私は彼から視線を逸らすと、どこを見るでもなく、宙を這わせた。

間違えてしまった。そう言えるかどうかは、未だに判然としなかった。

結局あの後、彼の口車に乗ってしまった私は、例の進路云々について話を彼にしてしまったのである。それはもう、耐えようのない苦痛であった。何しろ、教師はおるか、両親にすら話したことがなかったのだから。逆に、全く係わり合いのない相手だからといって、それに変わりはなかった。

軽く握っていたはずの両の掌が、いつの間にか堅く握り締められていた。無意識のうちに込められていた力を弛めると、ゆっくりとそれは開かれた。外気に触れることで、汗ばんでいることが分かる。スカートで掌を拭い、見てみると、どうやら思いのほか長い間握り締められていたようで、爪の痕がくつきりと残っていた。

痛みはなく、しかし、なかなか消えないそれを眺めつつ、考える。彼は私の話の間、私の言葉を一字一句漏らしていないのではないかと言っほほどに集中しているように見えた。心のどこかにあった、もしかしたら寝てしまうのではないかという疑いは、杞憂に終わったわけだ。それが私にとってよかったことか、悪かったことかどうかは定かではないが。

彼は丁度、私が次の言葉に詰まったときに限って相槌を打ってきた。そのおかげで、話しづらく、話し難いわりには、楽に話せたように思う。苦痛は、別のものとして。

「ありがとう」

彼が声を発する頃には、爪の痕は跡形もなく消えてしまっていた。真っ白と違ってよいほどの掌から、視線をゆつくりと彼に戻す。伏し目がちに開かれている彼の瞳も、こちらに向いた。

「話してくれて、よ」

「……いえ、別に」

もういいですよ。その言葉は力なく、彼に届くこともなく口腔内で霧散した。どうやら虚勢を張ることすら出来ないらしい。それほどまで、私は弱っているのかと痛感する。たかが、数分の言葉だけで。

「……自己採点はどうでしたか？」

そう問いかける言葉すら、若干震えていて。それを気にせずに、彼はおどけるように答える。

「それが全然駄目。零点だよ」

「……赤点ですね。追試でもしましょうか？」

「真っ平御免だな。別に赤点でも構わねえよ」

「いいのですか。内申に響きますよ」

「本当の学校じゃあるまいし」

「じゃあ、そのまま私の好感度に響きます」

「……なら、受けてやるよ」

また暇なときにでもな、と彼はそこで言葉を切った。これ以上、私から話しかけることも出来ずに、時間だけが流れてゆく。その間に、彼は一本の煙草を吸った。昨日と同じ銘柄だ。吸うことの出来る限界までを吸い、地面に押し付けて火を消したところで、口を開く。

「しかし所詮は高校生、考えることは色恋沙汰ではないにしろ、っ
て思っていた俺も、軽率だったな。いや、本当にすまない」

そう言つて、頭を下げるが。

「嘘を言わないでください。あなた全然そんなことも、悪いことを
したとも思っていないでしょう」

「おいおい、どうしてまたそんなことを言っただよ」

「鏡を見てください、鏡を」

分かつてるって、言いながら頭を上げる彼は微笑を浮かべていた。頭を下げる直前からのものだが、まさか自覚していたとは思わなかった。いや、逆だ。自覚していないわけがないと思った。

「で、私は大きなリスクを払ったわけですが、受け取ったあなたは、そんな態度で許されるとお思いですか？」

「クライアントの趣味趣向に完全に従うとも思ってたか？ 残念だったな」

「それでも完全にあなたの趣味趣向は許されませんよ」

「虚勢なんて、張らなくていいんだよ」

は？ と気の抜けた声を出してしまう。突然の変化。彼の目は、若干の真剣さを帯びていた。

「とりあえず、真剣な話のときにはやめろ。邪魔なんだよ、これから話し合って行こうってのに」

「私、虚勢なんか」

「違うのか？」

それは、と言いかけて止まった。長年のうちに染み付いた癖。先ほどの汗のごとく簡単に払拭することなど出来ずに、今も尚、こうして彼に向けてしまっている。やめろと言われたところで、どうしようもない。私から、その癖をとってしまったとしたら。

私は。

「お前は、そのままでもいいんだ。そのまま、自然の自分を知れ」

自然の、私。

「嘘なんてつかなくていい。他人にも自分にも、素直になれ。つてのが、まあ第一段階だな、お前には。そのためには内面よりも先に外面から入ったほうがいいだろ。何事にも形から入るのはいいことだぜ？ 目標やら理想やらに一步一步近づいていくのが、自分で分かるんだからよ」

できるの、だろうか。今まで、出来なかったことが。

「出来るに決まってんだろ。俺がいるんだ。独りじゃない。俺がい

る」

そう言つて彼は柔和な笑みを浮かべ、肩をすくめる動作をする。そこで初めて、彼の話を真剣に聞いてしまっている自分に気付いた。まだ悩みを話すと決めただけで、彼に相談するとは決めていなかったのに。

どうしてだろう？

彼に任せること、本当に解決できるかのような気がして。

「お願いします」

頭を、下げた。

今の私には、それが精一杯だった。そうするしかなかった。彼のことを全く知らないだとか、今日初めて会ったばかりだとか、そういうことはもはや考える余裕すらなくて、ただ単純に、今の状態から抜け出したい。逃げ出したい。

「任せとけ」

どうしてか、彼がとても頼れる存在に、感じてしまったのだ。

003

「だから……ですね。私がこんな朝早くに来たのは、決して、昨日のあなたとの会話が楽しすぎてもっとお話したいな、なんて思ったからじゃないんですよ」

先ほどから一字一句変わらずに繰り返している言葉。何度目だろうか、回数を思い返すことも最早出来ない。一方正面に座る彼はといえば、昨日と同じ格好のまま私の言葉に何故か満足げに頷いている。ああもう、どうしたものだろう。頭が痛くなる。

しかしそもそも、全ては私が原因だった。昨日の彼との会話の後、高揚感というか、安心感というか、なんとも言葉に表しづらい妙な気分で帰路に着いた。まるで雲の上を歩いているかのような、地に足が着かないような、どこか現実味が欠如された思考からは、靴のことなどは疾うの昔に葬り去られていた。

失態だった。

鞆を忘れたまま家に帰るなど、思い返してみても小学校に入りたての頃の一度きりだ。あれから何年が経っていることだろう。恥ずかしいことこの上ない。さらには、それを知られてしまったのが、出会ったばかりのホームレスだとは。彼から視線を逸らしてみれば、遠くに聳え立つ山の端から朝日が差し込もうとしていた。

辺り一面を山々に囲まれるこの街の日の出は遅い。平地では既に広がっているであろう蒼穹も、この街の同時刻では赤とも青とも紫とも形容できない色彩を呈している。雲は一つとして見受けられず、穏やかな流れの川は、澱みも歪みも委細なく、そのままを映しこんでいた。

早朝。

ピンと張り詰めた冷涼な空気。活動を始めたばかりの人間たちが発する僅かな音。まるで世界が生まれ変わったかのように思えるほどの、僅かばかりの緊張感と開放感。息を吸い、吐くというだけで感じられる、あたかも自分が独りきりになったかのような、ほんの僅かな、十のマイナス何十乗を掛けられたほどの孤独感。その全てが私を包み込み、その渦中において私は、心地のよい揺れを感じながら、ただ瞬きを繰り返す。

とうとう待ちきれなくなったのか差し込んできた一筋の陽光に、反射的に私は目を逸せば、その先には彼の顔。

折角、いい気分だったのに。

「いやあ、俺は最近のことには疎いが、これってあれだろ？ ツンなんとかってやつだろ？ なんとかデレってやつだろ？ いいんだぜ？ そんな回りくどい言い方しなくなっただけ」

「ですから」

何度言わせれば気が済むんですか、とあからさまにうんざりとした雰囲気醸し出しつつそう言うものの、大した変化もない言葉が返ってくる。これ以上の弁明は（私の精神的にも）無理だと悟り、段ボールの上で正座から足を崩す。痺れ具合からして、十分そこら

ではないだろう。鞆を回収した後、直ぐに登校できるようにと着用していた制服のおかげか、あまり寒さは感じられない。それは、もととは彼が横になっていた場所に座ったということやこの『家』も、要因として挙げられるだろう。

視界の端の青色のせいだろうか。目がちかちかしてきた。薄っぺらなブルーシートは、ほんの僅かな風が吹くだけで揺れる。かさかさという音が耳につくが、それはなるべく聞かないように努める。一度目を閉じ頭を振ると、次に目を開けるとときには、どうやらそれは解消されていた。

ホームレス御用達のブルーシート。彼は昨日、私の帰宅後にそれを用いて即席の家を作っていた。四隅に柱を立て、ブルーシートで覆うという簡素な作りではあったが、それでも風は防ぐことが出来る。私はその『家』の奥に、彼は入り口に座っているのだ。

私が訪れたときは、彼は今私が座っている場所に蹲っていた。しかし、中に入るために、入り口のシートを捲ったため、彼は目を覚ましてしまったのだ。そして鞆を取りに来た旨を伝えると私を招き入れ、自分が横になっていたところは暖かいから、と私をそこに座らせた。そのときは、彼なりの優しさを見せたのかと思っていたが、それはどうも勘違いだったようだ。つまりは、私を帰さないためだったようだ。

寝起きでよくそこまで頭が回るものである。

と、そういうわけで。私はここから逃げ出せずにいるのだ。

「鞆も回収したので、できることならば私は一刻も早くおいとましたいんですが」

「何故だ？ また楽しいお話でもしようぜ」

「だから、じゃあ同じ言葉ばかり繰り返さないで下さいよ」

「なに言っただお前、それはお前の方じゃないか」

「いえ、あなたの方じゃ……」

いや、彼の立場からすればそうだろう。思い返してみれば、私も先ほどから同じことばかりを話していた気もする。

「……そうですね。楽しいお話でもしましょうか」

「お、突然乗り気になったな、どうしたんだ？」

「別に、深い理由はありませんよ」

ほら早くないかい。ネタはないんですか、と私は彼を急かす。腕時計を見ると、時間にはまだ幾分余裕がある。この際彼が話したいだけ話してあげよう、などと思った。勝手に彼に勘違いをしていたことに對するお詫びだ。勿論、口には出さないけれど。

「突然そう言われると、何も浮かばねえな……」と彼は、どうしてか腕組みまでして考え込んでいるようだった。「なにかお前にはないのか、奏」

「何故下の名前を呼び捨てですか。会って二日目でフランクすぎませんか」

「じゃあなに、カナちゃんとか言えばいいのかよ」

「今度はフレンドリーですよ」

そうか？ と言いつつ、彼は首をひねる。ぶつぶつと呟きながら、どうやら私の呼称を決めようとしているらしかった。ちなみに先ほど彼の言った、『カナちゃん』は、私の数少ない友人たちと両親とが使用している（ちゃんはいないケースが多い）。だから、奏という呼称を使う人は数少なく、今となっては、いないのかもしれない。

どうでもいいか。

思考をリセットし彼を見るが、いまだにうんうんと唸っていた。

そこまで悩むものなのだろうか、呼称というものは。

「……もう呼び方は、何でもいいですよ」

「ん、そうか。じゃあなんだ。楽しいお話でも始めようぜ、『奏ちゃん』よ」

結局そこに落ち着くのか。返答には、無駄なタイムロスに対するほんの少しの悪意を込めて。

「ええ、始めましょうか。『京都ちゃん』」

「ここまでダイレクトかつスマートに俺のトラウマを見抜いてくる

とは……」と彼は大げさに頭を抱えるジェスチャーをしながら言う。
「お前、絶対性格悪いだろ。言われたことねえか？」

「いえ、これまでの人生では覚えがありません」

いや絶対嘘だろ、と彼は青くなつた顔で反論する。心なしか、冷や汗を掻いているようにも見えた。

「嘘じゃありませんよ。他の人には言わない様に気をつけてますから」

「自覚してんじゃねえかよ」

「でもやつぱり、あなたにはそういうところは一切隠さずに接したいと思います。嘘は、ほら、いけないって言っていましたよね」

「いやいやいやいや」

両手を顔の前でぶんぶんと振り、否定の意を示す。「確かに嘘をつく的なことは言ったけど、そういう、他人を救うための嘘は別に構わねえよ」

「でも、一度した約束を破るなんてひどいこと、私には出来ないし

……」

「そう思うんなら、それをやめてくれませんかねえ！」

「冗談ですよ」

それから彼と、また別の話をした。その話が終われば、また次の話へ。そうこうして暫くしたところで、ちらりと腕時計を見てみれば、いつも家を出る時間から少し経っている。ここはちょうど家と学校の中間地点付近にあるので、今から学校に向かえばいつも通りの時間に到着するだろう。彼から受け取った鞆を持ち、立ち上がった。

「そろそろ学校に行こうと思うんですけど」

「ん、もうそんな時間か。オーケー分かった」

そう言つて彼も立ち上がり、私が『家』から出られるように外に出る。きよろきよろと辺りを見回すようにした後、私に手招きをした。それに従い、外に出る。

「なにしてたんですか？」

「いや、お前がここから出るの、見られたら色々と困るだろ。だから、さ」

「ああ、それは」

有難うございましたと頭を下げると、即座に、「あー、もういいから」と言われた。

「さっさと行ってこい」

「言われなくともそうですよ」

それではと言って、土手を上り始める。上りきって、振り返ると、彼がこちらに向かつて、手を振っていた。

「……………」

私はそれに、会釈で応えた。

004

十数日が過ぎた。

その間、私は土日を除き彼の元に足繁く通った。彼との話が楽しみというわけではなかったが、それでも、放課後になり帰路に着くと、どうしても目に入る『家』が気になってしまい、気付いた頃には既に土手を下り始めているのだった。そして彼は何時もそこにいて、日の暮れるまで、私と話をしてくれた。

しかし、だからといって、私の悩みや進路についてのことがこれといって話に挙がることもなく、その会話の大半を占める内容といえば、取り立てて面白みのあるわけでもない、ごくごく日常的なたわいのないことだった。例えば私が、寒くなってきましたね、と言えば彼は、そりやそうだろ冬に近づいてんだから、と言う。それに初雪はいつになったら降りますかね、と尋ねれば、そんなのは知らん気象庁にでも聞きやがれ、と彼が言う。この繰り返しだ。同じような益体の欠片もない冗長な会話だけが、延々と続く。

何をしているのだろうと思った。

彼との会話が退屈と言うわけではない。寧ろ逆だ。楽しいとも言えるし、この会話に助けられているところ、救われているところもあるだろう。普段吐き出すことの出来ない言葉をここでは躊躇いなく漏らすことが出来、さらにはそれを咎められることもない。悪い言葉になるが、掃き溜めとも言えるだろう。ストレスを解消してもらっているという気もしないでもない。そういう点で、彼には感謝をしていた。

しかし同時に、こんな自分もいるのだ。そんな暇があるのならば、英単語の一つでも覚えたらどうか。この無駄に消費している時間こそが、最終的には自分の首を絞めることになるのではないか。と言う自分が。

一般的、客観的に見ていれば、私はきつとそれを断言する側の人間だ。無駄は全て淘汰し、排斥する。それこそがあるべき姿で、それこそが行うべき行為であると、そう判じていることだろう。受験とはレースだ。どれだけ速く走るのかも重要ではあるが、どれだけ無駄な動きを、無駄な時間を過ごさないかも重要とされる勝負だ。そして今こうして過ごしている時間は間違いなく無駄な時間であり、さればこそ、この時間は排斥するべきだ。普段の私ならば、そう断言していることだろう。

これら二つの、相反する感情が私の決断を鈍らせていた。しかしその勢力図は至極明瞭で、一方は濁流のように、もう一方は堤防のように私の中で争う。そして、それは今にも決壊する寸前であった。「お前、迷ってなんかいないよな」

だから、待ち望んでいた『それ』が来たというのに、私は驚き狼狽えるばかりで、直ぐには応えることが出来なかった。

彼は『家』の外に立ち、私は中に座り、向かい合っている。彼が煙草を吸うためだ。必然的に、示し合わせたように、いつからか私たちはそれぞれの場所を確保していた。

「だから、迷ってなんかいいよな」

私に聞こえていないと思ったのだろうか（いや、彼は思わないだ

ろうけれど）、もう一度尋ねてきた。一拍ほどの間を置いて、私は逆に尋ね返す。「どうして、そう思うんですか？」

答えを先延ばしにしたと言われればそれまでだが、純粋に、疑問だった。

「ん、いやー。別に？　ほら、第六巻ってやつよ」

「単行本ですか？」

「シックスセンスだよ」

そして私を見透かすように、真っ直ぐと、「なんだよ、この嘘は」と問いただすように言う。

「お前を見てるぶんじゃ、俺が思うに、気付いてないんだろ。自分が何を選ぼうとしているのか」

「……えっと……」

思い返しても、全くそういうところはない。勿論今も、だ。はい、と言い返すと、彼は「だろうな」と言いつつこの日三本目の煙草を吸い始める。ライターが切れ掛かっているのだろうか。火は一度ではつかなかった。

「あーくそ、やっぱり、お前の自分に対する嘘は厄介だな。大抵のヤツは俺とそれなりに話せば気付くつてのに、全くそんな兆しは見られないんだからよ」

あー面倒だー、と煙を上に向かって吐いた。風が吹いて、直ぐに霧散してしまう。

「……あのどうでもいいような会話の中に、そんな意図があったんですか？」

「ん？　ああ、気付かなかったか？　それとなくそういう話を混ぜていたはずなんだけど」

「いえ」

そう言つと、彼は「あー」と頭を掻いた。「まったく？」

「はい、まったく」

「じゃあ、自分の問題について考えたことは？　ここにいるときに絞って」

「……それは、何度もありますけど……」

それだよ、と彼は私を指差して言った。「それなんだよ。それが俺の意図。分かったか？」

そう言われて気付く。確かに私が自分の問題について考えたとき、そのきつかけとなったものの多くは彼の発言からだったはずだ。つまり、あれらの言葉は総て彼が、私の中でそのように作用することを見越して送ったということか。

「……なかなかの策士ですね」

「どういたしまして。無駄に年は取ってねえんだよ」

年はともかくとして、これは一朝一夕では身に着けることの出来ない技術ではあるはずだ。私の思考を読んだ上でしか、使うことが出来ないのだから。そしてその技術を持つ彼が言うことは、やはり間違いでないはずなのだ。

「じゃあ、私はまだ嘘をついてるんですね？」

「ああ。そうだ」

彼は何も躊躇うことはなく、そう答えた。その目に迷いは微塵も感じられない。

「そう、ですか……」

当たり前でしかないその返答を聞いて、しかしおかしい質問をしたものだと思ふかの後悔の念を抱く。分かりきっていることをわざわざ訊いたのだ。おかしくないわけがない。そして彼は紫煙を撒き散らしながらため息を吐く。私もそうしたいものだけれど、一応は彼に全てを委託しているので、そこはこらえた。

「さあて、んじゃあどうしたもんかね」

「どうしたもん、とは？」

「時間」

お前、いつまでならこんなことしててもいいんだ？ と彼は訊いた。一瞬、その問いの意味が理解できずにいると、彼の方から再び「受験生だろお前」と。

「流石に色々と問題が出てくるんじゃないのか？」

「ああ」

それに、即座に答える。勿論嘘抜きで。

「いえ、別に構いませんよ。言ったかもしれませんが、私はそれなりに優秀なので勉強面での問題はありません」

「お前のクラスメイトが聞いたと思うだろうな……」

「……さあ、どうでしょう」

考えてみる。苛立ちを覚える人、腹を立てる人はいるだろう。何も思わない人もいるかもしれない。自分のことで精一杯という人もいるだろう。他人に関わりたくないという人も、もしかしたらいるかもしれない。

「……余裕ぶつてると、思うんじゃないですかね」

結論を、そのままに伝えた。

「余裕ぶつてるとは？」彼は聞き返す。

「進路を決めないで、ですよ」私は答える。

「私の成績がそれなりにいいことはクラスのみんなには周知の事実ですよ。それなのに、私は特定の進路を未だに絞ってはいない。だから」

どこを受けても受かるつもりだからなんじゃないかと。

思うだろう。きっと。

「お前にとって、それは嫌か？」

彼が覗き込むように私の目を見る。今度は見透かすような目ではなく、見通すような目だった。それを同じように見返す。

「嫌です」

「そうか」

短く答え、彼は煙草の灰を落とした。少し火が残っていたようで、それをつま先で踏み消す。

「ま、嫌なわけねえわな。うん。そりゃ、さつさと抜け出したいわな。うん、分かった」

彼は一人納得したように何度か頷き、そして、

「じゃあこっちを、さつさと終わらせりゃいいわけだ」

「……なんですか、それ」
まるで。

「まるで、最初から急ごうと思えば急げたような口ぶりじゃないですか」

その問いを、彼は

「いや、違う」

否定した。

どうせ彼のことなので、「あー、出来たけどさ、やっぱあれじゃん。奥の手とか最終奥義とかはギリギリまでひっぱりたいじゃんよ」などのたまうとも思っていたが、違った。流石にそのあたりの分別はついているのだろうか。

「お前、なに疑ってるような顔してんだよ」

「いえ、あなたが、思っていたよりも普通の人だったので、ちょっと驚いてしまっているだけです」

「なんだ、それ」

まあいいや、と彼は残り短い煙草の火を消し、次なるそれを取り出して銜える。火は点けていない。

「お前は、じゃあどうして最初からそれをしなかったのか、というところに疑念を抱いているわけだ。間違いは？」

「ないです」

「じゃあ次。その理由を知りたいわけだ」

「正解です」

「なら答える。 さっき言ったじゃんよ。 あれが、理由」

あれ、とは。先ほどのような失態は自分で許せない。脳を必死に回転させ、答えに至る。

「私自身の嘘が云々って話ですか」

「そのとおり。 いやあ、頭の回転やらが速くて本当に話してて楽しいよ。『奏ちゃん』は」

「ありがとうございます。『京都ちゃん』」

以前の会話以来頻繁に出るようになったやり取りをして、私は目

を細めて彼の目を睨むように見た。「だからつまり、どういうことですか？」

怖い顔すんなって、と彼は手を振りながら、「だから、今ならちよつとばかしお前の問題解決までの時間を早められるかもしれないんだけど、どうだ？」

「どうだ、って言葉の意味が分からないです」

そこで彼は煙草の火が点いていないことに気付いたのか、ライターを取り出して、なかなか火の点かないそれをガシガシとする。それをBGMに、話は続く。

「この手は、俺もついこないだ気付いたばかりなんだけど。これ使ったら、ちよつとお前が暫く精神的に再起不能になる可能性が出て来るんだよな」

「再起不能……ですか？」

これはまた物騒な言葉が出てきたものだ。しかし彼のことだ、これはなにかを比喻あるいは暗示していることだろう。その真価を推し量ろうと私は思考を絶え間なく巡らせるが、彼はといえば未だに煙草に火を点けようとしている。諦めの悪い性格なのだろう。なかなかやめようとはしない。流石にそろそろ止めたほうがいいだろうかと私が思い始めたときに、僅かに残っていたのだろうか、弱弱しい炎を揚げた。彼の表情は僅かに喜びを呈し、これまでの苛苛を全て拭い去るかのようになり、深く煙を吸い込むと、それよりも深く吐く。「ま、分かりやすく言えばショック療法的解決策なんだが」

「まあ、安心しな。大して変化があるわけじゃねえし、今までおりだらだら話してるだけでいいんだよ」

「なら、何処が変わるんですか？」

そして口元をゆがめながら、「会話が露骨になります」と、まるで質問に応じる教師のように、奇妙な、諭すような敬語を使いながら。

「今まではやんわりふんわりと会話の端々に混ぜていたことを、これからは露骨に、隠し飾ることなくお前に話して行きます。お前の

言うクラスメイトたちのお前に抱いているであろう嫉妬や劣等感。及び教師や両親、社会的に見たときの感想。さらには今の俺から見たときのお前の感想。他人がお前に抱くであろう感情を、根こそぎに余すところなく惜しむことなく、お前に伝えます」

「……つまり」

「つまり、お前がお前でない感覚を味わってもらいます」
「どういう意味か、よく分からない。」

「自己を否定し喪失させ、確立途中にあるアイデンティティを崩壊させる。そして自分じゃない自分から自分を見る。これが目標。だって自分である自分から自分の嘘が見抜けないようじゃ、こりゃもう自分でなくなるしか方法はねえだろ。多分」

「多分って」

仕方ねえだろ、と口調を普段のそれに崩し、彼は紫煙を燻らせる。
「今までこんな面倒臭えことしたことなかったんだからよ」

「勿論、他にも方法がないこともないだろう。これよりもいい手段も、必ず存在する。時間がかなり掛かってもいいんなら現状維持でもいいしな。だが」

早いほうが、いいんだろ？ と諭すように言う。彼の中では既にこの方向性が決定してしまっているのだろうか。

「こんな賭け、避けたほうがいいことは瞭然としている。だから、お前次第だよ。決定権はお前にある。寧ろそれは義務だ」

そして彼は私の目を見る。

「やるか？」

つらくないわけがない。それは明らかだ。再起不能どころでは済まないかもしれない、ましてやそれをしたところで何も変わらない可能性も、低くはない。怖くないと言えば嘘になる。怖いと言っても、それだけでは足りない。混沌とした、先の見えない不安。ハイリスクでローリターンな賭け。^{ギャンブル}

私は彼のその目をしっかりと見返す。その奥に潜むものを覗き込むように。しかし、それはやはり判然としない。

けれど。

それでも。

「……ええ、やりましょう」

彼について行くと決めてしまったのだから、彼が提案した時点でそれは、既決なのだ。

そう言う私を見、彼はにやりと笑いながら「ありがとう」と、微塵も感謝の気持ちを感じられないような返事をする。

「やるからには、手加減は無用です。あなたの全身全霊、全力を以って私をぶち壊してください。私は手強いですよ」

「いや、抵抗はすんなよ？」

んー、と彼は大きく伸びをし、

「じゃ、早速始めるとするか」

戦いが始まった。

005

「カナは、私たちのことなんてどうでもいいんでしょう？ 気付いてるんだから。いつも俯瞰して、達観して 気分が悪いのよ」

友人。

「水島？ ああ、ヤダヤダ。いつつも余裕ぶってるし、俺らのことなんて見てねーよ、あれ。どこのお嬢さんかってんだ」

クラスメイト。

「あいつの目は私たち教師を冒瀆している。腹に一物を抱えながら、それを決して露呈しない、しかしその瞳が物語っている。だからあいつは嫌なんだ」

教師。

「カナはいつでもなんでも自分で決めて、私たちを頼らなかつた。なのに、どうしろっていうのよ。いまさら、優柔不断になるなんて」

母親。

「奏は、私を親として見ていない。必要だと感じていない。だから

私も思う。必要ない、と」

父親。

以上、彼の発言から抜粋。

「まだまだ続くけど、今日はこれくらいにしておくか」

そう言つて、彼が話を切り上げてから、すでに数分。辺りは暗いが、それを気にすることもなく、気にする余裕もなく、私は呆然と座っていた。まさに思考が停止している。ただただ呆然と何を考えるわけでもなくそのままの姿勢を保つ。

それが、精一杯だった。

「大丈夫か？」

彼の問いかけに、視線だけで応じる。これは暫く、動けそうになり。思っていたよりも重症だ。

彼の話。

「どんな気分だ？」

「……最悪ですよ……」

問いにどうにか答えると、彼は私をにやりと見てから、「煙草、吸ってくるわ」とその場から離れる。流石の彼も居心地が悪かったのか、それとも私に気を遣ったのか、それもやはり判然としないことだ。

始め彼は、私の周りにはどのような人がいるかを尋ねてきた。その話が半分までで、そして残りの半分が本題だった。その内容は、よく言えば先ほどの彼の言ったような「異なる視点」であるだろう。ただ、蓋をあけてみれば。

「……こんなの、ただの陰口じゃないですか……」

私の呟きは、既に姿を消した彼に届くことはなく、無音の中に溶け込んで消失する。自分はあまり独り言を言うタイプではないと思うが、それでも今だけは言葉に出さなければ、要領オーバーで、きつと潰れてしまうだろう。

話の内容は、主に先ほど抜粋し列挙したような、各人からの言葉についてだ。しかしこれらは残念ながらその当人たちから聞いたわ

けではなく、全てが全て根拠のない事実である、妄想ともいえる彼の憶測の言だ。前半の話は、そのための情報収集であって、だから私が口を開いたのは、開けたのは、そこまでだった。

「ああ、もう」

髪が乱れることを気にもとめず、両手で頭を抱え込む。彼の言葉が、脳裏に焼き付いてこびりついて、どうにも思考がスムーズに進まない。加えることに、彼の代弁が全て各人の声を用いて脳内で再生され、反響する。ステレオのように左右から異なる言葉が発生し、それらの波が重ね合わさることで、強めあい弱めあい、また大きな定常波を形成する。それがまた強めあい弱めあい　その繰り返しだ。そして他に干渉するものがなければ、これは永遠に続くだろう。この場から脱却するには、これらとはまた異なる波を介入させ相殺するか、順応するしか方法はない。

早い話、間接的ないじめを受けたようなものだ。私に今までそのような経験はなく、こういう時どう対応すればいいのかも分からない。これは長期戦になりそうだ。彼の言うとおり、暫くは「再起不能」になる可能性も、現状からすれば考慮しなければならない。

「くそっ」

それにしても、この先私はどうすればいいのだろう。彼が言葉を借りた方々と、どう付き合っていけばいいのだろう。挙動が不審になっってしまうことは否めない。普段のように接する自信もなく、そもそも顔を見ることがすら出来ないかもしれない。私の胸を刺すのは彼の妄言ではあるが、もしも彼ら彼女らから実際にそのように言われたとしても、なんら疑問を抱かないだろう。それほどまでに彼の言葉は私が考えうる範疇内で、大いに現実味を帯びた言葉たちであり、同時に私が日々、いつその言葉を掛けられてしまうだろうと、恐怖していたものたちでもあった。

「……もう」

もう全てがどうでもよく感じられた。

自己の否定、崩壊、アイデンティティの喪失　成る程、結構な

ものだ。これは素晴らしい。目的達成は近いだろう。あとこれを二三度繰り返したとすれば、それは達成されるはずだ。確信を以ってそれは言える。

しかし、だ。

しかし仮にも、私がもうこの場に来なかったらどうなる？ 中途半端に見失った自分。神経が過敏になり疑心暗鬼の日々を送る。それはここに通り続けたとしても避けられないことではあるし、寧ろ来たほうが悪化することだろう。だが、このような状態に一人でい続けることは、あまりにも危険すぎる。

「……来ないと、なあ」

今までは自由参加だったこの集合も、これから強制的に参加しなければならぬということだ。気楽さが異なる。権利から義務へと変化するだけで、これほどなのか。

「どだ？ もう大丈夫か？」

彼が『家』の入り口の外からひょっこりと顔を出した。どうしてか安堵してしまった自分に気づいた。それを隠すようにしながら、ええ、と返事をする。

「少なくとも、もう帰れるくらいには回復したように思います」

「そか、よかった」と、彼は無邪気そうに笑いながら腰を降ろしてから。

「すまない」

頭を下げた。

しかしその口元からは既に笑みは消えており、信じがたいことに、どうやら今回はこれまでは異なりいたって真面目に謝っているようだ。突然のことなのにのろのろと思いを働かせるが、彼が何を言わんとするのか良く分からなかったので「何がですか？」と下げたまの彼の頭の、ちょうど旋毛の辺りをめがけて問うた。そのまま彼は動かずに、「お前のことだよ」と言う。それでも、今の私には意味がわからない。

「お前のこと、とは？」

「今のお前の状態に決まってるんだろ」

どこか気に入らないことでもあったのだろうか。吐き捨てるように彼は言った。それでも意味が分からずに、小首を傾げつつ、訊きかえす。「今の私がどうかしたんですか？」

「だから！」

はっ、と大きな彼の声に我を取り戻す。「お前を必要以上に傷つけちまったって言うてんだよ！」

漸く地に足が着いたように感じられ、と同時に彼の言葉を理解し、「頭を上げてください」と言うと、彼は緩慢に面を上げた。未だ俯きがちなその瞳から彼の感情を推し量ることは、いつもより容易であつた。

「決定も決断も私がしたのに、どうしてあなたが謝るんですか」

突き刺すように、彼の瞳の奥目掛けて言った。その瞳からは、初めて会ったときからうつすらと感じられた自信や余裕というものがわずかばかり欠如している。明らかに、平生とは異なっている。

「それに、たいしたことありませんし」

「たいしたことないだって？」と彼は嘲笑うようにして続ける。「じゃあさっきのお前は何だよ。ずっと動かなくて、俺の質問の意図さえもつかむことも出来ない　普段のお前とは、えらい違いじゃねえか？　え？」

「あなたの話は分かりづらいんですよ」必死さを気取られないように抵抗する。「さっきのは、ちょっと面倒だっただけです。それにそんな必要ありませんよ」

「は？」

「あなたが謝る必要なら、ないって言うっているんです。」

彼は、はっと吐き捨ててから言う。「あんに決まってるんだろ。俺がこの方法をお前に提供し、俺がお前に対して行っただ。十分な理由だろ」

「足りませんよ、そんなのじゃ」

わざとらしく、何時もの彼のように余裕をもって答えた。彼の眉

がピクリと動くのが分かる。

「あなたがしたのはただの代弁です。あなたの言葉じゃありません。だから、仮に私が必要以上に傷ついていたとして、あなたに責める必要ところは全くありませんよ。寧ろあなたの行為は賞賛に値します」

「あんな妄言が、か？」

「ええ、そうです」

彼の視線と私の視線が、がっちりと重なった。その剣幕に気圧されそうになるが、どうにか目を逸らさずに対峙することが出来た。
「あれは、私が昔から望んでいた言葉です。早く、いつそのこと、早くそう言ってくれば楽になれると、望み続けてきた言葉です。だから、少なくとも私の中では」

あれは妄言なんかではなく。

現実だ。

「なに、馬鹿なことを言ってたんだ」

彼はそれでも退くことなく、私の目を見続ける。「そんなの、直接聞かなきゃ分かんねえじゃねえか」

「考えてもみる。俺はそんな奴らと会ったことも話したこともないお前をどう思っているかなんてそんな質問を、今まで誰一人にもした事がねえんだよ」

彼は座ったまま、身をこちらに乗り出す。「だから、お前に言った全ての言葉は間違いなく妄言だ」

そう訴える彼を、一瞥してから。

「それが、なんですか」

そう答えると彼は幾分狼狽するように、乗り出していた上体を元の場所にまで戻す。

「現実であろうと、妄言であろうと、あなたが言った言葉ですよ」
言いながら、やっと気付いた。どうしてこれほどまでに、彼に抵抗していたのかに。それはきつと、この言葉が言いたかったからだ。
「あなたの言葉に、嘘はありません」

言い切った。

もうこれで言いたいことは全て言い切った。言い終えた。自己満足し自己完結し、開いた口を硬く閉じた。

「いや、そんなことはない」

彼の反論。焦燥に駆られるようにもう一度身を乗り出す。

「俺の言葉は」

が、しかし、もう我慢がならなかった。彼がそこまで言ったところで私は立ち上がり、彼の口に手を当てて次の言葉を封じる。彼は大きく目を見開きつつ、私を見上げる。

「侮辱しないでください」

「……は？」

私が手を離すと、彼は随分と気の抜けた声を上げた。それに構わず、続きを述べる。

「私はとつくの昔にあなたについていくことを決めているんです。

誰であろうと京都弦一郎を侮辱することは、私が許しません」

そして、一拍の間を置き、彼の口に当てていた手の人差し指で彼をさす。「それがあなた自身でも、です」

「反論は？ ないですよね」

「……わかった。ないよ」

「どうでもいいことで帰り遅くして悪かったな」と彼は言いながらのろのろと立ち上がると、『家』から出て辺りを見回す。その背中に、「何かあったんですか？」と問う。

「何って何が？」

「さっきのことです。戻ってきたかと思ったら、突然あんなこと言い出して」

先ほどの彼の瞳に、新たに付属されていた感情。それは『焦り』だった。

「もしかして幽霊でも見ましたか？」

彼が後ろ手に外に出ることを示したのを見て、その背中を追って『家』から出る。彼は声を上げて笑いながら言った。

「幽霊なら、どんだけ良かっただろうな」

006

その日から、また数日後。

彼の言葉に、既に私の精神は順応を始め、一日ごとに掛かる重圧は日に日に減少を始めていた。しかしそれでも蓄積されたそれは消えることなく、ただ落ち葉のように降り積もっていく。きつと最下層はまるで腐葉土のようになっていくことだろう。それが何時のことになるのかは、分からないけれど。

彼にはこの問題の終わりが、どうやら見えてきたようで、そのことについて彼は何一つとして言うことはなかったが、私から見てもそれは如実に受け取れた。自覚はないが、彼が思うのならばそうなのであり、おそらく、今日あたりでキリがつけるはずだと予想を立ててここにやってきたのだが、しかし、そこに彼は居なかったのだ。

場所を間違えたのかと思った。

いや、間違いなくここだと『家』に入って待っていても一向に彼はやって来ない。とても寝心地が良いとは言い難い床に背を預け、鞆を枕に仰向けになりつつ、よくここで寝られるなあ、あの人、などと思っていれば。

日が暮れていた。

これは比喻などではなく、現実である。どうやらほんの少し気を抜いただけで、私は寝てしまっていたのだ。加える事に、それはもう豪快な寝相だったらしく、鞆に顔を埋める形となっていた。一瞬の間を置いてそれらを理解すると、私は即座に飛び起きて、折れてしまっているスカートを直す。顔が少しばかり熱い。逆立っているように寝癖のついた髪を押さえて、今更のように『家』の中を見回すが、無論のこと彼の姿は見受けられない。

腕時計に表示されている時刻を見、計算する。彼を待ち始めてから二時間、眠ってから約一時間半経っている。入り口から見える空

は、黒と紅がせめぎあっており、黒の方がやや優勢であろうか、時刻から鑑みてどうやらまた日が短くなったようである。冬が、近づいている印か。

もう、日がない。

髪に当っていた手を離し、寝癖が直ったことを確認すると、鞆を手に取り立ち上がる。立ちくらみに襲われながらも『家』を出、歩道に人がいないことを確かめてから土手を上る。

私が起こされていないことから、また起きるのを待っていない点から、彼はとうとうあの二時間では帰ってこなかったことが推測できた。これは会ってから数週間のうちで初めてのことと、少なからず今の私は動揺している。ただでさえ暴言を吐かれ続けて精神的に参っているのだ。ここ数日の心の抛り所となっていた彼が現れなかった。この事実、余計に心理的不安を助長させることだろう。まあ、それを言っているのも彼なのだけれども。

あの解決法を始めてから、案の定私は、人の目をこれまで以上に気にするようになった。話しかけられてもろくな返事をする事も出来ず、言葉は尻すぼみになり、会話は中断する。そして妙な罪悪感に苛まれながら、私はここに向かい、彼に会う。彼は優しい言葉など一言も発することなく、むしろ逆で。それによってまた私は不安定になる。

その繰り返し。

空を見上げる。既にいくつかの星が煌いていた。目を細め、暫くそれに見入る。

彼は、約束を破るような人間ではないはずだ。今日ここで会う約束を、しかし私たちがしたわけではないけれど、私が来る可能性が零ではない限り、ずっとここに留まっているような人だ。彼との会話の中でそのような点は数多く見受けられた。だからこそ私は彼が居ることを前提にここに向かうわけであり、きっと彼の方からしても、私が毎日来るであろう事は簡単に予測できるはずだ。

いや、待て。

仮に、仮に。もしもの話として、彼も彼の言葉たちと同じ感情を抱いていたとしたらどうする？ 最初は抱いていなかったとしても、そう変化していくことはさして難しいものではないだろう。まして、その言葉たちは他ならない彼の口から紡がれているのだから、寧ろそれは自然のことといっても差し支えないだろう。

「きりがいい、よ」

思考を断絶。これ以上はもう無意味であると悟り、見上げている星の数が幾許か増えていることに気付き、私は足を進めた。そしてそのことを紛らわせるために、新たな疑念を抱かせる。

私は、あのようなところで寝てしまうほど、ずれていただろうか。自らの思考について噴出してしまふ。しかしそれは今だからというだけで、もしも最悪の事態（あまり想像したくないもののなので割愛）に陥ってしまっていたとしたら笑い事ではすまなかっただろう。否、それで済ませられるだけならばまだ良い。もしも、こうして思考することすら出来ないことになってしまっていたとしたら

冷や汗が出た。よくも、あのようなことを出来たものだ。普段ならば、いくら疲れていようと睡眠時間が足りていなくなると、そんなことはありえなかった。もしかして、ともう一つ疑念を抱く。

私はもしかして、変わってしまったのではないか？

彼は言った。アイデンティティを崩壊させる、と。それはつまり、根底から自分を作り直すということだ。最初の崩壊が、数日前。それから二十四時間置きに数回。たったそれだけで、私という人間が、再構築されてしまったのだらうか。男子三日会ざればとはよく言ったものだが、しかしそれは基盤が崩壊した場合ではない。私の場合とは違う。つまり、再構築しさらに上乘せ分を築くには、三日どころではすまないということだ。明らかに間違った、おかしい三段論法ではあるが、彼のいない今、そう判断するしか私には出来ない。ではここで翻って、と心のどこかで声がした。気がした。翻って、彼に影響されたのではないか、と。

成る程それは射た発言かもしれない。と私の中の誰かを褒め

る。確かに、彼の影響を受けたと考えれば以外にすんなりと自身の行動を受け入れることが出来る。加える事に、彼と私が出会ってからは二週間あまり。それでも少ないことに変わりはないが、数日に比べればその差は歴然としている。比較して、こちらの方に分があるのは明白だ。嫌かどうかで問われたら、それは嫌だけれど。

それを確かめるためにも、明日も、来てみよう。

それでも彼がいなければ、それはきつと、問題の解決に至ったということなのだろう。そう解釈するしか他はない。それに、既に達成への道のりの半分辺りまでは来ているはずだ。残り半分は、彼がいなくて多少のタイムロスを食うというだけのことなのだから、自分一人でも、たどり着くことが出来る。

「独りじゃない。俺がいる」とは彼の言っていたことだが、それも今となつては頷ける。今こうしている間にも、心のどこかには当たり前のように彼がいて、こちらを俯瞰するように眺めているのだ。たとえ困難に至ったとしても、手は差し伸べず、ただ俯瞰するように笑みを浮かべている。その諭すような彼の瞳に、これならもう、迷うことはない、不安ながらも、そう思う。

思考の転換。視点の転換。

彼が、教えてくれたことだ。これまでの人生の再確認のような復習のようなそれを、しかし彼に言われるまでろくに考えることはなかった。いや、考えてはいたのだ。ただそれが浅いというだけで、薄いというだけで、完全に理解してはいなかったということなのだ。少し前まではそこで満足をしまっていた。けれど、知ってしまった今、それは不完全なものであったというか確信を以って、断じることが出来る。

私は、未熟だ。

思い知らされた。それは疑いようもなく彼のおかげだ。分かっている気になっていたから、私は他人からの助言を拒んでいたのだ。自分一人で十分だと、そう考えていた。そのくせいざ決定するとなつたならば、その後にするかもしれない後悔を怖がって、他人のせ

いにして。押し付けて。

最低じゃないか。

後悔に臆病になって、人生に臆病になって、他人に臆病になって、しかもそれが全て独り相撲だと気付かされた。諭されるよりも前に、気付くことが出来なかった。どうしようもなく未熟だ。未熟すぎる、それまでの自分の滑稽さに笑いがこみ上げてきそうなのである。それが出来ないのは、そう感じながらも、気付きながらも、この場から脱却できていないからで。それが叶うことこそが、すなわち問題の解決に至るのだろう。それはどうあっても避けられない道で、だから今になって漸く、私は本物の『岐路』に立ったというわけだ。漠然とした靄のようなものではなく、明瞭と聳え立つ壁として、私の眼前に出現したのだ。

ここからが本番だった。独りではここまでさえ、たどり着くことが出来なかった。彼の手によつて、彼に促されることによつて、たどり着くことが出来たのだ。そしてここからは、どうあつても私一人の問題だ。どちらにせよ、彼の出る幕はない。だから、彼がいようと、いるまいと。

明日で、進路相談については終了だ。

「よし」

そう呟くと、何故だか胸がチクリと痛んだ。理由は分からないけれど、なにか思い残していることでもあるのだろうか。ならば、相談については終わりにするにしても、これから暫くは通い続けることにしよう。相談については一段落させて、息抜きに通うことにしよう。

そう思い至ったところで、ひときわ強い風が吹いた。冷たい風が頬を打つ。かじかんだ手をこすり合わせると、その暖かさが残ったままにブレザーのポケットに突っ込んだ。

そして、思う。彼は寒さに耐えられるだろうか。この生活に慣れてはいるだろうが、それでも寒いことに変わりはない。お世話にもなったことだし、明日は肉まんでも買って行ってあげようか、など

と思いつつ、私は家へと向かう脚を速めた。

007

「いやあ悪い悪い。昨日は急な用が入っちゃって、お前の携帯の番号なんて知らないし、そもそも俺は携帯すら持ってないしさ、どうにも連絡がつかなかったんだよ。本当、悪かった」

彼の『家』に入ってみれば、彼はすでに中にいて、さらに正座の形に座り、手は揃えて地面につけていた。所謂、土下座というものだろうが、彼の言葉のように重要さ全く感じられず、言うなれば親戚同士で交わす挨拶のようなものだ。はあ、ととりあえず曖昧な答えを返しておく。

「まあ、面を上げていただいてもよろしいですよ。寛大にして尊大な私は、あなたを許して差し上げます」

「なんかお前、本当に容赦ねえよな……」

そう呟きながら渋々顔を上げる彼に、「どうぞ」と、先ほど寄ったコンビニのレジ袋を差し出す。「これは？」と聞く彼に、「差し入れます」と答え、「どれが好きか分からなかったので、適当に選びましたけど」と付け足す。恍惚とした顔で彼はそれを受け取ると、肉まん一つに暖かいお茶を取り出して、袋をこちらに返してきた。いつもの場所に移り、腰を下ろしてから答える。

「別に、私の分はいりませんよ？ お腹が減ってるわけでもありませんし」

「いいのいいの。俺はこれで十分だからさ」

「……そうですか？」

しぶしぶとレジ袋を受け取ると、彼と同じように肉まん一つに缶コーヒーを取り出す。

「……普通、あなたがコーヒーを飲むんじゃないんですか？」

「苦いのは苦手なんだよ」

「子供ですか？」

じゃああれですかピーマンとかも苦手なんですかと訊けば、「いやいやそれは流石に食えるよ」と言う。が、「ただしチンジャオロースに限る」と付け足した。本当に子供かと突っ込みたくなる。「ていうかなんだよお前、こういう風の吹き回しだ？　気持ち悪いぞ」

「なんですかそれ。人に向かって気持ち悪いとは」

「いや、だって今までこんなもの買ってこなかっただろ」

「それには、理由があるんですよ」

「どんな？　と彼は首をかしげる。そのしぐさが妙に気に障り、それはまた後でお話します、と答えた。

それよりも先に、訊きたいことがあったからだ。

「昨日は、どうしたんですか」

一瞬、彼の動きが止まった。ほんの一瞬、気を抜けば気付かないほどの間を置いてから、彼は肉まんを齧る。「だからさっき言っただろ」

「急な用は、急な用さ。急すぎてその内容なんて覚えてねえよ」

「嘘、ですね」

深くを詮索するつもりはなかったので、「ただの興味本位な発言です。すいませんでした」と加えた。彼はもう一度肉まんを齧り、私の目を見る。

「……悪かった」

「別に、怒っているわけではありませんよ。ちょっと気になっただけですよ」

そう言って、私も肉まんを齧る。まだほんのり暖かい。時間をかけて咀嚼し、飲み込むと、再び彼に視線を合わせる。

「昨日で、終了と思っていました」

「あん？」

「悩み相談」

彼はその言葉に大きく目を見開き、口を開けた。どうやら私の目論見は正しかったらしい。

「……分かったのか」

「ええ。だから、昨日はいつもよりいくらか張り切って来てたんですよ。それなのに、いないなんて」

「だから悪かったって」

結局お前は何が言いたいんだ？ と彼に訊かれ、返答に困った。

今日は彼を責めるつもりなどない。ただ単に、自分の思いを伝えようと、感謝の旨を伝えようとしていたはずだ。頭の中が整理できていない。ここにきて、渦巻き始めた。

「私は、ですね」

それでも伝えようと、声を振り絞った。充分絞った雑巾をさらに絞っても水は滴ることなく、握った手に水分を感じるだけのように、彼に伝えたい感情を感じても、それを言葉として収束することが出来ない。それでも力を加えて、搾り出す。

「私は、もう」

彼の眉毛がぴくりと動いたかと思うと、以前私がしたように、今度は彼が私の口を手で押さえた。というより、私から肉まんを奪い取り、それを私の口に押し付けたのだ。口腔内いっぱい肉まんが押し込まれる。即座に彼の手を払いのけると、殆ど噛むこともなくそれを飲み込む。半分ほどを、一口で食べていた。

「と、突然、なにをするんですか、あなたは」

驚いて身を乗り出せば、今度こそ手で口を押さえられた。また肉まんが押し込まれるのかと、反射的に自分で口を閉じていた。

「ああ、わりい。手が滑った」

謝る風もなく、彼はそう言った。美味かったか？ と続けて尋ねられて、口を押さえられているのでこくこくと首肯すると、そりゃよかった、と言う。

「お前が言いたいことは分かった。分かったから、俺の話を聞け」
そう言われても何も言えないじゃないか、と言いたいけれど、それさえも言えない。仕方がなく彼への抵抗を解けば、

「今日で、京都弦一郎のお悩み相談室は終了します」

なんですかその名前と言いたいが言えないもどかしさ。それよりも。

「お前もきつと、それを言いに来たんだろ？ もう終了間近であることを見抜いたんだ。そこに思い至るはずだよ。ここからは私の問題だ てな。違うか？」

躊躇うことなく、首肯する。それを見て彼も頷くと、続けた。

「ならば自分から言ってしまうおう。形はどうであれ、私が彼に頼んだのだから、それが礼儀というものだろう。そして、いざ言うとなったら、どう伝えればいいのか分からなくなつたわけだ。いやあ、用意が足りなかったな。残念でした」

その言葉への返答すら思いついていないのに、何か言わなければと口を開こうとするが、相変わらず彼が抑えているので、ただもごもごと口元が動くだけだった。言葉に出来ない。悔しさが、込み上げる。

「だからお前には言わせない。それすら言えないやつには、言わせない。これで、悩み相談は終わりだ」

そう言つて、手を離す。

「後のことは自分で頑張れよ。お前が決めたことなんだから、俺はもうそれは管轄外だ」

「……はい」

たった一言だけでも、つらかった。声が上ずっているのが自分でも分かる。この、たった一言を言うためだけに、全ての体力が使われたかのように、どっと、疲れが押し寄せてくる。

「まあ、少し落ち着け。ほら、俺のお茶やるから。コーヒーよりか落ち着くだろ」

わざわざ自分は口をつけていないことを私に確認させてから、それを手渡した。すっかり冷めて、ぬるくなっている。キャップを外し喉を潤せば、彼の言ったように、落ち着いた。

「もつ、大丈夫です」

「ん、そっか」

言いながら、彼は私の缶コーヒーを開けた。そして一気に呷る。えらく苦かったのだろう。表情豊かに、顔を歪ませる。

「おま、これ、ブラックじゃねえか」

「あなたのイメージに沿っただけですよ。本当に意外ですね」

ヘビースモーカーはイコールでブラックコーヒー好きという私の固定観念はこれにて碎かれた。やはり、現実ドラマや漫画とは一味ちがうものだ、と思った。

「たとえブラックコーヒーとは言っても、缶コーヒーですよ？ 基本的にどれも甘いじゃないですか」

「あ？ わっかんねえよそんなもん。苦げえもんは総じて苦げえんだ。苦さのレベルなんか知るか」

「そんなに嫌いなんですか」

「悪かったな」

そうは言いつつも、彼はそれを残す気にも捨てる気にもならないようで、半分ほど残っているであろうそれを、ちびちびと口をつけてはその都度、顔を歪ませる。それを見ながら、私は肉まんを食べる。冷めていて、あまりおいしくはない。それを私が食べ終える頃に、彼は最終的に意を決したのか、もう一度缶コーヒーを一気に呷った。

「お疲れ様です」

「……はいはい、どうも」

口直しと言わんばかりに残っていた肉まんを、彼は一口で食べ終える。私はその包み紙と缶を受け取って、レジ袋に突っ込むと、また彼に向き合った。

「しかし、寒くはないんですか？ ずっとこんなところにいて」

「ああ、慣れればどうって事ねえよ。この地面だって、慣れれば結構寝心地いいもんだぜ？」

「理解しかねますね、その発言は」

「実験済みである分、余計に。」

「足つばマッサージ用スリッパの上に寝ているようなものじゃない

ですか。どこが寝心地いいんですか、それ」

「その例えは聞き捨てならないな。寝たこともない奴が」

「昨日横になりましたよ。それはもう最悪でした」

そこで気を抜いて寝てしまったのは誰か。あまり、考えたくはない。無論、そのことは言わないが。

「お前、なんで？」

「あなたを待っている間が、あまりにも暇だったからですよ。悪いですか？」

「悪かねえけど、よ」

「そうですね、どちらかと言えば、いえ、言わずとも、悪いのはあなたですもんね」

「……そうでしたね」

根に持つ奴め、と悪態をつく彼を視界の端に移し、私は川面に視線をやる。赤く染まり、風がいくらか強いのだろう、以前のように川底は見えない。

「どうしたんですか？ 一体」

つい、口に出してしまった。彼はどんな顔をしているのだろう。視界の端を意識して見ようとまではしない。寧ろこのままならば、彼の顔は見えないのだから、好都合だ。躊躇いを、持たずに済む。

「あなたは、あんな人じゃないとばかり思っていました。いえ、あんな人じゃなかったはずですよ」

「何が」

「昨日のことですよ」

「お前も、しつこいな」

「何があつたのかは、もう訊きません」

流石に、彼のほうも滅入ってしまうだろう。そもそも何度も訊いているのに口は割らないのだから、これ以上は無駄だと理解している。

「私の知らない『何か』があなたにはあつたのでしょうか。それはもう問いません。教えてくれないのですから。それに、プライバシー」

は保護しないといけませんしね」

「じゃあ、何を」

「『それ』があつて、あなたが『どう』なってしまったか、です」

「『どう』つて？」

「自分の胸に訊いてみてくださいよ。そんなこと。気付いてるんじゃないですか？」

「……知るかよ、んなもん」

視界の端から、彼が消えた。と思うと、直ぐに眼前に現れる。そして私に背を向けると、そのまま外に出て行ってしまった。片手には煙草のケースが見えた。喫煙の為だろう、と私は推測する。

「逃げましたね」

既に姿は見えないのだから、きっと彼の耳には届かなかったのだろう。ここで逃げるということは、私の予想もあながち間違つたものではないらしい。どこか彼から、これまでとは全く異なつた雰囲気を感じ取つたのだ。そのために、つい、あのようなことをまた繰り返してしまった。どうしても、どうしても気になつてしまったから。

しかし、それを彼が教えてくれないのであれば致し方ない。ちょうどいい頃合かと、彼が『家』の中に入る前に、立ち上がると、どうやら彼も戻つてきたようで、ちょうど鉢合わせとなつた。

「じゃあ、そろそろ、帰りますね。お邪魔しました」

「ん、了解」

そういう彼の瞳には、また異なる色が浮かび上がっていて。

「それでは、また明日」

そう言い、彼に背を向け一歩目を踏み出したところだった。

「いや、明日は無理だ」

「……は？」

一瞬、時間が止まつた、気がした。勿論そんなものは気がしただけで、私が固まっている今もこうして時間は流れ続けている。直ぐには、把握が出来なかった。

「……仕事でも、決まりましたか？」

「……………」

違うらしい。

「前も言ったかも知れねえけどさ、俺はこの生活に充実感を抱いているわけであって、だから、仕事に就こうなんて気は、さらさらないんだよ」

「どうでもいいですよ、そんなこと」

「どうしてですか、と彼に背を向けたまま問う。彼もそのまま、どうでもねえよ、と答えた。

「もう、俺の管轄外だって言っただろ？ お前はもう、ここに来る必要はないし、来てはいけねえんだ。本来俺なんかと対等に話したり悪い人間だよ、お前は」

「でもそれはあなたが」

「多少はキャラだって変わるさ」

たった数週間ですか、と言いそうになるのをこらえる。確かに、僅かではあるが、私は変わってしまったているのだから。

「だから、もうお前は来んな」

「……はい」

小さく頷く。

「では、進路が決まり次第、報告に来ますよ。それは別に、構わないでしょう？」

「ああ、今年度いっぱいはこちらにいるつもりだからよ。そしたら来い」

「了解しました」

それではまた今度、と背を向けたまま、声を震わせないように言うと、彼も同じように、また今度、と答えた。それを聞いてから、二歩目を踏み出す。続けて彼が何か言ったような気もしたが、振り返りは、せずに。

いくらか上り慣れた土手を上り、舗装された歩道に出る。人通りは、最近は寒さの影響で、段々と減ってきた。時間帯にもよるかも

しれないが、ただの数百メートルの直線なのに、見渡してみても、私のほかには二人しか見えない。一人は、私の前方を私と同じ方向に、ジャージを来てランニング中の若そうな男の人。もう一人は私の後方で、こちらに向かって歩いてきているスーツ姿の女の人。会社が大変なのだろうか、少し表情が険しい気もする。

私も、いずれはああいう風になってしまふのだろうか、と意識的に思考をそちらに傾かせる。普通の大学に入って、普通の会社員になって、結婚して、子供を産んで、育てて。妙に味気ない気もするが、それも決して悪くはないのだろう。

だけど、と心の中でつぶやく。音大に入って、成功すれば、普通とは離れることができる。好きなバイオリンを、いつまでも、弾き続けることができる。ほかのことに構うことなく、煩わしいことを除外して、好きなことに打ち込むことができる。

なんだ、と気付く。私は普通が嫌なだけなのか。人が普通に行い、享受することを、嫌がっているだけなのか。ただの、夢見がちな女子高生。固有名詞など用いる必要もない、どこにでもいる少女A。自分はその位置が嫌で、抜け出たくて。普通ではない生活を営む彼。汚らしい風体に、人と会話するには、適さない口調に態度。私の人生で、初めて出会った、普通とは違う人。そんな人と関わることで、まるで自分までも、普通ではないような感覚に陥って。

じゃあ、私は彼に、惹かれていたのか。
だから、私は彼に、惹かれたのか。

自分のことではないかのように、それは、にわかには信じがたかった。服を着たまま水に浸かったときのような、動きづらさを感じる思考を再開させるために、また、異なることに焦点を向けようとすると、不意に、さっき後ろを歩いていた女性が気になり、振り返ってみるが。

女の人は、いなくなっていた。

帰宅して、現在。

風呂上がりの湿った髪を撫でながら、私はベッドに横になった。仰向けに寝て、真つ白な飾り気のない天井を、ぼんやりと眺めながら、今日のことを思い出す。

あれから、結局、思考を逸らすことが出来なかったので、必要以上の時間を使って、ゆっくりと歩いて家まで帰った。様々な感情が、体内でうねりを上げ、体が重く感じられて、踏み出す足に力が入らなくて。

そして、彼のことを考えるのを極力避けるようにしていると、気になったことが、一つ。

あの、女の人だ。

私が河原沿いの歩道で振り返ったとき、その女の人はいた。しかし、次に振り返った時には、消えていた。それだけなら、別段気にすることでもないだろう。別の道に入ったという可能性が考えられるからだ。しかし、それには一つ的前提が抜けてしまっている。

あそこは、一本道なのだ。

しかも、私が女の人を見た場所。そこは、どうしたって横にそれることが出来ないような場所だった。ということは、あそこから彼女は、河原に降りたことになる。さらに付け加えることに、そこは彼がいる場所の、ちょうど上であつたように記憶している。そこから短絡的に推測すると、彼女は、彼の元に、向かつたということだ。彼女が、彼に関係しているのか。

そこまで思い至って、自分の思考を放棄する。結局は彼についての根拠のない推測を立ててしまっているではないか。物事がそれほどまでにご都合主義であるはずもない。彼についての思考はやめよう。そして、思い浮かぶのは、その女の人。思い出せば思い出すほどに、どこかで見たことのあるような既視感を抱くようになった。

私は人の名前、顔の特徴などを憶えることが苦手だ。克服を半分

諦めてしまふほどに、苦手だ。

だから、会ったことがある人に初めて会ったようなリアクションをとってしまうこともあるし、逆に、会ったことがない人に以前からの知り合いのように声をかけたことが、実は私の短い人生の中で二三度あったりする。前者は、まあ、よくあることだけれど、後者は、幼少の頃のことなので、最近では全くない。というのも、まず他人の出方を見てから動くようにしているというのが理由なのだけれど。

そういった場合、その、初めて会った人物に私は、強烈な既視感を抱いているわけだが、今回はそれが異様に強い気がする。いつもそんな風に思っているよう気もするので、まあ、当てにはならないが。

嘆息。

進路がいまだに決まっていけないとはいえ、仮にも私は受験生だ。受験勉強は欠かすことなく続けている。今日もそろそろ始めなければ、と思い、上体を起こす。机に目を向けると、自然とその脇に置かれているバイオリンに目が行った。最近弾かないことはまずないが、時間をあまりとることが出来なくなっている。その脇に置いている練習用の電子バイオリンを手にとると、いつもの手順をふみヘッドホンをつけてから構え、すう、と息を吸い、ゆっくりと吐く。自然と顔がほころぶのが、自分でも分かった。

009

それから、以前の日々が帰ってきた。そこには彼はいない。通学路は変えていないので、毎日あの河原を見ながらの登下校になるのだが、いつものように『家』はあるというのに、彼の姿を見ることが出来なかった。少し寂しい気もしないでもないけれど、それはもう、気にしない。

そんな日々が続いた、数日後の今日。それは、突然のことだった。

いつものように、河原の側を歩いていった。彼の住んでいるブルーシートに目を向けることは、もはや癖のようになっていた。無理にそうしないように努めるのも癪に障るので、躊躇いもなく視線を向けると、そこには。

二人の男女が。

一人は、先日見かけた彼女だろう。こちらに斜めに背を向けているが、そのときと同じようなスーツを身にまとっていることから、そう推測された。もう一人の男性も、スーツを着ていた。

そして、女性が男性に詰め寄るようにして、向かい合っている。女性が何かを怒鳴っているということは分かるが、距離的に聞き取れることは出来ない。大きく口を開く女性とは対照的に、男性のほうはほとんど口を開くこともなく、目を伏しているかのようにも見える。

「！」

より一層声を荒げつつ、女は男に詰め寄った。自分よりも背の高い男のネクタイを握り締め、胸倉をつかむように持ち上げる。男はそれに対して、抵抗の一つもとろうともせず、むしろそれを望んでいるかのように女を眺めている。

そして、そこで、気付く

あれが、彼だということに。

それまで、何故気づかなかったのかと疑問に思ってしまうほどに、それは彼の顔である。気づかなかった理由といえば、以前のように汚らしい風体ではなかったからだろう。髪の毛の長さこそ変わらないが、前髪は両目がしっかりと確認出来るほどには分けられており、髭も剃り落としている。さらには以前私に向けた目つきでさえなく、傍から見れば、それはどこにでもいる、所謂、普通の会社員といった外見であった。

しかし、そこではない。

それだけであれば、瞬時とはいえなくても、数秒で気づけたことだろう。私にそれが彼だという判断を鈍らせた最大の理由、それは、

彼から、以前の彼のような雰囲気は抜け落ちしまっていたからだろう。遠目ながらも、彼の目からはとても以前のような生気は感じられないし、大仰に構えた風な態度も見られない。まるで、別人のように見えた。

そう、別人だ。私は確かに、人の名前を覚えることは苦手だ。しかし、その人の雰囲気だとか振る舞いだとかは、忘れることはない。会ったことがない人も、会ったことがあるかのように感じてしまうのは、たまにそれが似通った人がいてしまうからだ。だから彼のような雰囲気を持つ人は見たことがなかったから、直ぐに覚えることが出来た。しかし、今の彼は。

見飽きるほどに、見慣れた人間だ。

それが、彼だと判断できなかった最大の理由だろう。どこにでもいるような、普通の人。判別をつけることが難しいから、興味を持つことが出来ない、そんな普通の人間。

なんとということだ。私と会わなくなったほんの数日の間に、彼は変わってしまったのだ。否、変化が進んでしまったのだ。それこそ、私が彼に出会ってから数日で変化したように、それ以上の加速度を以ってして、彼は変わってしまったのだ。

私は愕然とした。久方ぶりに出会うことの出来た普通ではない人間が、たった数日で、それ以外のものへと降格してしまっているのだ。目の前にいるのに、それはもう違う人間になってしまっているのだ。糠喜びにも程がある。滑稽ですらある。例え、暫くは会わない約束をしていたとしても、だ。

あちらの視界に入らないように気を配りながら、私は彼とその女性の横顔がはっきり見えるくらいまで、位置を変える。間違いない。彼だ。そして、先日見かけた、彼女だ。見覚えのある、しかしどうしたって思い出すことの出来ない、その女性は、なおも彼のネクタイを握り締め、怒号を浴びせている。彼も変わらず、まるで他人事であるかのように、それを眺めている。やはりその目に生気はなく、軽く開いた口からは、何か言葉が漏れているのだろが、こちらま

で聞こえるわけもない。

何が原因だろう、と不意に、当然に、真っ先に思い浮かべるべきであろう疑問が浮上した。男と女。凡そ想定されることといえば、勿論色恋沙汰であろうが、幾分二人の年の差が開きすぎているように見て取れる。聞いてはいないが、彼はまだ三十歳にも至らないだろうし、女性のほうも若くは見えるが、それでも見たって四十歳は越えている。さらに言うならば、明らかに、彼女の振る舞いが恋愛によるところのものではなく、それはまるでやり場のない思いをただ吐き出しているだけのような、彼のことをただのストレスの解消とは思っていないかのような、そんな風に見える。

彼の唇がかすかに動く、しかしそれに構うことなく、女性は叫び続ける。

私が足を止めてから、既に十分は過ぎていた。呆然と立ちすくみ続ける私は、それが永遠に続くかもしれないとさえも思ってしまった。しかし唐突に、彼女は彼のネクタイから手を離すと、捨て台詞のように何かを言い、そのまま土手を登ってくる。私は焦りつつも、知らぬ素振りをしつつ、彼女が進むのとは逆の方向に歩いていた。案の定彼女は私に気づくこともなく、去っていった。立ち止まって振り返り、それを確認すると、次いで私は河原へと視線を落とした。そこには彼が、彼女と向かい合っていたその姿勢のままで立ち尽くしている。それを確認すると、私は数日振りの土手を下り、彼の元へと向かう。

もう、別人となってしまった彼に、私は、なんと言うのだろう。

「お久しぶりです」

その答えが、自分の中で出る前に、彼の正面に立ち、私は彼に話しかけていた。彼は大層驚いた風に、目を丸くしている。

「見たのか」

「見ちゃいました」

あっちゃあ、と彼は顔に手をやり、天を仰ぐ。しかし直ぐに向き直ると、すっかり形の崩れたネクタイを締めなおし、スーツの襟を

正す。そしてポケットから煙草のケースを取り出し、その中の一本を加えると、今度はライターを取り出し、火をつけた。

「お前、気配消せたのな」

「いや、消せるわけじゃないですか。そんなの、漫画じゃあるまいし」

「ああうん、そう？」

「……何も考えずに言いましたよね」

「ご名答」

銜え煙草のまま、彼は微笑した。しかし、依然としてその目に生氣は宿っていない。瞳の奥では、笑っていない。彼の意図を汲み取れなかった自分を一瞬悔いた。その代わりに、何か話すことはないかと模索する。

「……スーツ」

「あん？」

「スーツ、持ってたんですね」と、無理やりに搾り出した疑問をぶつけてみる。「それに髭も剃っちゃって。軽く見違えてしまいましたよ。ただの会社員かと思いました」

「ただの会社員が河原に住んでるかよ」彼は苦笑しつつ言う。「河原にいる会社員なんてのは、リストラ寸前だって相場は決まってるだ。それに、俺は別に仕事に就いたわけじゃない」

残念ながらも、と付け足すと、彼は煙草を指で挟み口から離すと、煙を吐きつつ煙草の先の灰を落とした。

「このスーツはな、昔の仕事のときのものなんだよ」

「昔の 仕事？」

ああ、と彼はどこか寂莫とした雰囲気を漂わせながら、首肯する。「仕事って言っても、まだ本採用？ みたいなものじゃなくて、研修みたいなもんだっただけだな。その段階ででっけーミスやらかしちまってさ、もう本当に、一生掛けても取り返せないくらいにどうしようもなくって、だから、そこで俺は終了」

「クビ……ですか？」

「いいや、違うよ」無理に笑うように、「俺が自分でやめたんだ。そのミスって言っても、それは会社にとってのもんじゃなくて、俺にとつてのもんだったから。だから仕事はそのまま続けることも出来ただけど、自分で、それだけは許せなかった」と言つて、彼は目を伏せた。

彼がどんな仕事をやっていたのかは知らない。しかし、その仕事に対して、強い思い入れがあることは今の彼の話から容易に読み解ることが出来た。本当は、その仕事をやめたくはなかったはずだ。続けたかったはずだ。自分のミスで、自分が許せなくてやめたというのも、他の誰かが言っていたのなら、それはクビになった言い訳として映るかもしれないが、彼が言うのなら、それは確たるものとして信じる事が出来た。彼の自責というものは、他者のそれをはるかに凌駕するものだろう。数日前に、そう感じ取ることが出来た。ゆえに、彼のその行為に、疑問の一つすら浮かべることはなかった。

彼がそこまで思い入れている職種に、わずかながらにも興味はわいてしまうが、それを訊ねることは控える。今も彼は何も無い風を装つて煙草を吸つてはいるが、目が以前と異なることは明瞭だった。わずかに困惑の色が見て取れる。私が突然訪れたことが原因なのか、それとも。

「さっきの人は、一体」

言つた瞬間に、後悔した。平生を努めようとしていたであろう彼の表情が、途端に変貌したのだ。瞳の困惑はさらに色濃いものとなり、唇がわずかながらにも震えてさえもいる。

訊いては、いけなかった。なぜ自分はそれがわからなかったのだろう。いや、分かっていた。それなのに、なぜ私は、彼に訊いてしまったのだろう。

「ごめんなさい、なんでもありません。忘れてください」

そう苦し紛れに付け加えはしたが、そんなものに意味は存在しない。失言を取り消すことなど、できない。付け加えることで、むしろ

る強調してしまっただけしか言いようがなかった。彼は、より一層重く、堅く、押し黙る。

自分はどうかしてこう、大切なところで気が回らないのだろうか。空気が読めないのであろうか。

苦しそうな彼を見て、苦しむのは、自分なのに。

「あの人は 俺のせいで悲しんでいるんだ」

答えなくてもよいのに、答えてしまう彼は、優しいのだろうか。よく分からない。辛そうな顔で、銜えていた煙草を摘み、地面に落とし、つま先で火を踏み消す。煙が、一瞬強くなった。彼は、それを睨みながら。

「俺が、責任を取らなければいけない。俺のせいだから、俺がいけなかったから。今更なんて関係ない。俺は、そのためだけに、今も尚、こうして生き続けているんだから。醜く、生き続けているんだから」

そのとき、私は彼の言葉を、まるでテレビのCMを見ているような感覚で聞きながら

「俊哉^{としや}は、俺が殺したんだから」

あの女性 岩代良美^{いわしろ よしみ}さんのことを思い出していた。

第二章

001

時間は、遡る。今から、十数年前の話だ。

登場人物は、当時の私。記憶によれば、まだ幼稚園生　おそらく五歳の頃　で、舞台はなんの変哲もない住宅街。しかし、そこは当時の私を知る場所ではない。母親との散歩の最中に、迷ってしまったのだ。何処を見渡しても同じような道、同じような家。ここが住宅街であると言うことは子供心ながらも気付いてはいたが、しかし、いくら歩こうと、見回そうと、母の姿は見えない。

この頃の私は、若干大人びた風なところがあった。サンタクロースが本当はいないということにも気付いていたし、昔話の大半が作り話であるということにも気づいていた。気づいて、しかし、それを誰一人にも話さなかったのが、私自身がそう思っている原因である。

そして、気づいてしまっているが故に、そういった物語を斜めからしか見ることが出来ず、その頃に子供が備え付けるはずの感受性というものが幾分希薄になってしまっていた。感動して泣いたりだとか、楽しくて笑ったりだとか、ハッピーエンドに安堵したり、バッドエンドに悲しんだりということは、皆無とっていいほどだ。感情表現というものもなかなか容易に出来たものではなく、だからその時、涙を流してはいなかった。焦りすら感じていなかったはずだ。

そんな時、だった。どこからかピアノの音が流れてきた。曲名は今となつては思い出すことは出来ないが、子供でさえ分かるような有名な曲であったはずだ。それがクラシックであったのか。それすらも、分からない。しかし、それは感受性の欠如している私を思わず立ち止まらせるほど、魅惑的で、上品で、美しくて。

音楽に、初めて感動した瞬間。

そして演奏を、最後まで聞き入り、その余韻まで噛み締めてから、私は駆け出した。

なぜそんなことをしたのか、それは今の私でも分からないし、当時の私でも分からないだろう。体が反応した、とでもでも言うべきか。とても、正常な思考ではなかったような気もする。本能のままに、というか。

そして出会ったのが、岩代俊哉であった。

002

「ちょっと待っていてね。今、ココア入れるから」

お構いなく、という言葉が私の口から出るよりも先に、良美さんはキッチンへと向かってしまった。仕方なく、ソファに座って待つことにする。

現在地、岩代家。無論のこと彼のことは話してはいないし、そのつもりもない。昨日目撃したことも、だ。

カチャカチャと、カップ同士の擦れる乾いた音が響いた。

そもそも私と岩代良美さんの関係は、子供の友人とその母親、というものだ。つまり、私は友人の母親の顔を忘れてしまっていたということになる。最近はあまり会っていないかったとはいえ、中学生まではよく会話をしていたように思う。どうして忘れてしまっていたのか。その理由はそのときの彼と同じことであった。

別人というほどに、彼女は変わってしまったのである。

肩よりも少し長いウェーブのかかった茶髪に変わりはない。以前よりあからさまな疲弊が感じられるが、年相応の美貌に変わりはない。引き締まったスタイルにも、変わりはない。

しかし、中身が違々と私は感じる。あきらかに以前とは異なるものが、彼女の中で息を潜めていることが分かるのだ。しかし、それが何なのか。原因は分かるのだが、その正体は分からない。

ちらり、と他の部屋へと通じる扉に目をやる。あの扉は、そう。ピアノがある部屋に通じるものだ。その隣は、廊下に出るもので、そして、その隣は今、私が出てきた部屋。初めて訪れたときには、間違いなく、なかった部屋だ。

「はい、どうぞ」

不意に、目の前にココアの入ったカップが差し出された。物思いに耽っていたためか、そう言われるまで、彼女がキッチンから戻っていることに気づかなかった。一瞬驚いてしまったが、「ありがとうございます」とすぐに受け取った。彼女はそれを見て微笑むと、私の正面のソファに座った。

「久しぶりね、カナちゃんがうちに来るのは。何時ぶりだっけ」

「確か、高校に受かったときには、お訪ねしたかと」それ以降の記憶をたどる。「あと、二年の修学旅行のあとにお土産を持って、お伺いしたので……」

「大体、一年ぶりね」そう言って、彼女は懐かしむように虚空を見上げる。「カナちゃんも大人っぽくなったわね。それに美人さんになっちゃって。あんなに小さくて、可愛かったのが、つい昨日のように感じるわ」

「そんなことないです」さすがに耐え切れず、言葉を挟むと、「もう、謙遜しちゃって」と彼女はまた微笑んでから、カップに口をつけた。自分の顔が火照っていることが分かる。誤魔化すように私もココアを口に含む。程よく甘く、やわらかく、体温のように温かい。「そういえば」と良美さんは口を開いた。「カナちゃんはまだ、バイオリンを続けてるの？」

瞬間。

口に含んだココアが、途端に甘ったるくなった、気がした。途端に硬く、なった気がした。途端にぬるくなった、気がした。途端に、言い表せないほどに、不快になった　気がした。

ここか。

「……はい、続けてますよ。全然上手くは、ならないですけど」

「ここが、変わってしまったか。」

「そう？ 私が知っている時点で、カナちゃんはもう既に充分すぎるほど上手だったと思うけど？」

「そんなことはありませんよ」

「そんな、筈がない。」

「もう、だから謙遜はしなくていいのよ。長い付き合いなんだから、あんな、天才が、傍らにいたというのに。」

「謙遜じゃありませんよ。それは本当に、本当のことじゃないですか」

「そんなことを言える筈がないのだ。」

ふう、と良美さんは一息を吐いてから、目を閉じ、幾許かの間を置いてから、再び口を開いた。

「……私には、そうは思えなかったんだけど、カナちゃんがそう言うなら間違いはないでしょう。ごめんね、意地悪を言っちゃったかな」

「あの、その、それは、そんなことはありません……」

最後の方は上手く言えなかったかも知れない。何故だろう、これは、『照れ』だろうか。そう疑念を抱いてしまうほどに、いつの間にか緊張してしまっていたようだ。一度自分を落ち着かせるために、またココアを口に含む。先ほどと変わらない、心地の良いものへと戻っていて一安心した。そして気付けば生まれている、少しばかり長めの、間。

「えつと、あの、善正くんは……」

その均衡を破るためにと、私は一番さりげない考えを搾り出し、尋ねた。義正くん、とは現在、良美さんと二人で暮らしている、息子さんのことだ。私もよく、知っている。

「まだ帰ってきてないみたい。最近、家じゃ集中できないって言って、学校が閉まるギリギリまで勉強してるのよ。ほら、あの子も一応受験生だし」

幸い、この質問は功を奏したようで、雰囲気も幾分軽くなったよ

うに思える。良かった、と胸中で安堵する。

「善正くんも、もう中学三年生ですか」

「あの悪餓鬼がね」良美さんは苦笑する。「本当、月日がたつのは早いわ」

「どこの高校に行くつもりなんですか？」

「ここから一番近い公立校かな。本人もそう言ってるし、近所の子達もほとんどそこに行くのよ。あんまり固まりすぎてたら、高校の意味がない気がするんだけど」

「田舎ですし、仕方ありませんよ。善正くん、成績良かったですよ」

「うーん。悪いことは無いんだけどね。中の上……くらいかな」

「カナちゃんは？」と、良美さんは訊いてくる。「成績いいんでしょ？ お母さん、言ってたわよ」

親子間のつながりがまだ続いていたとは、知らなかった。苦笑しつつ、「中の上くらいですよ」と返答する。

「平均よりも、ちょっといいくらいです」

「大学は？ 行きたいところ決まったの？」

「それは」

この質問が来るであろう事は容易に予想することが出来たはずなのに、直ぐに答えることは出来ず、その代わりのように、『俺がすぱつと解決してやるうか』と、そんな声が、胸の端の方から、聞こえた気がした。

「いえ、まだ、です」

「だいたいこんなことがしたいっていうのは？」

「それが」

まだはつきりしなくって、と自分でも、言っていて悔しくなる言葉をこらえる。それを見かねたように、良美さんは、「別にいいのよ」と声をかけた。

「まだ時間的には大丈夫なんでしょう？」

「ギリギリ……ですかね。先生から、急かされてます」

「……俊哉も、そうだったわね」

繋がってしまったと、不意に出てきた名前に、私は少し畏縮してしまふ。

岩代俊哉。

しかし今は、少し踏み込んで、訊きたい事がある。

「あの人は……俊哉くんは、結局、どこに行くつもりだったんですか？」

「……分らないの」

良美さんは、少し目を伏せる。「……何も……」

「……えっと、あの、ピアノ　俊哉くんのピアノ、まだありますか？」

このままではどちらにせよ訊き出せないと判断し、私は直ぐに話を切り上げた。今度は上手く話をそらせたようには思えなかったが、良美さんもこちらを見、微笑むと、「ええ」と答えた。

「まだあの部屋にあるわよ。触ってみる？」

「　はい、お願いします」

それでも最低限の予定通りには事が運んだことに胸を撫で下ろす。良美さんが私の質問を気にかけている様子もない。彼女はカップをテーブルに置くと、ピアノのある部屋の前まで行き、扉を開けると、「どうぞ」と私を手招きする。私は残ったココアを一気に呷ると、カップを置き、そちらへ向かった。

私が先に入ると、ついで良美さんも中に入り、「善正も、たまには弾くんだけだね」と言いながら、真つ暗な部屋の明りのスイッチを、良美さんは手探りで探しているようだった。そして、「ああ、あった」の声の後にパチリ、とそのスイッチを押す音が聞こえて「……………」

私は言葉を、失った。

部屋の庭側は全面が硝子張りになっており、外の夜色と中の明かりによって、私と良美さんを映し込んでいる。向かって右手の壁沿いには鉄製のラックがこれまた全面に並べられ、しかしそのスパー

スでさえも足りないように、いくつもの楽譜がはみ出していた。ワックスが掛けられ、反射する床。一面純白の壁紙。それと対を成すように、黒々したと艶のある大きなグランドピアノが『彼』が愛用し、毎日演奏に用いていたピアノが、その存在感を抑えることが出来ないかのように自身の存在を主張している。それは、ピアノがあるからといって十分な広さを所有する部屋に、本来なら皆無である閉塞感を与えるほどだ。慣れているはずの私でも、圧倒されてしまう。しかし、今回はそれによるものよりも、寧ろ

「ね、あの頃のままでしょう？」

後ろから良美さんの声がした。言葉を返すことができず、首だけでコクコクと頷く。

「もう何年も経つんだけど、この部屋と、俊哉の部屋はそのままの形で残してあるの。どう？ カナちゃんから見ても」

「……本当に、あのままですね」

幾許かの間を取ってから、私は口を開いた。これもまた、予想できていたことだ。落ち着け、と自分を制する為に、一つ二つと深呼吸をすれば、素直に、異なる感情が浮き出てくる。

「……懐かしいです」

自らの感情に沿い、ピアノに近づくと、まるで赤子の頭を撫でるように触れた。以前と同じような温もりは、もう僅かしか感じとることは出来なかった。手を離し、その手を握り締める。

「弾いてみる？」

良美さんのその問いに、しかし私は首を振った。ピアノが弾けないというわけではない。バイオリンと出会ったきっかけになったのは、他ならぬこのピアノであり、さらに言うなら、私は始め、ピアノを学ぼうとしていたのだから。努めて笑うようにして、良美さんに言った。「今日は、そういうつもりで来たのではないので」

「あら、わざわざこの部屋に来たんだから、弾いていくと思ったのに」

あれ以来、二度この家を訪れた際は、私はピアノを弾かないどこ

るか、この部屋にも入らず、その扉に目を向けることすらせずに、帰宅した。だからついにこの部屋を訪れた私は、このピアノを弾いてくのだろうと、良美さんは推測したのだろう。そうしたい気持ちがないわけではない。

「今日は、本当に、お線香を上げに來ただけですから」

けれど、断った。すると良美さんは、そ、と短く答えて、「それにしては、言いたいことがありそうな顔だけど？」と付け足し、私の目を見た。一瞬見透かされたような氣になったが、氣付かない振りをしてその視線に応える。良美さんは目をそらすことなく続けた。「なにか、私に話があつたんじゃないの？」

「いえ、特には。今日は短い時間でしたが、楽しかったです。名残惜しいですけど、そろそろ帰ります」

「善正、かなり俊哉に似てきたのよ。見ていなくていい？ そろそろ帰ってくると思うけど」

「それは氣になりますけど……すみません。今日ここに來たことは、親には内緒なんです。受験勉強、って言っちゃってますから」

そう、いかにもな台詞を告げ、悪戯っぽく、「だから良美さんも内緒にしてくれると助かります」と付け足せば、良美さんも楽しそうに、笑みを浮かべた。

「分かったわ。そのときはまた連絡を頂戴。そしたら善正を早く帰らせといたりするから」

「善正くんが悪いですよ、それじゃあ」そう言うと、良美さんも続けて笑った。「たしかにそうかもね」

「それじゃ、お邪魔しました」

「ええ、またね」

はい、と短く答え、私は鞆を持って、玄関に向かう。そこでもう一度振り返って「お邪魔しました」と言い、外に出た。一步外に出るだけで、寒さが身にしみるようだ。いよいよ冬だと、両手をポケットに押し込み、岩代家に背を向け、歩き始める。

収穫は、いくつあった。そしてそれが私の望む最低限よりは多

いことは明白だ。多少なりとも安堵はするが、しかし、それでも少ないことに変わりはない。これからどうしたものか、と思っている最中だった。

「姉ちゃん？」

キキツと自転車のブレーキ音がして、続く後ろからの声に、私は即座に振り返った。聞き慣れていて、懐かしくて、そしてもう聞くことの出来ない声に似ていたからだ。そして、振り返ると、そこには。

「やっぱり、カナ姉ちゃん、だよな」

「善正……くん？」

おお、と彼は声を上げ、「わかつちゃうか、やっぱり」と言い、へへへと笑う。

「なんか、最近あちこちで兄さんに似てきたって言われるからさ。姉ちゃんも少しは驚くかなーって思ったんだけど」

「十分、驚いてるよ……」

私の予想以上に、善正くんは『彼』に似ていた。良美さんにこの事を聞いていなかったとしたら、私は幽霊でも現れたかと思っていたことだろう。先ほど遺影を見ていたことも相まって、それはなおさらだった。

岩代善正。岩代俊哉の弟。中学三年生。学ランの第一ボタンをはずし、肩からバッグを提げている。地毛の栗色の髪。そして茶色がかつた瞳をこちらに向け、「そうは見えねーんだけどな」と言いながら、自転車から降りた。背は私より少し高いくらいだろうか。随分と伸びたようだ。腕や脚、首は細く、肌はきめ細かく、白い。幾分女性的だ。顔立ちも若干大人びているが、それもこのくらいの歳のときの『彼』と同じで。

「それにしても、そのニット帽似合っていないね」

「久しぶりに会って言うことがそれかよ……」

彼は赤いニット帽をかぶっていた。「だって、寒いじゃんかよ……」なんて言いながら引つ張って目元を隠すあたり、防寒対策で被

っているというわけではないのだろう。話を逸らしてあげる意味合いも含めて私は、「受験勉強、してたんだってね」と言った。

「ん？ 何で知ってんの？」

「良美さんに聞いたの」

ああ、と彼は納得した風に首肯する。「なるほどな。てことはやつぱりうちに来てたのか」

「まあ、ここまで来といて寄ってかないってのも変な話だしな。姉ちゃんちから、どんくらいかかるんだっけ」

「大体三十分くらいだよ」と返答する。「徒歩での話だけだね」

「なるほど、今回は徒歩で来た、と」

「うん、久しぶりの試み。ちょっと疲れちゃった」

「車とかチャリで来りゃーいいのに……」

そんな無駄なこととしてんなよ、と彼は、はき捨てるように言う。

そういう無骨なところは、『彼』を欠片も感じさせることはない。

むしろ、幼い頃の善正くんを思い出して、懐かしい。

「だって、なんとなく突然来たくなったんだから、仕方ないじゃない。だからこんなに遅い時間になってるんだよ？」

既に日は落ちているが、月明かりが出ているために、そう真つ暗というわけではない。そもそも、もつと早い時間に帰路につくつもりだったのだが、なにぶん久しぶりに来たわけで、その為に時間配分に少々誤差が生じてしまったのだ。かといって良美さんとの会話の時間を減らすわけにもいかず、結果として、こんな時間に帰る羽目になってしまった。

「ったく、しょうがねーなあ」

自転車を私の横まで押してきてから、乗りなよ、と善正くんは親指で自転車の荷台を指す。

「道路交通法違反だよ？ 捕まるつもり？」

「人の親切心をそーやって簡単に踏みにじるよなー、姉ちゃんは」「冗談だって」

そして再び自転車に跨った善正くんは鞆を預け、スカートの裾を

きちんと折れないように揃えてから、荷台に横向きに座ると、善正くんの「じゃー行くよ」の声と共に、発進した。バランスが崩れそうになったので、彼の肩に手を置いた。暗闇の中、前方だけを自転車のライトが照らす。

「ちよつと速くない？ 私落ちちやうよ？」

「文句言うなよ姉ちゃん。オレだつてさつさと姉ちゃんを届けて歸りてーんだから。姉ちゃんも歸り着くならはえー方がいいだろ？」

「まあ、そうだけど……」

乗せてもらっているのがこちらだけに、なにも言い返すことが出来ない。それでも、少しばかり速度は緩めてくれたようだ。そして早速交差点に引つかかった。善正くんは左足を地に付ける。落ちないようにと、私はバランスをとる。

「姉ちゃんは、まだバイオリン続けてんのか？」

風を切る音もやんだ中、そのまま押し黙っていると、善正くんが口を開いた。それに「うん」と答える。

「全然上手くないんだけどね」

「んー、そっか。まだ続けてるんだな。よかったよかった」

目の前を車が流れる。ライトの部分だけがはつきりと、暗がりの中で浮かび上がっており、遠目ならば蛍のように見えなくもないだろう。私は蛍を生で見たことは、ないのだけれど。

「よかった、って何が？」

「いやいや、兄さんが死んじまったからさー、段々やる気なんかなくなつていつちまつてー、もうそろそろやめちまつたんじゃねーのかなー、なんて思つちやつてたんだよなー、俺」

信号が青に変わる。再発進。二度目のぐらつき。

「そんなことしないよ」そんなこと出来ない。「それに、バイオリンは好きだし」

「善正くんも、まだたまには弾いてるんでしょ？ ピアノ」

「んー、ほんのたまに、だけどな」

自転車から左手を離し、ぼりぼりと頭をかく。「やっぱ兄さんは

超えらんねーよ。努力じゃ、カバーしきれねー」

「ま、カバーしようって気がオレにあったなら、寝る間も惜しんでやってんだろーけどな」

そう言っただけでなく彼は笑うが、そこにはどこか哀愁のようなものが含まれている気がする。それが、『彼』の死に対するものなのか、自分の才能に対するもの、なのか。私の場合ははっきりとしているのだが、善正くんの場合は、どうなのだろうか。

「やっぱ兄さんはすげーよ。それは過去のもんなにかじゃなくて、今も尚、俺の中で継続してるんだ。兄さんの才能は」

姉ちゃんは、そんな風には思わねーのか？ と善正くんは尋ねる。
「姉ちゃんも、その辺敏感そーだからな」

「私は……」

当然のように、返答に詰まった。どう答えればよいのか、どう答えを出せばよいのか。それは一見、善正くんに対してものであるようにも思えるが、それは同時に私自身に対するものでもあって。

「……わからないよ」

私は、こうやって、また結論を後回しにしてしまうのだ。

「へー？ そうなのか？ 姉ちゃんらしくもねーな」

ま、そんなもんなんだろーけどな。と言い、一人で鼻歌を歌う善正くんは、何だろう、やはり『彼』を思わせるような節がある。「じゃあさ」とハンドルから放したままの左手を、宙に振りながら、尋ねる。「姉ちゃんはバイオリン、これからも続けんのか？」

「それは……」

またも返答に困る。困るも何も、そのまま「決まっていな」と言えばよいのだけれど。

「……手放し運転、よく出来るね。後ろに人が乗ってるのに」

「うお！？ そっか、すまん！」

慌てて手をハンドルに戻す。よくそんな危なっかしい乗り方が出来るものだと、私は少し目を伏せる。わざわざ手放し運転を指摘した理由、分かっている。分かっているのだ。

「じゃ、今日はどうしてまたうちに来てたんだ？」

「うん？」

ハンドルをきって左折した後。突然の話題転換に、少々驚いてしまった。三歳も年下に気を使われたのだろうか。

「いや、まあ、さつきも言っただけ、なんとなく？」

「なんとなく、って。用もなく来たわけじゃねーんだろ？ 姉ちゃんがそんな意味のないことをするわけねー」

「良美さんにもそれ言われたんだけどさ、私ってそんな人間なの？」

一瞬考え込むように黙った後、ははは、と善正くんは愉快そうに笑った。

「なに、そんなにおかしい？」

「いや、そーじゃなくてさ、自覚がねーってのが面白かったただだよ」

だからそんなのなんだろうーけどな、と付け足す。

「姉ちゃんも昔っから理屈ばっかこねてたからなー。全部理解しねーと気がすまねー、みてーな？」

「そうかなあ」

そーだよ、と善正くんは即答する。「ほら、いつだったっけ」

「『どうして鍵盤を叩いたら音が出るのかな』とか言っって、ピアノをばらそーとしたじゃん。覚えてねーの？」

「あー、そんなこともあった気が……するような、しないような」
どっちだよ、と言っって、善正くんはまた笑った。そして、右折。

「あれは確か……まだ姉ちゃんがピアノやってた頃だったっけ？ 背伸びしてやっとなぐくくらいの上蓋を必死で持ち上げようとしてさ。みんなして止めたじゃん」

「ああ、思い出した」

まだどの鍵盤からどの音が出るのか、わかっていなかった頃のことだ。適当に鍵盤を叩き続けて、不意に浮かんだ疑問だった。「あれ？」

「でもその頃って、まだ善正くんは二歳くらいじゃなかったっけ？」

「あー、そーだっけ」

自分で言つて、また善正くんは吹き出した。その衝撃で少し車体が揺れる。「おっと、ごめん」

「いや、母さんが写真いっぱい撮つてさ、ちっさい頃からそれを見ながら、兄さんに話を聞いてたんだよ。その中にちょうどそのときの写真もあつてさー。なんかあれ、実体験とごっちゃになつてたわ」

「俊哉くんが？」

ああ、と善正くん。「よく兄さんがそんな話をしてくれたよ。だから姉ちゃんの小さい頃も、オレ、大体知ってるぜ？」

「あんまり覚えていて欲しくないな」少し照れくさい。「子供っぽいでしょ」

「いいや、あんまり変わつてねーぜ？ 大人びてるよ、やっぱり」全部聞いた話だけだな、とそう言つて、また笑う。

「だからさ、姉ちゃんは似てたんだよな、兄さんと」

「そつ……なのかな」

そつだよ、とこれにも即答される。それから、また右折。

「兄さんも兄さんで、あれで結構、大人びてたからなー。大人ぶつてた、の方が正しいのかもしれないけどさ」

「俊哉くんはあれが素だからね。それに、似てるといえば私よりも善正くんのほうでしょ」

「外見的には、な。でもどーなんだろ、本当に似てるのかな。オレにはわっかんねー」

「そついうもんだよ」大体、兄弟同士はお互いが似ているか似てないかということに疎い。「自分じゃ分からないだけだよ」

「そうかね。まあ、でも、兄さんのこと知ってる人は、兄さんが生き返つたみたいな反応をして、結構おもしろーんだけだよ。姉ちゃん、驚かなかつたみてーだけだよ」

「だから、十分驚いてるよ」

今度は左折してから、善正くんは「そんな風には見えねーんだっ

て」と言った。

「どう考えたって、会つのは二年以上ぶりだろ？ オレら」

「ああ、そういえば……」

確かに、そうだ。二度岩代家を訪れたときには善正くんとは会っていない。

「だからさ、オレが兄さんに見えなかったとしても、えらい変わってることには本来、驚くはずなんだよ。それも見らんねーってことは、姉ちゃんが驚いてねーってこと……で？ んーと、あれ？」

話がずれたなど、思い出した風に善正くんは言う。「何の話だっけ」

「あー、そーそー。姉ちゃんの子供の頃の話だったっけ」

「『子供の頃』は余計だよ」

「だって、姉ちゃん変わってねーじゃん」

おもしれーぐれーな、と言って善正くんはまた笑う。

「笑うのはいいけど、ちゃんと安全運転してよね」

「わーってるって。もうほんと、姉ちゃん面白い。最高」

「善正くんも変わったと思ってたけど、全然変わってないね……」

似てきたのは外見だけなのか。

「おいおい、そりやちつとばかしひどくねーか？ 俺だって変わっ

ただろーがよ」

「どこが？」

「大人っぽくなったとは思わねーか？」

妙に格好をつけながら、それを言ってしまったっている時点でもう十分すぎるほどに子供だ。ため息混じりに「そうだねー」と、私はスルー。しかしそれにも気づかず「だろ？」なんて言いながらまた鼻歌なんて歌っている。本当に、変わっていないなど、嬉しく感じたりはするのだが。

「で、結局何をしにうちに来たんだよ？」

そつえばこっちが本題だったな、と善正くん。

「お線香を上げに来たただだよ。良美さんにもそう言ったけどさ」

「本当にか？」

「この理由が、そんなに不自然？」

「だから姉ちゃんの場合はそーなんだって」

そうしてもう一度、善正くんは笑って、自転車を止めた。「どうしたの？」と私は尋ねると、彼は自転車から降りる。

「残念。もう着いちゃった」

「え？」

彼の言うとおり、目の前には私の家があった。まだ出発してから十分も経っていない。自転車だということを考慮しても、早い。

「ほら、降りた降りた」

急かす声に従い、私が降りたのを見て、善正くんは、自転車の籠に入れてあった私の鞆を投げて渡した。あまり重くはないはずだったが、それなりの重量に感じられた。

「別に、兄さんは気にしねーと思うよ」

え？ と聞き返す頃には、すでに善正くんは再び自転車に跨っていた。

「姉ちゃんの好きにやればいいと思う」

じゃーな、とそれだけ言って、私が言い返す暇も与えずに、方向転換をして去っていった。こういうぶっきらぼうなところは相変わらず、昔から変わらない善正くんらしさが溢れている。しかし、やはりそのどこかには『彼』の面影が隠れているようで。

「……ありがとう」

そう、呟くことしかできなかった。

003

「玄関から入ってきてよ」

それが、『彼』の第一声であった。庭を囲む形で植えられた木の隙間から、無理矢理に体をねじ込ませて庭に入った私もどうかと思うが（というか明らかな犯罪だ）、そんな私を見つけ、あんぐりと

口を開けた『彼』は、数秒で元の顔立ちに戻ると、窓を開けてそう言い放った。

しぶしぶ元来た道を引き返し（勿論植え込みは元の形に戻した、と思う）、指示されたとおりに玄関へと向かい、インターホンを押した。押すと同時にドアが開いたので、私は額を強く打つこととなる。

「ご、ごめん！ 大丈夫？」

そう言っただけから駆け寄ってくるのは当然だが『彼』である。そしてそこで私は初めて、『彼』の顔を至近距離から眺めることが出来た。

第一印象は、女の子のようだという事だ。身長は小学三年生としては至って平均的だが、腕や脚は細く、指は長かった。生まれつきなのだろうか、栗色の癖毛が、目にかすかにかかるほどまで伸びている。長い睫毛から覗く、私を心配そうに見つめる瞳は、少し茶がかっていただろうか。

あまりにもまじまじと、長時間私が見入っていたせいであろうか。『彼』はもう一度、「大丈夫？」と尋ねた。私は一拍措いてから首肯する。

「本当に大丈夫？ 痛くない？」

こくこくと私が首を縦に振るのを見て、「ああ、よかった」と安堵の声を漏らした。「どうぞ、入ってきていいよ」

促されるがままに、私は敷居を跨いだ。他人の家特有の臭いは全くといって感じられなかった。暫くついて歩くと、先ほど『彼』がピアノを弾いていた部屋に出た。なるほど、確かに私が入ってきたところはそこから丸見えだった。そして、部屋の中央には、大きなグランドピアノ。

間近で見るそれに、わずかながらも恐怖感を抱いてしまったことを覚えている。五歳児の身長で見上げると、その巨大さが際立っていた。さらに全面が黒塗りということも要因の一つにあっただろう。まるで、その黒が、自分を飲み込んでしまうかのようで。

「ピアノ、見るのは初めて？」

その問いに、どのように答えたのかは覚えていない。否定とも肯定ともつかない返事をしたようにも思える。「そうだよ、まだ小さいもんね」と言われたのは、はつきりと覚えてはいるが。

勿論初めて見たわけではない。テレビで演奏しているところだっ て見たことがある。しかし、この近距離で見たことがあるのは幼稚園の、小さなオルガンくらいのもので、だから、生で見るのは初めてだった。

触ってみてもいいかという私の問いに、『彼』は笑顔で答えた。黒く艶のあるピアノは、私の顔を映しこんでいた。若干こわばった指で、それに触れる。心地の良い冷たさで、それでいて、なんともいえないような温かみが体中を走った。

「弾いてみてもいい？」

無意識に、出てきた言葉だった。勿論私はピアノなんて弾けないし、先ほどのとおり、間近で見ること自体が初めてだ。「いいけど……弾けるの？」という問いにも、答えを渋ってしまう。それでも気にする風もなく、「教えてあげる」と、『彼』は私の手を引いて、正面の椅子に座らせた。

鍵盤に、静かに手を乗せた。そのまま人差し指を押し込んでみる。軽いけれど、芯のある音が部屋に反響する。それは私の体にも吸い込まれていくようで、先ほどとはまた異なる恐怖感を抱く。

「ほら、こうするんだよ」

『彼』の手が、私の手を包み込んだ。そして、私の指を、それぞれの鍵盤に持つていき、押し込む。拙いながらも、ローテンポながらも、それは『彼』が弾いていた曲だった。何倍もの時間をかけ、弾き終える。「どうだった？」と尋ねる声など無視して、自分の手を見つめた。『彼』の温かさが、残っていた。それは、先ほど初めてピアノを触ったときと同じ、温かさで。

「すごく楽しかった」

私はそう、ポツリと呟いた。そのときの『彼』の顔は、覚えてい

ない。なぜなら、私は俯いていたのだから。

「よかった」

『彼』の声が、頭上から聞こえた。大きな窓から射し込む夕日で、鍵盤は赤く染まっていた。

004

秋、というよりはもう冬といったほうが妥当か。気付けば暦は十一月へと移り、赤や黄色に染められていた木々も、その風情ある色合いを失いつつある。空気は乾燥し、時折吹く北風も、日々強くなる一方だ。そんな中私は今、河原に座り込み、水面を眺めている。当然だが隣に彼はいない。一口に河原とは言っても、ここは『家』の色が僅かにしか視認できないほど距離があり、さらに頭上には橋が架かっている。高架下特有の落書きも、田舎のためか見かけず、目立つごみさえも落ちていない。早い時間なのでここに訪れる人がいるもなく、私は一人、何にも縛られることなく、何にも気を払うことなく、さながら空気のように、じっと、膝を抱えて座り込んでいた。念のため着込んできたが、どうやらそれは功を奏したようで、寒さを程よく中和していた。

思い出すのは、昨日のことだ。岩代家を訪問した。線香をあげてから、良美さんといくらか話をした。帰りに善正さんと会った。二人乗りで、家まで届けてくれた。要約するとそれだけだ。ただ、それだけだ。友人宅を訪れただけと、なんら変わりはない。それに、この場合は間違いなく友人宅なのだ。おかしな点など一つもない。気にかける行為も何一つないのだ。と、自分に言い聞かせる。しかし、そう簡単に払拭することは出来ない疑いは、今まで以上にますます勢力を強めていく。

何故、突然そのような行為にでたか。その原因が彼にあるということとは、火を見るよりも明らかだ。数日前、彼の口から出た名前は「聞き覚え」などでは済ませないレベルのものである。私の心の奥

底、根底に染み付いて離れることのない幻想。それらを総括した『彼』が所有する名前に、なにも感情を持たない、ということが、果たして可能であるだろうか。そして、その答えは私の中で、疑う余地も間違いもなく、予想通りに否定された。

「どう、して」

あのと看、彼のあの言葉の後、気付けば、声を上げてしまっていた。彼の言葉。吐露。独白。おそらくその対象に私は含まれておらず、そしてそれを自分でも把握していながらも　抑えることが、出来なかった。

「『殺した』だなんて、一体どんな比喩ですか。その、俊哉って人は、どうしたんですか」

ここで突然この話に食いつくのは、彼に違和感を与えかねないと気付いた。精一杯誤魔化そうと、間違っても自分が『彼』のことを知っているとは悟られまいと、そう付け加えた。それほどまで、そのときの私は頭が回っていなかった。これでは逆に不自然であると感じていなかった。しかし幸い、いつも通りの思考が出来ないのは彼の方は同じであったため、気付かれはしなかったように思うが。

「そのままの、意味だよ」

彼は薄く開いた瞳を、つま先からこちらに向け、同じように呟いた。「俺は人を、殺したんだ」

「ちょっと、待ってください」

少しは落ち着いてくださいよ、と私は言った。しかし彼はその言葉がまるで聞こえていないかのように、「俊哉は、悪くなかったんだ」と続けた。

「俊哉は何も悪くないし、あの人も何も悪くないんだ。悪いのは俺なんだ。俺だけ、なんだ」

「だから」

落ち着いてください、と今度は先ほどよりもいくらか語気を強めたせいか、彼ははっとした顔になり、それから「すまん」と頭を下

げた。どうにも心地が悪く、いえ、と曖昧な返事しかすることが出来ない。心地が悪いのは彼の方も同じようで、ポケットから新しい煙草を取り出して吸い始めた。

「すまん」

そう、彼はもう一度続けた。それから煙草を指で挟み、口元から離す。「ちよつと、疲れてたみたいだわ」

「今のはなかったことにして、忘れてくれ」

「そういうわけにはいきませんよ」

彼の眉がぴくりと動いたのは、見逃さなかった。その彼の逃げ場を、まるで潰すかのように、罾を仕掛けるように、私は言った。「人を殺したって」

「そんなこと、はいそうですかと忘れられるわけがないじゃないですか。気になって私はもう、夜は熟睡できません」

「いや、寝れるならいいじゃん」

「そういう問題じゃありませんよ」

「じゃあどういふ問題だ？」

「話してくれなければ、あなたを警察に突き出し」

「はいストップ」

「生憎と、そんな軽い話でもねえんだよ。氣遣ってくれたのなら、感謝はするけど」と薄く笑って、彼は煙草を銜えた。気温のせいで吐く息が余計に白い。彼の総てがその息から、流れ出ていくのではないかと思えた。

「それにな、多分警察に行っても意味はないんだ」

「何故ですか？ あなたは」

殺したよ、と私の言葉をさえぎって彼は言った。そして、「ただどな」と続ける。

「それはどうにも間接的過ぎて、とても罪としては認められないんだよ。それに、それだけはするなと言われた」

「誰に　ですか」

「俊哉にも、そしてさっきの人にも」

「ああ、だからさっきの人はその俊哉って奴の親御さんでさ」という、聞くまでもない情報に、適当に相槌を打ちつつ、間違いなく『彼』のことだという確信を得た。違和感は抱いたものの、それは発見できないほど極小のものであり、十分に看過できるものだ。

「じゃあ、その、俊哉って人は、誰なんですか」

少し踏み込みすぎたかとは思ったものの、彼はにこやかに笑いながら、「友達だよ」と言った。

「岩代俊哉って言ってな、三年前、初めて会ったんだ。あいつは高校生で、俺は大学生だった。あいつが通ってたのは、同じ市内でもお前んとことは違う方の高校な」

懐かしむように、彼は目を細めた。「いい奴だったよ」

「それなのに、どうして」

「……俺だって、そんなつもりはなかったさ」と、彼は自責に満ちた口調で言った。「さらさら、なかったんだ」

「ただ、あいつを助けたかったんだ。あの頃のあいつはもう、見ていられなかった」

「どういう、ことですか」

「お前と、同じようなことだよ」

一瞬、硬直。そして驚愕。最後に疑問。脳をハンマーで殴られた気分だった。私と同じ。進路のことが、それとも。

その後、一つ二つ言葉を交わし、私は家へと帰った。そして自宅で落ち着いて考えて見れば、おかしい点がいくつも浮かび上がった。そうすれば、とてもいてもたってもいられなくなり、数日は耐ええたものの、結局私は『彼』の家を訪れたのだ。それが、昨日のことだった。

揃えていた足を解放し、弄ぶ。つま先に薄くついた土を、片方の靴で落とそうとしたが、余計に土を塗りたくるだけの結果になる。仕方なしに嘆息してから、手で落とした。掌についたそれは、落とすことをせずに握り締めた。

まったく、嫌になる。これではまるで、昨日と同じじゃない

か。疑念を膨らませて足を踏み込み、余計に疑念を膨らませるが、ほんの少しだけ手に入れることの出来た真実を糧に、また足を踏み込む。もうやめたはずだ。こんなことをする時間はないはずだ。これでは負けの込んだギャンブルと同じだ。くすぐられているのは好奇心でも探究心でも、なんでもない、ただの古傷だ。だから。だからもうやめだ。やめにするんだ。自分だけを考えるんだ。自分の夢だけを考えるんだ。夢。「天才バイオリニスト」。

途端に、吐き気が押し寄せる。腹のそこから来るそれを、必死で押さえつけてから、また膝を抱え込んで顔を埋めて、一層私は縮こまった。かくれんぼをする子供のようだ、と声が聞こえた。いや、苛められている子供だ、とまた聞こえた。そのただの幻聴無視して、もう一度腕に込める力を強めた。着ている服がもどかしい。もっともっと、もっと。

「なあに、朝っぱらから体育座りなんかしてんだ？ お前」

その言葉だけで、楽になった。私は顔を伏せたまま、幻聴ではないその声に返す。「なんだって、いいじゃないですか」

「話しかけないで下さいよ。私はまたこうして性懲りもなく、あなたのところに来てるんですよ？ もう来るなって言われたのに」

「何言ってるんだ。こないだのは仕方がないし、今回は場所が違うだろ」

「あなたと話す理由が、今回はありませんよ」

「ああそうだねそんなに俺とは話したくないんだね」

「じゃあもう行くわ」と頭上で声が聞こえてから、遠ざかる足音。それがまったく聞こえないようになってから顔を上げれば、スーツの上からいつものコートを羽織って、『家』の方へと向かう彼の後ろ姿が見えた。その姿はやはり以前とは変わらない。顔を、見ることは出来なかったが、それだけで満足した。

「ああ、だから。あなたがそんなのだから」

思いもかけず、言葉が漏れた。止める術を知らず、そのまま続けた。

「私が、色々と辛くなるんですよ」

あなたを見てると。そう言っつて、立ち上がった。

005

初めてピアノを弾いてから、数日後。私はまた『彼』の家を訪れていた。そのときにはもう、ピアノを始めたいと思っつていたし、両親にもそのことについて話して、ある程度は了承を受けていた。だから、これからどうすればいいのかを尋ねるためにそう近いわけでもないのに、足を向けたのだった。

家の場所を覚えているわけではなかったが、例によって聞こえるピアノの音を頼りに、容易にたどり着くことが出来た。そうして訪れた私を、『彼』はまた家に招き入れたのであった。

「そっか、ピアノやりたくなっつたか」

私にココアを渡してから、『彼』は対面のソファに座つて、しまったという風に、苦笑を浮かべた。その理由が分からずに尋ねると、「いや、いろいろ面倒なんだよね」と言つた。

「お金のこともそうだし、ピアノを置くスペースも使うからね。なにしろ、先生がいないよ」

ココアを飲みながら、いない、という部分に疑念を抱いた。それじゃあ、あなたは誰に教わつているの、と訊いた気がする。

「僕はね、大体は独学だよ。たまに親にも教えてもらうけど」

言葉の意味が良く分からずにきょとんとしていた私に向け、「あ、独学つて分かるかな。自分ひとりで勉強するつて事なんだけど」と付け足した。そこで私は漸く理解し、頷いた。

しばしの沈黙。『彼』は何かを考えているように眉根を寄せ、私はココアをすすつた。もうすぐカップの底が見えそうなところで、「そうだ」と『彼』が気付いたように声を上げた。「僕が教えてあげようか？」

「学校が終わつてからの時間だから、ちょっと短いかもしれないけ

ど、それでも構わないのなら、どうかな？」

「それに、うちでやればお金も掛からないし」と付け足した。私はカップに残り僅かとなったココアを飲み干してから、それではあなたに悪い、と言った気がする。わざわざ自分の時間を割いてもらわなくてもいい、と。

「大丈夫だよ。人に教えることが上手くなれば、自分も自然と上手くなるって誰かが言ってたし。僕にとっても都合だよ」

「それとも、迷惑かな」と私の顔を覗き込んだ。俯いて、首を横に振ると、「よかった」との安堵の声が聞こえた。

「じゃあ、ピアノしたくなったらうちにおいでよ。平日なら大体いるからさ」

黙ったまま、私は頷いた。『彼』は笑みを浮かべてから、「今日はどうする？」と言った。

「弾いていく？ それなら、もう今日からレッスン、始めるけど」

うん、と大きく頷いて、私は立ち上がった。『彼』はもう一度笑みを浮かべてから、「やる気あるね」と言った。

「それじゃ、よろしくね、奏」

彼が差し出した手を、強く強く、握り返した。

006

あの日から通い続けた道。先日訪れたときにも思ったが、幾分その道のりは様変わりしているようだった。道路は舗装され、新しく建てられたであろう家もいくつも見られた。最後に訪れてから一年その期間は私をまるで知らない道に迷い込ませたような錯覚を生む初めて来たときはまた違う感情を抱きながら、玄関先に立つ。以前は毎日聞こえたピアノの音はもう聞こえない。そして、インターホンを押した。扉越しに家の中でチャイムが鳴る。「はいはい」との声の後、扉は開かれた。

「あれ、姉ちゃん」

心臓が、張り裂けるかと思った。

現れたのは、善正くんだった。学校から帰ったばかりなのか、学生服のままで、さらに室内のためか例のニット帽はかぶっていない。くるくると、毛先の丸まった癖毛から大きく開かれた目が覗く。

「なんだよ、また今日も来たのか？ 珍しいな、これまでかなり長い間来なかったのに」

「どうしたんだよ」と、善正くんは、先日と同じ質問をした。それに対する私の答えは、この間とは違う。呼吸を整えてから、ゆっくりと言った。

「俊哉くんのことについて、訊きに来たの」

善正くんの目が一瞬細くなる。黙ったまま扉を全開にし、体を壁に寄せて私に家に入るように促した。それに従い、家の中へと足を踏み入れる。善正くんは後ろ手に扉を閉めると、靴をそろえている私を追い越し、先を歩いた。こうして後ろ姿だけを見ても本当に『彼』と瓜二つだ。胸に手を当てて、高まった鼓動を抑える。分かっていたのに、さきほど扉から覗いた善正くんを一瞬、『彼』と見間違えてしまったのだ。落ち着く頃には、先日と同じ、ソファに腰を下ろしていた。

「今日は、学校に残らなかったの？」

そう急ぐことはないと思い、もう少し落ち着くためにも、まずは関係のない話をすることにした。「この前より、時間早いけど」

「あー、うん。今日はPTA？ だかなんだかがあるみてーでさ。教室から追い出されちゃったんだよ。で、さつき帰り着いたところ」

「PTA？ じゃあ、良美さんは中学校に行ってるの？」

「うん、そーだけど」

「結構遅くなるとか言ってたよーな気がする」と善正くんは視線を泳がせた。「……よーな、気がする」

「まーなんか、遅くなるっばいよ」

「憶えてないよね」

ふう、と私は息を吐いた。「話くらい、聞いとこうよ」

「いくら反抗期っていつてもさ」

「おーおー、んなことねーよ。反抗なんかしねー善行少年だろーよ、オレは」

「ほら、名前からしてそーじゃなか」とえらく自慢げに言う。だからなんだ、と言いたい気持ちを含み込んで、「さて」と私は声を上げた。もう、落ち着いている。

「じゃあ、俊哉くんの話、お願い」

「あー……うん」

「しかし、まさか、ねー」と善正くんは口調を変えずに続けた。「今になつて」

「今になつて、そんなことを訊きに来るか。もしかして、こないだ来てたのもそのためか？」

「ううん、違うよ。この間は、また違う理由があつて」

「それは？」

「言わない」

「ふーん」とそれにはさほど興味はなさそうに鼻を鳴らした。「言わないときたか」

「言えない、じゃねー辺りが姉ちゃんっぽいな。まーそー言うんなら深くは訊かねーけどさ。てーか無理だし。姉ちゃんを説得できたことなんかねーんだから。じゃあそれはオレに訊きに来たわけか？それとも母さんに？」

「どっちも。だけど、どちらかといえば善正くんの方から話を訊きたかったかな」

良美さんの方は大体予想はついてるし、と小さく呟いたのは聞こえなかったようだ。「そー言われてもなー」と善正くんは腕組みをして宙を仰ぐ。

「兄さんのことで具体的に何が訊きたいわけ？ あれまでのこと？

あれのこと？ あれからのこと？」

「あれのこと」

「マジで？」

「マジで」

「うわー、マジかー」と善正くんは億劫そうに後頭部をがしがしと掻いた。癖のある髪が余計にうねる。視線がさまよっていることから、何か回想しているのだろう。それから深いため息を吐いてから立ち上がった。「姉ちゃんは、ココアだよな」

「ちよつと待つて。五分くらい」

そう言つて善正くんは私の返事を待たずに、キッチンへと向かった。暫くして出てきたかと思えば、私のことをまるで忘れているかのように無視し、階段で二階へと行ってしまった。私は何をするでもなく、ただ呆然とするしかない。程なくして降りてきたかと思えばまたキッチンへと向かい、再びソファに腰を下ろしたのは、きっかり五分後のことだった。

「はい、ココア」

ありがと、と受け取った。善正くんのほうはどうやらホットミルクらしい。ほのかに立ち上る湯気を目で追つてから口に含んだ。義正くんも同じようにしてから、「はい、これ」と後ろ手に持っていたノートをテーブルに置いた。おそらくこれを取りに二階に行ったのだろうが、カップ二つとこれをどうやって同時に持ってきたのだろうか。その答えは、どうということでもなく、浴衣の帯に団扇を挟むような要領で、善正くんは制服のズボンの後ろ側に挟んでいたようだった。そのせいで若干乱れてしまった制服を気にしているようで、先ほどこらしきりに後ろ側を見ようとしている。

「で、これなに？」

その必要性がなくなったと善正くんが感じたであろうところで、再び私は口を開いた。ありふれた、どの文具店や書店に行っても売っているような、大学ノート。表紙には題はおるか、名前すら書かれていない。手にとってみても、何の変哲もない。中身はまだ、確認しない。

「あーそれはな、オレの当時の日記帳」

「……善正くんのか？」

「うん」と、私の懐疑的な目を全く気にせずに、間髪入れず、頷いた。ありえない、と私は思った。あれほど三日坊主で有名だった善正くんが日記を書いていた。加えることに、「当時」であるというのだ。

「あ、姉ちゃんさてはこれが兄さんの日記だとか思ってたんじゃないかなー」

それには反論できない。確かに私は、このノートはもしかしたら『彼』の日記ではないのかと思っていたのだ。まさか、『彼』ではなく、善正くんのほうだとは、誰が予想できるだろうか。二人の人間性を知らない人ならまだしも、知っている人ならその答えは目に見えている。

「たく、姉ちゃん。ドラマの見すぎだぞコンニャロー。そんな死んだ人間が都合よく日記なんかつけてるわけねーだろーよ。現実見よーぜ、現実」

からから笑いながら言う善正くんを見ないように目をそらすことで、苛立ちを最小限に抑える。これは昔から変わらないことで、慣れている。懐かしい気持ちがない、わけがないけれど。

「やっぱり、腹がたつよね……」

いつのまにか、拳に力を込めてしまっている。

「まーまー、拳なんか握り締めちゃって、怖えーよ姉ちゃん。やめてくれよ、オレは一応一家のダイコクバシラやってんだから」

「はいはい」

ふう、と息を吐いて、自らを諫めた。「で、なんでこれ？」

「俊哉くんの日記ならまだ分かるけど、どうして善正くんのなの？」

「いやいや姉ちゃん、なに言っちゃってんのよ」

「オレに訊きに來たんだろ」と『オレ』の部分を強調しながら、善正くんは言った。「だからじゃんよ」

「だーからオレが当時、あのことに書いて書いた日記帳を、わざわざ押入れの中からこんな短時間で探してきたんだぜ？　ここは文句とか質問とかはまー置いといてだな。まず礼を言うべきじゃねーの

か？」

「そういうもの？」

「そういうもん」

「ごめんね、ありがとう」

「よし」と善正くんは言つて、「あ、帰ってから開けよ？」と付け足した。それが何を意味するのかは、分からない。こほんと咳払いを一つしてから、善正くんは再び口を開いた。

「じゃー、姉ちゃんの用件は終了ってことでいーんだな？ オレも、姉ちゃんに訊きたいことがあるんだけど」

「なに？ 言つていいよ」

「母さんのさ」

「母さんの帰りが、最近遅いんだよな」と心なし目線を下げながら、善正くんは言つた。「それに、ほんのちよつとだけど、どこかおかしいし」

「姉ちゃん知らねーのか？ ちようど、姉ちゃんがこないだうちに来たとき辺りなんだよ。関係がねーわけねー」

「それは……」

知つてるよ、とすぐには言えなかった。しかし一瞬の私の沈黙で、そうであると察したらしい。「そーか」と呟き、深いため息を吐いた。

「まったく姉ちゃんてほんと、アドリブ下手くそだからやだ」

「やだとか言わないでよ。私だつてまさかそんなこと善正くんが訊いてくるなんて思つてなかったんだから。仕方ないでしょ？」

「それを言つなら、こつちだつてまさかほんとーに姉ちゃんが知つてるとは思わなかったんだからさー」

「善正くんがこんなにマザコンだとは思わなかった」

「姉ちゃんがこんな大根だとは思わなかった」

はあ、と今度は二人でため息を吐いてから、互いのカップに口をつけた。もう湯気は立たず、ぬるかった。カップを私より先にテーブルにおいて、善正くんは口を開いた。

「かんわきゅーだいといこうぜ姉ちゃん。そんで、母さんは帰りを遅らせてまでなにをしてんだ？　姉ちゃんのさっきの頼みからして、だいたい想像はつくけど」

「その想像通りで、正解だよ」

このまま放つていても冷たくなるだけだったので、ココアを急ぎ飲み干してから、私は答えた。「ちよつとごめんね、善正くん」

「そのことの前に、もう一つ訊いてみてもいいかな」

「いいぜ？　なんでも。ちゃんと、その後で説明してくれんならな」

善正くんは笑いながら答えた。それに私も、笑顔で答える。「ありがと、ね」

「どーも、どーも。で、なにを？」

「俊哉くんはさ」

鼓動が高まる。軽く息を吸って、吐いて。笑顔の善正くんの目を見て。

「……自殺、なのかな」

空気が、止まった。直前に逸らした目を彷徨わせながら、私は動かない。善正くんの顔を伺うことはできない。しかし所詮は体感時間であり、実際は一瞬のものだ。最近をよくこのような体験をすることが多い。それも、『彼』がらみのことだから、仕方のないものではあるのだ。そして、先に硬直から解けたのは、やはり私ではなく、善正くんの方であった。「なに言ってたんだよ、姉ちゃん」

「それしか考えらんねーって、ケーサツもみんなも、姉ちゃんだって言ってたんじゃないかねえのかよ」

「それは……」

そうだけど、と消え入りそうな声でしか、返すことが出来なかった。善正くんは語気を強めた。「どーしたんだよ姉ちゃん」

「兄さんのことなんてさ。今になってだぜ？　今になって　もう三年も経ったんだろ？　立ち直ったんじゃないのかよ。だから、あの部屋に入ったんじゃないかねえのかよ」

そつだ、と肯定は、出来なかった。ただ視線を下げ、俯くだけだ。

頭上から、善正くんの声がする。「ほんと、姉ちゃん、どうしちま
ったんだよ」

「姉ちゃんは、もう、解放されたんじゃないのかよ」

「……違うよ」

違う、と繰り返して、顔を上げた。今度こそ、善正くんを正面から捕らえる。その瞳には、薄く涙がたまっていた。

「縛られてるのは、私じゃないの」

「……じゃー、誰が」

「それはね」

それは、と言葉が詰まった。彼をどう説明したものか、なぜか分からないでいる自分がいた。そんな自分は捨てたはずだ。切り捨てたはずだ。

「私の友人で、俊哉くんの友人、だよ」

「それから、良美さんもね」と付け足しつつ、無意識的に出た「友人」と言う言葉に、私は内心、驚いていた。まさか彼のことをそのように称するとは思わなかった。「友人？」と善正くんは訊き返した。「友人って」

「兄さんに友達なんて、いたのかよ」

「いた、みたいだよ。その本人に聞いた話だけど」

「……信じらんねえ」

善正くんは両目の間を親指と人差し指で挟むと、先ほどまでの私と同じように、俯いた。

「だから、良美さんは、その人の所に行ってるんだよ」

「……何を、しに」

顔を伏せたまま言葉を返した善正くんを、私は自分を見るかのように見た。そして、答える。「復讐、かな」

「とりあえず、自分の中にたまった恨みやストレスを、人の目も気にならないほどに彼に向けてるみたい。あの様子じゃ、彼が俊哉くんを殺したんだと思ってるんだと思うよ」

「……三年も経ったんだろ？ どうしていまさら」

「知らないよ。彼と俊哉くんと詳しい関係も知らないんだから」
私がそこまで言うてから、善正くんは顔を上げた。若干目が赤い。
そして私に訊き返す。「縛られてる、って」

「その、兄さんの友人は、あれについてなんて言うてるんだ？」

「あの人は 俺のせいで悲しんでいるんだ」とか「俺が、責任
を取らなければいけない」とか、ね。止めに、「俊哉は、俺が殺し
た」 だつてさ」

笑っちゃうよね、と私が言うと、善正くんは僣ぶように笑った。

「ああ、そうだな」

「兄さんに、そこまでの友達がいたとは驚きだ」

「本当にね」

そして今度は、二人で笑った。そして暫くの静寂の後、善正くん
は呟いた。

「オレならあんな奴、兄弟でもなけりゃ付き合わねーよ」

007

「僕はね、実は、苦手なことがあるんだ」

私がピアノのレッスンを始めてから、数ヶ月が経った頃。なんと
か形になりつつある曲を弾いていたときに、『彼』はそう呟いた。
私には聞こえないように、まさか聞こえるとは思えずに、独白のつ
もりで言ったのである。しかし偶然耳に入ってしまった、私は演奏
を止めてしまったので、「ああ、聞こえちゃった？」と続けた。

「奏も知ってると思うけど、大抵のことなら、僕はできるんだ。そ
れはピアノでも他のどんな楽器でも。もっと言うなら勉強だってス
ポーツだって人以上にできるんだよ」

確かに私は知っていた。音楽関係ならばいうまでもなく、学業や
スポーツのことは、このとき既に知り合い、打ち解けていた良美さ
んに話を聞くことで大まかな部分は補完されていた。通知表を見せ
てもらったこともあるが、無論のことそれは最高の評価が並べられ

ており、教師からのコメントさえも、この上ないほどに、『彼』を褒める言葉が連ねられていた。

「でもね、さつきも言ったとおり、唯一これだけと言っていいくらい、努力を重ねても僕には出来ないことがあるんだ」

「それって」

なに？ と小首を傾げて訊き返せば、「ちよつと待ってて」の言葉を置いて、『彼』は部屋から姿を消してしまった。手持ち無沙汰に鍵盤を叩きつつ待っていると、程なくして戻ってきた。その手には、大きな黒いケース。

「なに？ それ」

「今開けるよ」

ケースを床に置き、ぱちりぱちりと一つ一つ止め具を外し、開ける。大きく口を開けた貝のようだと思った。

そして取り出されたのは、バイオリンだった。

「知ってるよね？ バイオリン」

「うん」

「でも生で見るのは初めて」と初対面するときには言えなかったことを付け足した。ぼんやりとバイオリンを眺めていると、『彼』は背筋を伸ばし、顎に挟んで、弓を持ち、演奏の形に構えた。構えだけ見れば、それは玄人の、長年練習を積むことによって培ったそれに見えなくもない。実に様になっていた。

「耳、塞いだほうがいいよ」

え、の言葉が私の口から放たれるより先に『彼』は弓を一気に引いた。弓と弦が接触し、摩擦することによって生まれる音は玄人のそれには似ても似つかない、甲高い素人のようなものだった。耳塞ぐことも音に備えることも出来なかった私は、暫くの間体を震わせ、安心していった。特に振動しているように感じる耳に、新たに笑い声が届いた。

「あはは、ごめんね。ちよつと意地悪しちゃったね」

バイオリンと弓をぶらりと下げる『彼』のその言い方が気に食わ

ず、私はつんとそっぽを向いた。「おいおい、怒らないでよ」と続けた。

「これであいこでしょ」

「なにが」

「だって僕はこの話はしたくなかったんだからさ」

「僕だけ嫌な思いをするのは不公平じゃんか」とそこでもう一度笑った。私は一層、すねるように頬を膨らませて、完全に背を向けると、椅子の上で膝を抱えた。「俊哉くん、嫌い」

「あっちゃ、嫌われちゃった」と別段悪びれる風もなく『彼』は続けた。「じゃあ、嫌われついでにもう一個、意地悪しちゃおうかな」
「奏は、僕に勝とう思ってる？」

「うつん」

嘘だった。繰り返すように私は首を横に振る。即答したのは、妙に探りを入れられるのが嫌だったからなのだが、それすらをも見抜かれてしまっているようで、『彼』は「やつぱり」と言った。

「無理だよ」

その言葉に、振り返った。言葉以上に表情からも悪いことをしているという自覚を全く感じることはなく、さらに「無理だよ」と繰り返した。

「無理じゃないよ」

「無理だよ」

「やってみないとわからないよ」

「やってみなくてもわかるよ」

この辺りから、私の視界はぼやけ始めた。眼前の『彼』の影が揺れる。意地だけが、その視線を保たせていた。しかしそれも時間の問題であり、数秒もしないうちに、私は顔を伏せた。悔しさに涙が垂れ、膝に落ちる。腕全体を使って膝を強く抱きかかえた。こんなに私の体は小さいのか、と強く思った。

「奏が僕にピアノで勝つことは、絶対にない」

これが、止めだった。辛うじて小雨程度に抑えられていた私の涙

は、豪雨のように流れ始めた。繰り返す鳴咽。それは決壊したダムのようにもあり、塞き止めていたものも巻き込んで私の積み上げてきたもの総てを崩し、濡らした。ただ純粹に、ピアノが好きだった思い、上手くなりたかった思い、そして現れた壁、越えたいという思い。『彼』のことが、ただただ、純粹に

「ごめんね、奏」

閉じた視界の外。湿り気を含んだ『彼』の声。私の頭を撫でるその手に、どういうわけかぬくもりは、感じられなかった。

008

次の日の学校からの帰り道。いつものように河原沿いの道を歩きながら、私はノートに視線を落としている。受験勉強、というわけではない。そもそも、これは私のノートではなく、借り物である。

昨日、あの話が終わると、程なくして私は帰宅した。善正くんはまた私を自転車で家まで届けてくれると言ったが、断った。気まずい、ということもあったが、なにより、私自身の気持ちの整理が必要だったからだ。私では『彼』の呪縛から解かれた気にいるが、どうしても、『彼』のことを思い出すと、動機が激しくなったり、気分が悪くなったりしてしまう。もしかしたら善正くんの言っていたとおり、いまだに縛られ続けているのかもしれない。実際、今もそうである。

ノートから、視線を上げる。軽く深呼吸をして自らを落ち着かせながら、視線を戻した。そのミミズのような字に眩暈を覚え、もう一度視線を上げた。

昨日、義正くんに借りたノート。そのときに「帰ってから開け」と言われた。考えてもみれば何が原因かは明白だった。一文読むだけで随分の気力を使う。英語の長文より厄介だ、と苦笑してからまた文字を目で追った。

今でちょうど十日目のページだ。どうやら学校の宿題だったらし

く、担任の先生のものであろう赤で書かれた字を頼りに、解読を進めている。その先生でさえ読めないこともあるようで、「もつと丁寧に書きましょう」とだけ書かれているページさえあり、そのような時は完全にノーヒントなので、余計に疲れる。それも、これまでの十ページのうちで四回あった。これからも同じ感覚でこれが続くと考えると、今のうちからうんざりとしてきてしまう。

十日目のページを読み終え、ノートを閉じてから視線を上げた。まだ見つからないと思ったところで、その先の人物の変化に気付き、小走りで近づくと、声をかけた。

「良美さんじゃないですか」

その声に随分と驚いたようで、良美さんは土手に向かおうと上げた足を、反射的にもとの歩道に落とした。妙な姿勢のまま、良美さんは表面だけで笑顔を浮かべた。「カナちゃんじゃない」

「どうしたの、こんなところで？」

「どうしたのは私のほうです。通学路ですから」

「えっと、会社からの帰りだね」

「会社、こっちなんですか？」

「えーと」と良美さんは言葉を濁らせた。「うん、そうなのよ」

「ちよつと遠いんだけどね」

「いつもこの道ですか？」

「そう、だよ」

「いつも、この時間ですか？」

「な」

「なによ、カナちゃん」と良美さんは言った。その顔からは既に笑みは掻き消えており、そのかわりに、焦りの色が濃く現れていた。

そう、私は今、良美さんを尾行していたのだ。歩きながらもわざわざ善正くんのノートを見ていたのは、もしも良美さんが後ろを向き、私に気付いたときに、良美さんに気付かなかった言い訳をするためだった。そのようなことはそれこそ万が一というほどにありえることはないと思ってはいたが、念には念を入れることは大切だ。

もしも振り返ったとしても、良美さんは私に気付かなかっただろうけれど。

「どうしたんですか？ 良美さん」

汗かいてますよ、と私は言った。こうものべつ幕なしに質問をするのは、考えさせる時間を与えては駄目だ、と思ったからだ。息つく暇も与えずに訊かないと、きつと煙に巻かれてしまう。今のうちに、出来る限りの質問をして焦らせなければ。

「ちょ、ちよっと、今日は仕事が大変でね、疲れてるのよ」

「疲れてるんですか？ じゃあもつと近道をすればいいのに。ここからじゃ、良美さんの家までかなり歩きませんか？」

「歩くけど、この道が いいの」

「どうして？」

どうしてですか、と私は続けた。「なにか、理由でもあるんですか？」

「こんな何の変哲もない道に」

「あ、いや、道じゃなくて、川よ、川」

ほら、綺麗じゃないこの季節、と微笑を浮かべながら良美さんは言った。体を川の方へ向け、指をさす。「ああほら、あの辺りとか」「水面がきらきら光ってる」

「そうですか？ 私にはどこにでもある風景だと思いますけど」

「毎日見る、どこにでもある風景にこそ、よさがあるのよ」

勉強になります、と私はわざとらしくうんうんと頷いた。ちらりと良美さんを見ると、先ほどより少しばかり落ち着いてきたように見えた。

仕掛けるなら、ここだ。

「でも、ホームレスいますよ、この辺」

「え？」

川を見続けていた良美さんは、そこで私の方を向いた。微笑を湛えたまま、固まっていた。

「友達に聞いた話なんですけどね、なんでもホームレスが、この辺

りでうろつろしているとか」

「……それが、どうかしたの？」

「いえ」

危ないかなあつて思いまして、と続けると、良美さんは顔の向きをそのままに、目線だけを河原に送った。そのあとを辿ると、案の定、彼の『家』があつたので、「ああ、あそこじゃないですか？

その人が住んでるの」と言うと、「本当だね」と取ってつけたように返した。

「気付かなかつたなあ、こんなのがあつたなんて」

「毎日歩いてるんじゃないんですか？」

「いつもはもつと遅い時間だから、景色が見えないのよ」

へえ、と声を上げてから、問う。「でも良美さん」

「景色見たさにこの道を通つてるんじゃない、なかつたんですか？」

「それ、は……」

「あれ、そういえばさっき、良美さん、土手に足を入れようとしてましたよね？ どうしてですか？」

もしかして、あそこの人に関係があるんじゃないですか？ と私は訊いた。どうしてか、体が震えた。

「な」

良美さんの様子が変わった。拳を握り締め、体全体をこちらに向ける。今までに見たことがないほどの、まさに鬼気迫る表情で、「なんなのよ、さっきから！」と声を荒げた。「まるで私を追い詰めるみたい！」

「なにか私が悪いことをしたとでも」

「……見ちゃったんですよね」

え？ と良美さんは怪訝そうな顔で私を見る。全く覚えがないというような表情だ。自分がしたこと重大さを、悪さを、少しも心得ていない子供のような表情だ。子供ではまだ純粹さや純朴さを感じるが、そんなものは皆無であつて。

ああ、本当に、腹が立つ。

「私の友人を、あなたが痛めつけるところを」

その苛立ちを、この一言に集約させた。それでもなお、納まることはなく、拳を握り締め、歯を食いしばることなんか耐える。しかしその言葉を聞いても、良美さんの顔色は依然として変わることはなく、しいて言えば「友人？」と訊き返したただけだ。そこにはなんの感情も、含まれていない。

「カナちゃんの友達なんて、私知らないわよ？　きつと、人違いよ」
「そんなわけありませんよ」

友人の名前、教えて差し上げましょうか？　と私が訊くと、良美さんは無言のまま頷いた。息を一つ吸って、体の震えを抑えてからそれに応える。

「京都、弦一郎です」
「なっ」

「なんであいつと！」とさらに声を荒げた良美さんのわめく姿は、既に別人のように変わってしまった。さきほどまでの焦りとも、苛立ちとも異なるそれを、怒りを、少しも隠そうとしない。目は見開かれ、血走り、髪は乱れる。握り締めた拳は震え、口元は落着くことなくわなわなしている。良美さんでなくても、ここまでの人間を私は見たことがない。焦りや恐怖を覚えるが、それ以上に、私の感情は増幅し、それらを飲み込む。濁流のように、濁っていく。

「あなたは どうして、彼に近づいたんですか？」

答えは分かっている。分かりきっている。だからこの質問は、ただの引き伸ばしだ。この状況にいることが嫌だという、無意識のうちの逃げだ。自分の甘さにも嫌気がさし、唇を噛む。少し、鉄の味がした気がした。

「あいつが　あいつが、俊哉を殺したのよ！　自殺なんかじゃないの、あいつが殺したのよ！　だから」

だから私が、と良美さんはそこで躊躇った。この期に及んで、とも思うが、それは私も同じだった。

「いいですよもう、言わなくて。分かっていますから」

良美さんへの苛立ちよりも、自分に対するそれの方が勝り、投げ出した。余計に募る思いすらも無視して、次の質問を投げかける。

「じゃあ」

「じゃあ、なんで今更なんですか？ もう、三年も経ったじゃないですか」

「最近知ったからに、決まってるじゃない」

当たり前のように、良美さんは答えた。いつの間にか、私から目をそらしている。剣幕を保ったまま、睨みつけるようにその目を細める。その先には、また彼の『家』があった。

「私の中では、今も、今でも、俊哉は生きてるのよ。その俊哉を殺した奴が、近くににいるなんて知ったなら」

「我慢なんて、出来るはずがないじゃない」と、一層強く拳を握り締めながら、良美さんは呟いた。どうやら幾分は落ち着きを取り戻して来たようだ。声はまだ震えているが、それでも、抑えることが出来るほどには。

「俊哉は、死ぬはずなんか、なかったのよ。あいつが、あいつが俊哉の前に現れたからなのよ。あいつのせいで」

「俊哉くんが、あの人のせいで死んだということは、一体どこで？」「本人に聞いたわ。あいつ、俊哉の墓参りに毎日来てたらしいのよ。自分が殺したつていうのに、どの面下げて来てたのかしら」

「本当に腹が立つわ」と、良美さんは親指の爪を噛んだ。「いいえ、それどころじゃない」

「腹が立つなんて次元じゃないわ。憎いのよ、ただただ、そう思わずにはいられないの。俊哉と同じ、いえ、それ以上の目にあわせてやらなければならないと、気がすまないのよ。だから殺したい気持ち在必死で抑えて」

「毎日毎日……ですか」

「ええそうよ」と良美さんは悪びれる風もなく答えた。「だって仕方ないじゃない」

「私は被害者なのよ？ なにか悪いことをしているの？」

「……いいえ、そういう風には思いませんよ。私が良美さんと同じ立場なら、同じ事をしたでしょうし」

それがなによりの、決定的な違いなのだけれど。

「ですが、今回は状況が違います。そういうこともできないんです」

「彼とは友人、ですし」と思い出して付け足した。

「彼を責めるのは、やめていただけませんかね」

「……カナちゃんとあいつがどんな意味での『友人』なのかは私は知らないし、訊かないわ」

良美さんはいつも通りの口調に戻る。握り拳も、解かれていた。

「だから私は、やめないわよ。だって、カナちゃんとあいつの関係なんて知らないし、私には、私たちには関係ないもの。こう言ったらカナちゃんを傷つけちゃうかもしれないけど」

「どうでもいいのよ、そんなもの」と、私の目を見据えて、良美さんは言った。その目には揺るぎも戸惑いも虚偽も、含まれていない。「だってこれは、私たちの問題だもの。カナちゃんは介入できないのよ、どうやったところで。参加できないのよ。不参加者がいくら止めようと、咎めようと、そんなものはただの意味もない行為なの。分かるかしら？」

私の反論を許さずに、良美さんは続けた。もとより口を開く気などなかったけれど、余計にその気は殺がれてしまった。ただ、その言葉に耳を傾ける。

「分かるでしょ？ カナちゃんなら。カナちゃんはいつでも距離を保とうとしてたものね。極力私たちに近づき過ぎないように。親密になり過ぎないように。そんなことを、普段から繰り返してきたんでしょう？ だから、分かるわよね？ 自分が介入できるか否かのラインが。そして今回が、明らかに『できない』の範囲にあるということが。カナちゃんがしようとしていることが、どれだけ無意味な行為であるのか」

「どうでもいいですね。そんなもの」

どうにも我慢がならず、私は言葉を挟んだ。良美さんは話の途中

のまま、口を開けたまま硬直してしまっている。先ほどまでこんな人のことを恐怖していたのかと、自分を滑稽に思えた。

「残念ながら、良美さんの言うそんな私はもういませんよ。そんな私はつい先日、あなたの言う『あいつ』に殺されました。だからもう、良美さんの知っていた私は残念ながら死んでしまっていましたとさ」

「めでたしめでたし」と私は手を打った。「だからですね」

「あなたの思うように事は運びませんよ、残念ながら。彼が殺したのは私だけで十分なんです。俊哉くんなんて、彼が殺すに値しません。不釣り合いなんですよ」

私の目を鋭く睨みつけてくる良美さんから寸分も目をそらすことなく、私は続けた。「彼は」

「彼は殺してません。それを示すためならば、私は戦いますよ。だって、彼は私の友人で、私は彼の味方なんですから。彼が傷ついているんです。見ていてつらいんです。腹が立つなんて次元じゃないんです、憎いんです、ただただ、そう思わずにはいられないんです。彼をそんなにする、良美さんのことが」

「……言ってくれるじゃない」

良美さんはそこで不敵に笑むと、「いいわ」と答えた。

「せいぜい頑張つてね。無理だと思うけど。だって、あいつは自分で認めてるんだから」

「無理じゃありませんよ。だって、彼は絶対、そんな人じゃないんですから」

そして暫く睨み合ったのち、良美さんのほうが先に目を切った。

「じゃあ」

「私は今日は帰るわ。カナちゃんと話して、なんかそれだけですつきりしちやった。すごく楽しかったわ」

「ええ、そうですね。私もすごく楽しかったですよ」

「じゃあばいばい。また今度ね」と言い残し、良美さんは踵を返し、その場を立ち去った。私はその後ろ姿をぼんやりと暫く眺めてから、

緊張の糸が切れ、深いため息をついた。

本当ならば、訊きたいこと一つを聞き出せば、そこで話を中断させるつもりだった。「良美さんは一体何処で彼が『彼』を殺したと知ったのか」だ。どうしてもそこだけは知ることが出来なかったのだ、直接接触を試みた結果が、これだ。なんの宣戦布告だ、と自分の行いが非常に恥ずかしい。そしてその一方で、自分に疑問を抱いていた。なぜこうまでも、感情をあらわにしてしまったのか。良美さんに返した言葉は、そのどれもが自分の意図したものではなく、無意識的に、感情的に、自然と溢れ、現れたものだ。今までこのようにことはなかった。少なくとも、覚えはなかった。だから寧ろ、驚きという成分のほうが、私の中では強かった。そしてそこから繋がる原因は一つ、だった。これは感謝するべきか悲観するべきなのか。どうにも自分でそれを判断することは出来ない。

しかし。

しかし、彼ならばそれが出来る。その思いは確実なものとして、私の中に根を張っていた。

009

『彼』からあの宣告を受けたあと、私は泣きながら家路についた。しかし家に着いたからといっておさまるはずもなかった。両親にひどく心配されたが、そんなものは全く関係がないという風に、私は泣き続けた。三四時間はそうしていたように思う。そうこうし終えた後には、ただ空虚だけが残った。涙とともに、流れ落ちて待ったかのように、ピアノへの思いも、薄らいでいる。ぼつかりと胸に穴が開いてしまった。幼少期の私には、それが理解できなかった。自分の思いは永遠に続くものだと思っていた。こんなに簡単に、あっさりと、消えてしまうとは、どうにも理解が追いつかなかったのだ。自分の掌を見てみた。小さい、と思った。子供の手だ、と思った。しかしそれは『彼』も同じだ。私と同じように、子供だ。けれど、

違う。確実に、違う。『彼』と私は、絶対的に違う。中身が、持っているものが。頑張ったって無理だ、そう呟いた。頑張ったって、頑張ったって、追いつかないんだ。

じんわりと、掌が大きくなった。反対の手で、目をぬぐう。両目は既に真っ赤になってしまっていて、こすると痛かった。シャツの裾が濡れていた。床に直接座っていたせいか、スカートも濡れていた。床も濡れて小さな水溜りのようになっていた。こんなにたくさん、と思い、こらえようとすればするほど、またとめどなく溢れてきた。もう顔を手で覆うことも、こすることもしない。無駄だと知ったからだ。泣くことに慣れてきていた。涙が頬を伝う。顎から膝に落ちる。スカートにはもう染み込まない。膝を伝って床に落ちる。水溜りが、また少し大きくなった。

ピアノは、本当に好きだった。たったの数ヶ月とはいえ、本気で取り組んだ。進度は遅かったけれど、確実に進んではいた。そしてどんなことでも、多少心得てくれば見えてくる壁に出会った。それはとても大きかった。そして厚かった。押して倒すことも、穴を開けて通り抜けることも出来ないと思った。それでもいい、いつかはきっと、続ければきっと、きっとそれはかなう。

壁は私に言った。無理だ、と。大きな声だった。それだけで私の存在を消してしまいそうなほどに、大きな声だった。耳を塞ぐことは出来なかった。声は私の体の心まで響いた。そして私はあるところか、言い返した。声はもっと大きくなって、案の定、私の声を消した。私の存在を消した。

消して、消えた。

消えたものは涙になって、ただの塩水になった。消えた私が、水の中に溶けている。涙をこらえたところで、もう私は消えてしまっているのだ。いずれ排泄されるものになってしまったのだ。不要なもの。私のピアノへの思いは、不要なものへとカテゴリーを変えていた。リサイクルなど出来ない。再利用は、かなわない。

ごみはごみだ。価値はない。

それを流さないのは、崩壊に繋がる。だから止める必要はない。しかるべきときに止まる。自然と、何もなかったように、私の中に何も残さずに。しかし、その後のことが心配だった。ピアノへの思い、『彼』を越えようという思い。その代替となりうるものを、果たして私は所有できるのだろうか。

涙の止まらない目を閉じた。それでもまぶたの僅かな隙間から漏れる。が、暫くすると止まった。驚くほどぴたりと。そして胸に空いた穴は、ふさがった。

代替となりうるもの。それは簡単に見つかった。

第三章

001

目を開けると、いつも通りの見慣れた天井が見えた。上体を起こしてから、辺りを見回す。勉強机、本棚、バイオリンのケース。相変わらずものがない部屋だ、と一人苦笑してしまう。左手の巻いたままの腕時計を見ると、短針は三をさしていた。午前三時。加えて皺のついたブレザーから、私は良美さんと話し終えて帰宅してからすぐに眠ってしまったていらしい。体力は使わずとも、気力を使い果たしたせいだろうか。ほんの一度、瞬きをした程度の感覚だ。今起きたばかりだというのに、頭は通常、むしろ通常以上に感じるくらいにすっきりとしていた。

夢。

そのわりには長い夢を、見ていた気がした。現実よりも現実性を帯びた夢。現在のような過去の夢。けれど靄がかかったように思い出すことは出来ない。そして思い出すまでもない。このような夢は、感覚は、これまでに幾度となく感じてきた。間違いなく、疑いなく分かる。そこに『彼』が存在していたことが。

きつと私は、あの日のことを思い出していたのだろう。好きだったピアノを捨てた日、新たにバイオリンに惹かれた日。忘れることは出来ない日。『彼』のことが、苦手になった日。そつと目を閉じただけでも、そのときの光景が今まさに、眼前で進行しているのではないかとさえ感じる事が出来る。あるいは、そのまま目を開ければ、そこには『彼』が微笑みながら立っているのではないか。

果たして目を開けてみたところで、やはり『彼』はいなかった。当然だ。なぜなら『彼』は死んだのだから。もうこの世には存在しないのだから。消えてしまったのだから。当然だ。

もうあれから三年が経ったんだ。そう自分に確認する。間違いはない。私が中学生の頃だったのだから。ちょうど今くらいの時期だ

った。間違いない。死んでいる。間違はなく、途方もないくらいに死んでしまっているのだ。死んだ人間がさらに死ぬのに三年は十分すぎる期間だ。それなのに、最近の『彼』はまるで私たちのなかに生き返ったかのような存在感を与えていた。いや、これも間違いないのだ。そうに違いない。そうとしか考えられない。「私たちの中」という、限定された条件下で、『彼』は生き返ったのだ。

いや、違う。私は気付いた。違う。『彼』は死んでからまた死んでなどいない。『彼』は良美さんの中で、ずっと生きていたのだ。良美さんは私にそう言っていた。『彼』はきつと生き返る日を、良美さんの中で今か今かと待ちわびていたに違いない。まるでそれは胎児のように、再び母親の中で。そしてその思惑通りに、まず彼の中で生き返り、私の中で生き返り、善正くんの中で生き返った。総てが『彼』の思惑通りに進んでしまったのだ。

奏、と私を呼ぶ声が聞こえた。私は耳を塞いだ。奏。再び聞こえた。私は耳に当てた手を外した。意味がないからだ。これは、私の中から声だ。だから私は自分の中に向かって消えろ、叫んでみた。幾許かの間を置いて、また私の名前を呼んだ。奏。

私が消えると思えば思うほど、『彼』はその存在感を増していった。声は大きくなる一方だった。それはまるで私の、『彼』を忘れるようとする感情が増せば増すほど、それに比例するかのように。オーケイ、私は小さく呟く。ならば逆に、とことんまで思い返してやるのではないか。比例。なるほどそうであるのなら、きつと声は小さくなるはずなのだから。

原点回帰。

そう、原点だ。定義域にマイナスが含まれないのだから、原点に近づけば、その値は最小を取るようになるのだから。近づくのだから、あの頃に近づくのだから。『彼』への感情を、あの頃のものに。思い出すのだ、あの頃のことを。

しかし残念なことに、その頃の私は死んでしまっている。私の中

には、その私の残滓のようなものしか存在しなかった。深海を漂う、他の魚に食い荒らされた魚の死体のようなものだ。どうやったところで息を吹き返すことはない、ぼろぼろの体だ。このような状況に陥ってしまったことに、やはり悲観するべきだろうかという思いが脳裏をよぎるが、こんなところで立ち止まってもいられない。

そして気付いた。そうだ、残滓となった私は、私の中で今も生きている。どれだけぼろぼろで死にそうだといっても、まだ死んではいない。辛うじて息は保っている。私の存在を憶えていることで、まだ私を繋ぎとめているのだ。それはあるいは、良美さんにとっての『彼』と同じようなものかもしれない。異なる点といえば、私の方は死にそうで、『彼』は変わりなく生きているという点だ。それは大きな違いだ。まさに雲泥の差とも取れるほどだ。いや違う。そうではない。それはちょうど、いるかと鯨のようなものだ。あるいはチンパンジーと人間のような。根幹は同じでも、それが表面に現れることによって、初めて知覚できる違いだ。ならば、そこにはそれほどの差異はない。零と一ほどの差異はない。

なんとかなる。

なんとかなる。そう、強く心に思った。奏、と声が聞こえた。耳は塞がない。良美さんから、彼から『彼』を消し去るためには、まず私の中からだ。耳を塞いではいられない。私は私の中に返答する。心の中ではなく、実際の声で。

「俊哉くん」

目の前の空気が、微笑んだ気がした。

002

朝焼けを眺めながら、私は歩いた。手には鞆、服装は制服と、そのまま学校に行ける格好だ。登校の寄り道をするのは、この間から増えてきた気もするが、それを自分でやめようという気もしないし、親も咎めない。大方、早めに学校に行って勉強をしているとも思っているのだろう。最近は会話をするのが少ない。こちらも向こうのことが分からないし、向こうもこちらのことが分からないのだ。

善正くんは反抗期などと言っておいてとは思うが、まあ別にいいだろう。反抗しているわけでもないのだから。

道が次第に狭くなっていく。ポケットから紙を取り出して確認する。簡略化された地図がそこには書かれている。地図に従い左に曲がると、目標のものが見えた。

直方体に削り取られた石が、ひしめくように林立していた。その一つ一つに刻まれた名前を見ながら歩く。石は古いものもあれば、真新しいものもあった。そのうち、比較的新しい部類に入るであろうそれを見つける。

「……久しぶり、だね」

呟いたところで、『彼』は答えてくれなかった。当然だ。死んでいるのだから。ここに収められているのは、ただのカルシウムだからなんだかの物質だ。それはどう間違ったところで『彼』ではない。所詮は所有物だ。モノはヒトではない。どちらにしても、それは誰の目にも瞭然な常識だ。

とりあえずこうするべきだろうか、と考えてから、しゃがんで手を合わせて目を閉じた。しかし、その行為は何の意味も持っていなかった。ただしゃがむだけ。ただ手を合わせるだけ。ただ目を閉じるだけ。目的もない。目を開けてから、何か供えたほうが良いのだろうかと考えた。生憎なにも持ち合わせていなかったの、偶然靴に入っていた飴を置いた。供えておけばなんでもよいのだろう。だって、死人がなにか食べられるわけなんてないのだから。

そうこうすれば、すぐに何もすることがなくなった。しょうがなく、アスファルトの上に腰を下ろし、すでに覚え終えた英単語帳を取り出し、ぱらぱらとめくる。それにも飽きてから顔を上げれば、さっきまで赤かった空は、いつの間にかいつも通りの青へと移っていた。腕時計を見る。まだ登校時間には十分な余裕がある。さて、これからどうしようか。そう思ったところで、じやり、とアスファルトと砂利のこすれる音が聞こえた。言うまでもなく、それは足音だった。

次第に音は私に迫る。当然目的は私ではない。私は横目でちらりと音源を窺う。足元から、その人物を見上げる。しっかりと確認してから、私は立ち上がった。そして顔色を変えないように、口を開いた。

「おはようございます、今日はいいい天気ですね」

「お前……」

別にいいですね、ここは河原じゃないんですから。彼が続きを言う前にそう言うと、彼は釈然としていないように頷いた。

彼は、先日会ったときのように、スーツを着て、その上からコートを羽織っている。髭もきちんと剃られている。ただ髪は切られてはおらず、いくら伸びたように見えた。銜えられた煙草の匂いが、どことなく、懐かしく感じられた。

「お前、なんだってこんなところにいんだよ」

「どこにいようと私の勝手ですよ」

「じゃあ、どうしてここに来たんだ？」

「友人と会うために」

ふうん、と彼は鼻を鳴らした。「友人、ねえ」

「なるほどなるほど。ならお前は、俺が誰のことを話しているのかを知っていた上で、あんな質問をしていたのか」

はい、と短く私は答えた。このことは遅かれ早かれ、彼にしなければならぬ話であり、今日はその話をするために、ここに来たからだ。それに彼もそのことに大方気付いているようであった。話の運びとしては、私の思ったようにはならなかったけれど、それは致し方ないことだろう。

彼は私の目をちらりと見てから。さきほどの私のようにしやがむと、手を合わせ、目をつぶった。その行為には、しかし私とは違って重大な意味が含まれているのだろう。そこだけはわかって、それ以上のことは、彼に話を訊かない限り分からない。彼のことをある程度理解している気にはなっているが、それでも知らないものは知らないのである。見ただけで青さは分かっても、深さはわからない

い、海のように、それもまたどの場合においても当然のことであつた。

彼はまた、私のように、供え物を何一つとして持っていなかった。そのため、線香の代わりのつもりなのかポケットから煙草を取り出して銜えて火をつけると、それを墓石の前に横たえた。頼りない煙が上がっている。

「煙草なんてな、供えたところで俊哉は喜ばねえだろうし、むしろ嫌がると思うんだよ」

「ええ、知ってます」

そついうの、嫌いそうでしたもんねと私が言うと、だろ、と言って彼は笑った。寂寥感というか、細くなった目からそれは溢れていた。

「それで、その友人であるところの俊哉と会いに来たお前は、もしかして俺を待つていたわけか？」

「ええ、そうですよ。先日あなたと会ったとき、私はあんなことを言つてしまいましたからね。直接河原に行つてあなたと話をするなんて、恥ずかしくて負けた気がするので嫌だつたんですよ」

「どうして俺がここに来るとわかつた？」

その質問にはあえて答えなかった。「良美さんに聞いた」と、私が言おうと言ふまいと、それ以外には考えられないのだ。彼もそれに気付いたようで、「まあ」と自分で話題を切り上げた。

「俺も同じようなことを思つていたところだよ。なんでかわかんねえけど、お前と話がしたかったんだ。俺もあんなこと言つちまつたから、通学途中のお前を呼び止めることも出来ねえ。負けを認めるつもりで、今日のお前の帰りを捕まえようと思つていたんだ」

「それはそれは」と私は言った。「良かったですね、あなたも私も負けませんでした」

「ああそつだな」と彼は言った。「ただ、決意の早さで俺はお前に負けたよ」

「なんでも訊いていいぜ？ 俺の負けだから」

「ありがとうございます」と私は言ってから、「俊哉くんとは、どこで出会ったんですか？」

その質問をした途端、彼は苦いものでも食べたように、顔をゆがめた。あからさまに言いたくない、という風な顔だった。数秒間そうしたあと、彼は意を決したように、口を開いた。

「高校」

「……は？」

間拔けな声を出してしまったことを悔いてから、私は考えた。その末、出た答えを彼に問うてみた。

「……留年、ですか？」

「違うわ」

べしり、と頭を叩かれた。叩き返そうかとも思っただけで、なにぶん相手の頭の位置は高いので、手は届かなかった。だから、脛を蹴っておいた。

「言ったろ、初めて会ったのは俺が大学生の時だつて」と彼は痛そうに脛をさすりながら言った。「教育実習だよ」

「教育実習？」と私も頭をさすりながら訊き返した。「教師を目指してたんですか？」

「ああそうだよ。なりたかったんだ教師に。だから前にお前に話した教師を目指してる友達つてのは、俺のことだ」

そういえば、そのような話をした気もする。あれはいつのことだったか。随分と昔のことのように感じられた。

「俺が、授業に遅刻したときのことかな」と彼は話し始めた。「初めて会ったとき、あいつ授業サボってピアノを弾いてやがったんだ」「そのときはあいつの後ろ姿が見えてな。それに向かって、『お前なにやってんだ。もう授業中だぞ』って言ったんだよ。わざわざこの時間には音楽の授業がないことを確かめてからな。なのにあいつは俺の声なんて全く聞こえてないみたいでさ。なんの曲だかわかんねえのを弾く終えてから、こっちを振り返って、『誰ですかあなた』って訊きやがったんだよ」

どっかの誰かさんみたいにな、と彼は言ったが、私は聞き流しておいた。

「そしたら、なんていうか、背筋が震え上がったんだ」と彼は言った。「まるでとてつもなく地位の高い人間にあったときのような震え方だった」

「そんな感じがしても、一応は俺の方が年上だし、仮免教師みたいなもんだ。わざわざ感情を隠したよ。で、教育実習でって数日間何度も言い続けている自己紹介をしたんだよ。いつもなら、噛まなかった。ただこのときだけ、噛みそうになった。相当焦ったよ」

そうしてぼつぼつと、彼は話し始めた。時折、悲しそうに笑ったり、目を伏せたりしながら。目線は私の方に向けていたり、『彼の墓石に向けていたりとまちまちだったが、どこか、遠い目をしていた。三年だ、遠くないはずがない。彼との話の間に流れる風は、明らかに秋のものではなく、冬のものへと変わっていた。乾いて、冷たかった。しかしその中で、彼の言葉だけは温かみを帯びていて、安らぎに満ちていて、私は寒さを感じることはなかった。

彼の話が終わったのは、私が登校しなければ、遅刻してしまうという時間になってからだった。

「そういえば、今思い出したんだけど」と、彼は煙草の煙を吐いてから、目頭を押さえて言った。「俊哉がさ、中学三年に、バイオリンをやってる可愛い幼なじみがいるって言ってただけど、それってもしかして？」

私は彼に言葉を返すことなく、その場を後にした。

003

七時限目が、自習になった。

どうやら今日から二者面談を行うらしい。出席番号順に、別室で。私の順番まで回ってくるのに、まだ数日は掛かるだろう。それは他のクラスメイトたちも同じであり、そのため、教室では自習、という形をとっていた。誰もが問題集や単語帳を開き、勉強に取り組んでいる。暫く前までは何人か、話を始める人もいたが、最近で

は全く見られなくなった。時間がないのだ。受験は、目前に迫っている。

そんな中では、誰一人としてこちらを見る人はいない。もともと一番後ろの席であったから、なおさらだ。私は勉強するふりをしながら　そんな必要はないのだけれど　善正くんに借りたノートを開き、ぱらぱらとめくった。つたない字。ミミズのような文字。ぼんやりと眺めながら、日付を確認する。十一月八日。三年前の今日のことだ。これといって、目新しいものもない。いつもどおり「今日も楽しかったです」で締めくくられていた。

それから、数日分を読んだ。やはり変化はない。『彼』の命日の前日も、変わりはない。次のページをめくるために端をつまむ。汗で上手くつまめない。心臓が、強く伸縮する。どくん。体全体にその伸縮は伝わり、指先までもが心臓のようだった。心音が教室中に響いているのではないかとすら思えて、辺りを見回した。誰にも聞こえていない。喉が渴く。心臓を吐き出したいとさえ思える。つばを飲み込んでから、意を決しページをめくる。

なんてことはなかった。日付は、十日後になっていた。内容も変わらない。いつも通りの平凡な日常。一字一句漏らさないように、暗示のようなものを探したところで、全く見つからなかった。教師のコメントも、いつもどおりのものだったが、そちらのほうにはまだ善正くんに対する配慮を感じ取ることが出来た。小学生で兄を亡くすことがどれほどつらいことであるか、それを熟知した上でのもののように思えた。良い教師だ、と思った。

それでも、釈然としない気持ち私が私を包み込んでいた。なぜこんなものを、わざわざ善正くんは私に渡したのか。そこには何らかの意図が介入しているのか。暗示を探す。見つからない。これでは、何一つとして変化していないじゃないか。いや、違う。これは、もしかすると、善正くんは、このノートを通して、私に自分にとっての『彼』の重要性のなさを示したかったのではないのだろうか。先日、善正くんは「あんな奴は兄弟でもなければ付き合わない」と

言った。兄であるところの『彼』がいなくなったところで自分は変わらな。つまり善正くんは、自分はなんとも思っていない、と私に伝えようとしたのではないだろうか。

どくん。心臓が、また高まった。胸に手を当てる。おさまらない。それはあまりにも、つらすぎるのではないだろうか。小学生の頃から兄のことをそういう風に思っていたというのは、あまりにも私の比ではない。私はそれでもまだ、『彼』のことを思っていた。好きとも嫌いとも、およそ人に対して抱く感情を持ち合わせていたが、善正くんはどうだ。それすらも、放棄している。『彼』のことを人として認知していなかったとも同義だ。無関心という言葉すら、それには及ばない。

どくん。自分の物ではないかのように、心臓は動く。これは、なんだ？

どちらにせよ、最後まで読み終えてみないことには判断のしようもない。ノートはまだ三分の一ほど残っていた。このまま読みきってしまう。そして、それからだ。善正くんに会って、話さなければならぬことがたくさんできた。明日にでもまた岩代家を訪れてみよう。出来ることならば良美さんには席を外して欲しい。そのためにも今日は早めに帰宅して、善正くん電話で頼もう。それからだ。明日善正くんに会えば、始まる。なんとなく、そのような気がした。何が始まるのかは分からない。ただ漠然と、それは私の中に芽生えた。私の心臓を動かしていた正体なのかもしれない。それに従うべきなのか、否か。分からない。けれど、明日になれば。

しかし人生とは、思ったようにいかないものである。

004

「よーよー姉ちゃんよー。随分遅いお帰りなこと。オレをこんなに待たせちゃってさー。ほんとにもう姉ちゃん間は間がわるいつつか、空気読めねーっつかさー。まさかのオレ、ホットミルクをおばさんに言っておかわり四五回やっちまって、知り合いなのに恥ずかしいやらなんやらでもう帰りたかったんだけど、それでも姉ち

やんに悪いだろうとか思っちまってこうして善意に善意を重ねて重ねてさらに丁重に包装までして姉ちゃんを待ってたってことをよく理解して欲しいんだけど、その前にオレに言うべき言葉があるよな？」

「ええと、おかわり、いる？」

「おー、頼むよ」と、善正くんはその手に握っていたカップを手渡した。私はそれを受け取ってから、鞆を床に置き、踵を返して部屋から出ると、階段を下りてキッチンへと向かった。

今日の放課後にはこれといってすることもなかったもので、いつもより早めに帰宅した私は、玄関でどこかで見かけたような靴を見つけた。嫌な予感がしつつも自室へと行ってみれば、そこには学生服姿の善正くんがまるで自分の部屋であるかのように陣取り、息継ぎもなしに私に文句を浴びせたのである。心の端のほうでは気付いていたかもしれないが、あまりにも唐突なことに、私は何も言い返すことが出来ずにこうして逃げてきてしまった。

冷蔵庫から牛乳を取り出してカップに注ぎ、砂糖をスプーン二杯分入れて電子レンジに入れ、タイマーをセットする。そのレンジの中が橙色に支配されたのを見てから、私の分のコーヒーを作りにかかった。インスタントコーヒーの粉を自分のカップに入れ、ポットのお湯を注ぐ。そうするとちょうど、ぴぴぴとレンジが鳴った。中からカップをとって、こぼさないように部屋まで戻る。所要時間、約二分。

「はい」

「あんがと」

「で、なにしにきたの？」と私のベッドに仰向けになっている善正くんに尋ねた。善正くんは上体を起こしてからカップを受け取り、その中身を少し飲んでから答える。「いやー」

「姉ちゃんがそろそろ読み終わる頃かなー、とか思ってたさ」

「日記のこと？」

「そーそー」

「で、どうだったよ」と善正くんは身を乗り出しながら尋ねた。私は椅子に座ってコーヒーを飲む。少しばかり熱かったけれど、いくらか冷えていた体にはちょうど良かった。こちらを見つめる善正くんの目を逃れるように、視線を上の方へと向けた。

「うん、善正くんには悪いけど、あまりよく分からなかったかな。」

『あの日』の周辺も、なにも変わりはなかったし」

素直には述べなかった。それから逸らしていた視線を善正くんにきつちりと向ける。善正くんも変わりなくこちらを見続けていた。

「姉ちゃんよー」

嘘はやめようぜ、と、吐き捨てるように言った。その射抜くような瞳に、ざわり、と心臓の辺りがざわつくのを感じたが、自分で気付かない振りをする。「嘘なんてついてないよ」

「だって善正くん、あれなんにも変わってなかったじゃない」

「……あ、そ」

「姉ちゃんがそう言うんなら、オレはもうなんにも言わねーよ」と善正くんはそれまでとは一転して、興味なさげに呟いた。その妙に後味の悪い引き下がり方に違和感を覚えるが、それにも、気付かない振りをする。これ以上疑われてはならない。

そこで、思考が止まった。

疑われてはならない？

「ごめん善正くん。嘘ついてた」

ごめんなさい、そう言つて頭を下げた。幾許かの間を置いて、頭上からは、ふーん、と声が漏れた。

「まー、姉ちゃんにも色々あるんだろうし？ そんなところは詮索しねえよ。嘘をついてたところでそれを暴露したところで結果は変わらないしな」

「ありがとう」と言いながら私は頭を上げた。

自分で不思議だった。何故善正くんに訊こうとしていた事を逆に訊かれて、わざわざ嘘をついてまで隠そうとしたのか。明日と決めていたことが今日になることで、よりその話はしやすくなった。

うに。

目の前の善正くんはにやりと笑ってから、「で、どうだったよ？」と先ほどと同じ質問を繰り返した。うんとね、と私は返す。

「なんていうか、あのころの善正くんって俊哉くんのこと全く意識してなかったみたいだね。俊哉くんが死んだ後の日記が以前と変わらなかったのは、そのせいだと思うんだ」

「正解。まー、姉ちゃんなら気付いて当然だよな」

そうでもないよ。呟いてからコーヒーの存在を思い出してすすった。それを見て善正くんも同じようにした。

「他には？」

「ほか？」

「なんだよ姉ちゃん」と唇を尖らせて言った。「終わりか？」

「ちよつと待つて、まだなにか意味があるの？」

「あつたりめーだろーが。たった一つだけのためにあんな大事なもん、例え姉ちゃんと言えども貸せねーぜ？ それに、さっき姉ちゃんが言った奴よりももっと、小学生でも分かっちゃうようなことなんだけど」

「本当に気付かなかった？」と念を押すように尋ねられ、首肯する。善正くんは深いため息をついてからベッドにうつぶせに倒れこんだ。スプリングで僅かにその細い体は浮く。「ちよ、ミルク危ないって」と私が自分のベッドを危惧すると、うつぶせた状態のまま、善正くんは空のカップを示した。そのまま握らせておくのも危ないような気がしたので、ふらふらと揺れる手から奪い取って、机の上に置く。「まーでも」とうつぶせたまま続けた。

「そっちに気付いたんなら、もう一個に気付くのも時間の問題か。頭なんて使わなくていいよ。理詰めで考えすぎちゃいけねーんだぜ、姉ちゃん？」

ほらほら右脳派になろうぜ、と掌を開いてまるで彼のような仕草で宙を舞わせる。どうしてか、その動きを見ていると焦燥に駆られるような心持になったので、立ち上がって両の手でその手をぱしり

とつかんだ。思いのほか冷たい、つるりとしたまるでプラスチックのような指だった。指先はいくらか硬くなっている。「猫かよ」という声を見無視し、しばらくそのままにしている、私の体温が移ることはないようだった。冷え性だろうか。

「まーでも右脳的で本能的な行動だな。おめでとう姉ちゃん。姉ちゃんはおれの言わんとしていたことにちゃんと気付くだろう。そして晴れて猫の道に足を踏み入れた」

「冗談じゃないよ」

少しばかり惜しいような気はしたけれど、手を離れた。離してから外気の方がむしろ暖かい気がした。

「猫っていうなら、善正くんの方が猫っぽいよ。さっきからだだららしちゃってさ」

そう言うのと、もそもそと起き上がりベッドの上で胡坐を組んだ。それから腕も組む。んー、と声を漏らしながら目を硬く閉じ、「いや、そーでもないんじゃないかな」と反論した。「そうでもないよ」と私も反論した。

「善正くんって気まぐれだしさ。今日だってほら、なにも言わないで突然来たじゃない。そのくせして帰りの遅い私に文句言うしさ。本当に困るよね」

「いやいや、本音言うとき、ちょっと心配だったんだよな。もしかしたら姉ちゃんが日記の意図をこれっぽっちも理解してねーんじゃないかなーとかさ。だから答え合わせかつヒントを差し上げてあげようとはせ参じてあげたんだぜ？　オレっていいやつじゃん、みないな」

「勝手に言うてなよ」

「じゃあ、勝手に言うよ」

そう言うて、ぱちりとまぶたを開く。いつもならば茶色く見える瞳は、影によって黒く染まって見え、揺らぎことなくまるで巖のように、そこに存在した。私の目をしっかりと見てはいるけれど、それは私を見るものではなく、私の目の表面を見るものようだった。

このような善正くんの瞳を、私はこれまでに一度として、見たことがない。少なくとも、そのような憶えは全くなかった。善正くんに限らず、それは今までに私が会ってきた人総てにおいてでもいえる。僅かに細める目元によって心臓をわしづかみにされた心地になり、何かを紡ぐために開こうとした口元によって自身の耳の存在を強く感じ、息を吸う動作によって呼吸を忘れた。まるで、私の全権を支配されたような。

「姉ちゃん、どうしちゃったんだよ？」

僅かに湿り気と震えを孕んだその声に、身震いをしそうになる。原因は恐怖とも畏怖とも異なる、さながら同情とも言うべきであろうか。その影響力は壮絶なものであると同時に思いもかけないことでもあったので、私はつい言葉にはならない息を口腔内に留めることが出来ずに、漏らしてしまった。じとりとこちらを見たまま動かない善正くんは、私がまともな答えを返さない限り、その場から微塵も動かないのではないかというほどに重量に満ちた存在感を与えている。そのため、答えを返そうと開く口はいつものように動くことも、先ほどのように滑らかに動くこともやはりなく、開いたまままで苦痛にあえぐかのようにただただ無意味に息を漏らし続けた。その間に数十通りの答えが思い浮び、数通りの質問が思い浮かんだけれどそれにも意味はなかった。声が出ない。声が出なければ、伝わらない。

「く、あ」

やつとのこととで絞り出した声も、文章にはならなかった。善正くんは動かず、揺らがない。まるで瓜二つの存在の最後の姿のように私は開いたままの口を閉じ、からからに渴いた喉で、無理矢理にっぱを飲み込んだ。荒くなった呼吸を整える。それでも鼓動はおさまらなかった。けつと息を吐く音が聞こえた。

「母さんに聞いたよ。あの野郎、なんにも隠すことなく言いやがったぜ？ 昨日のこと。いままで何をしてたのかも聞いた。やっぱりあいつは、そういう奴だって思った。かなり前からそんな気はして

いたけど、本人に聞いて、確信した」

「あいつはくずだ」と続けざまに吐き捨てた。その言葉にはっとした。善正さんの口から、そのような言葉を聞くことがあるうとは、露ほども思っではいなかった。

「あいつはくずだ。もう死んだ奴のことをいつまでもいつまでも、まだ生きているかのように思っている。気持ち悪い。ピアノの部屋もすげーけど、兄さんの部屋なんてもっとすげーぜ？　まるつきりなにからなにまでそのままだ。あの日花瓶に刺していた花を再現するために、花が悪くなるたびに同じ色で同じ模様の同じ形の花をどつかから探し出してきて、同じさし方をする。水だつて同じ量しかいれない。机の上に置いたプリントも、掃除が終わってからわざわざ同じ位置に置くんた。落ちるか落ちないか、そんなぎりぎりのところにだぜ？　カーテンの開き具合、本棚の一番端の本を立てかける角度、テレビのリモコンの位置。なにからなにまで本当に一緒だ。あいつが写真を持ってやがってさ、それで確認したら本当に、本当に同じだったんだ」

「狂ってやがる」言い終えてから、息を一つ吸って、またそう吐き捨てた。「気持ちが悪い。得体の知れない何か変な宗教に入信した気分だぜ、全く」

「……そんな言い方は、ないんじゃないかな」

話を聞く一方で落ち着こうとしていたことが功を奏し、ついに今を以って私は言葉を発することが可能となった。それでもいつものように思いをめぐらせることはやはり出来ないし、満足な言葉を返せる自信もなかった。それでも言葉を紡ごうとしたのは、良美さんを守るためではなく、自分を守るためでもなく。

「そういうことは、あまり言わないほうがいいと思うよ。良美さんに直接言うならまだしも、良美さんの『敵』の私に言うなんて。まあ、対象を私個人に限ったことでもないけど」

「……姉ちゃんはそのやって、大事なところでは自分の意見をはっきりと言わねーんだよな。あくまで一般的な意見みたいになさ」

「保身のためだけだね」

「姉ちゃんのそういうところ、嫌いだ」

「うん、私も」

「でも、もういない」と続ける。「今までの私は、もういないんだよ、残念だけど。だから今のも嘘なんだよ」

「なんだ？ それ？」

「突然わけわかんねー話に飛びやがった」と善正くんは苦笑した。それに私も苦笑で答える。「まー、でも」

「じゃーオレはやっと、姉ちゃんのちゃんとした意見を聞けるわけだよな？」

「そう、だね。そうなるね」と、少し後悔の念を抱かないこともない。思い切ってその念は払いのけて、深呼吸を一つする。「結局さ」「私、俊哉くんが嫌いなんだよね」

言ってからやはり後悔して、ちらりと善正くんを見るけれど、それはまるで当然のことを聞かされたかのように動じていなかった。あれ、と疑問を抱かなくもないが、それも払いのける。

「善正くんが、良美さんが、京都さんが、俊哉くんにどんな思いを抱いていたとしても、それは無感情だったり愛情だったり友情だったりしたところで、私は俊哉くんのが嫌い。大嫌い。嫌いすぎて嫌い。けどそれをいままで一言も漏らさなかったのは、結局は保身のためなんだ。誰が傷つくとか、そんなのは全部抜きにして、ただただ、自分が傷つきたくなかったんだ」

「うん、それで」と間髪いれずに善正くんは催促する。それほどきちんと考えていることでもないの、はつきり言うことが出来るかどうか心配だけれど、続けた。「うん、それでね」

「だからそういうことを全部抜きにして、こうして私に善正くんが話してくれたのは、すごいことだと思うんだよね。誰かの悪口だとか陰口だとか、そういうのは実際とてもつらいと思うんだよ。言う方も、聞くほうも。でもそれと同じくらい私は嬉しく思うんだ。それが許される対象として見てくれたってことにね」

「これが今、私が思っていること」と言った。善正くんは答えない。まだ続きがあると思っているのだらう。そう、それで正しい。「けど」

「これが本音。うざったい」

要点は短く、簡潔に。なにごとにもおける鉄則だ。言い終えてからすっかり忘れていたコーヒーを飲む。ただの苦い水へと変わっていた。それでも無理矢理に、喉の奥に流し込む。善正くんはすっかり頭を垂れてしまっていて、こちらからもおそらく向こうからも、互いの顔を見合うことが出来ない。私もつい先日までこうして彼と毎日過ごしてきた日々を思い出した。背筋をなにか百足のような奇妙な虫が這うような心地がした。そしてそれはいったん思い出されてしまうと、なかなか払拭することが出来ない。腕を背中に回して掻こうかと思ったところで、善正くんは顔を上げた。そして、尋ねる。

「うざったいって姉ちゃん。どうしてだ？ オレがうじうじ姉ちゃんに話してるんことがか？ それとも母さんの悪口ばかり言ってるんことがか？」

「まあ、どっちもかな。しいて言えば後者の方だけど」

躊躇ってから、「良美さんはね、私と同じなんだよ」と続けた。

善正くんは目を丸くしてこちらを見る。

「さっき言ってたみたいに、良美さんは俊哉くんにいまだに縛られているよ。その点において、私は同じだと思うんだ。だって俊哉くんに縛られていなかったなら、私は疾うの昔にバイオリンをやめていただらうし。だからさ、私と良美さんは言ってしまうえば同類なんだよ。だから、同類を侮辱されたなら、それはまあ、怒るのが普通だよ」

その発言に善正くんは唇を尖らせた。「『敵』じゃなかったのかよ」

「そうだよ。だからって別に矛盾はしていないでしょ？ よくあることじゃないそんなこと」

「……まー、そうか」

「そうだよ」

それで納得してしまっただけらしい善正くんは、そこでうんうんと頷いた。なにか今ひとつ細部がきちんと伝わっていないような気もするが、ともかく大筋は伝わったことだろう。それさえかなってれば、善正くんのことだ。きっと自分で気付くはずだろう。「それで結局さ」善正くんが口を開いた。

「姉ちゃん、何がしたいんだ？」

三度目となるその問いを繰り返した。ここで私は答えなければならぬ。三度目の正直だ。そしていまなら、それができる。

「私は」

善正くんの目をしっかりと見る。がちりと視線が交わった。互いに一度微笑んでから、続ける。

「みんなを、助けたい」

言い終えて、口をつぐむ。瞬きすらしない善正くんが何かアクシヨンを返すのを待ち続け、そのまま数秒の沈黙が続いた。こらえきれなくなったか、瞬きをしたところで、ゆっくりとその唇が震える。かすかに聞こえるか聞こえないかの音量に耳を澄ます。しかし聞こえることはなかった。なにか薄い膜でもあるかのように、消え入りそうな声は消えてしまう。そしてそれまでより少し大きな音量で、

「みんなってさ」と続けた。

「そのなかに、姉ちゃんは含まれてるのか？」

「……分らない」

本当に分からなかった。自分のことを考慮したうえでの考えなのかどうか、落ち着いて考えても分からなかった。それでもそう思わずにはいられない。それはきっと、彼のせいなのだろう。他でもない、以前の私を殺してくれた彼。彼の追い込まれた姿から、総ては始まったのだから。「でもね」と続ける。

「私のことなんて、二の次でいいんだよ。だから私が含まれていようといまいと、善正くんたちには関係のないことじゃないのかな」

「……関係ない、なんて」

「どうしてそんなことが言えるんだよ」と茶色の瞳を揺らしながら尋ねた。「自分のことがどうでもいいのかよ」

「……そうかもしれないね。そんな気もするよ。だって今までは保身のことばかり考えてきたからね」

そのツケが回ってきたと考えれば十分に納得できる。そうでなくとも、私以外の誰かを優先したいと考えている今なら、そんなことは問題にもならない。訊かれるまでもなく、私の中では既決している。

「なら、オレが姉ちゃんを助けてやるよ」

だから突然のその宣誓には少々面食らってしまった。きっと私は目を丸くしていたことだろう。善正くんは苦笑しながらも、「終わったらな」と続けた。

「姉ちゃんが満足するまでオレたちを助けたら、助け終えたら、オレが姉ちゃんを助けてやる。だから安心しなよ。安心して、姉ちゃんはやりたいようにやりたいことをやればいい」

「いいよ、そんなことしてもらわなくても」

「いや、駄目だ」

「そうじゃなきゃ、オレが納得できない」と強く主張した。「姉ちゃんだけ好きにさせない」

「オレだっと思っていたことはやるよ。それに、姉ちゃんに貸しをつくるのは嫌だ」

「……ありがとう」

「どういたしまして」

言って、気付いたように壁に掛けられた時計を見てから善正くんは立ち上がった。ベッドに隠れて見えていなかった鞆を手取る。どうやら学校の帰りに寄ったらしい。そしてポケットから例のニット帽を取り出してかぶる。「ごめんな」

「邪魔したよ。姉ちゃん受験勉強、大変だろ？」

「大丈夫だよ。善正くんの方こそ大丈夫？」

「誰に訊いてんだ」そう楽しそうに笑いながら答えた。「オレを誰だと思ってるんだよ」

「兄さんの弟だぜ？ 勉強が出来ないわけねーだろ。それより姉ちゃん、まだ志望校決まってるじゃないって、母さんが言ってたけど」

「ああ、それなら大丈夫」こちらにも笑顔で返した。「もう決まったよ」

「まだ秘密だけどね」

「ずりーよ」といっそう楽しそうに善正くんは笑う。「じゃあヒントだけでもくれねーか？」

「そうじゃねーと、あまりにフェアじゃねーだろ」

「うーん、そうだね。だったら……」暫く考えてから、答える。「続き、かな」

「夢の続き」

「意味分かんねーよ」

笑いながら、善正くんは部屋を出た。ばたんとドアの閉まる音の後、ぎしぎしと階段を下りる音、玄関のドアが閉まる音。それらを聞き終えて、鞆の中から善正くんの日記を取り出した。ぱらぱらと例の日の周辺までめくる。先ほど見たときはまるで異なり、汗もかいていないし、鼓動も変わらない。上手くつまめなかったページの端もつまむことが出来た。一枚一枚を丁寧にめくるという、同じことの繰り返しの中で、それは、今までとは異なる感触。

その厚さは、物語っていた。

005

かざりと音を立てて閉じられたノート切れ端を机の上に置いた。ベッドに腰を下ろす。先ほどまでいた善正くんのぬくもりは、もうなくなっていた。いつも通りの座り心地に、冷たさ。いつもならば不快にも思わないようなことでも、今日ばかりはそう感じられなかった。なんでもいい。ただぬくもりが欲しいと感じた。

しかし、そうも言っていられないだろう。

善正くんが貸してくれたノートの『あの日』のページと、その次

の日のページの間。そこに、この紙片は挟まれていた。嚴重に糊付けされ、気づかれにくいように紙を薄くして。けれどそれも所詮は「気づかれにくいように」というものであり、普通の人ならば、ページをつまんだ段階で気づくだろう。それなのに私が気づかなかったのは、やはりそれだけ緊張しながらページを繰ったからだろう。そういえば何度もつまもうと試みた記憶がある。つまりあれは緊張からにもよるが、そのような理由もあったわけか。

書いたのはこれも善正くんのようなだった。字のつたなさから当時書かれたものだろう。内容は日記と全く異なっていて、無感情であることにも言及されており、さらには自分の思う死の理由までも、丁寧に書いてあった。善正くんのことを過小評価していたのかもしれない。正直、私は当時でこれだけ考えることが出来とは思ってもしなかった。

『彼の死。それについてももう一度考えることが必要だろうか。いや、疑問に思うまでも無い。間違いなく、考えるべきだ。断定さえできる。そうしなければならぬ、と。私が叫んでいる。私の中の私が、叫び続けている。

だから、思い出そう。

原点回帰。『彼の死のことを総て思い出さないからには、話はどうあっても進まないだろう。戻らないだろう。いずれは必要になることだ。このまま逃げ続けてもいられない。むしろよくここまで逃げ続けてきたものだという賞賛さえ、今の私には贈れそうだ。今なら、振り返ることが出来る。彼のおかげで、振り返ることが出来る。振り切ることとはできない過去を受け入れる日が、三年の遅れを以って私のもとへと訪れた。

だから。

三年前。あの日のことを思い出しながら、私はベッドへと沈み込む。ゆつくりと、包み込まれるようだった。

006

「カナは、高校どこに行くの？」

あの日は確か快晴だった気がする。加えて風も無かったので、冬だったけれど随分と暖かい日だったと思う。だから給食を食べたあと、友達三人とグラウンドの端の芝生の上で談笑をしていた。たわいもない話。それはまるで昨日のドラマはどうだったかとか、今日の午前の授業はどうだったかというようなものだったと思う。なにぶんそのような話だったので私の記憶からはすっぱりと抜け落ちている。だけれど、空はやけに真っ青で、それを二つに裂くように伸びる飛行浮雲が、まるで夏のそれだったことは妙に脳裏に焼きついていた。

そのとき私は確か友達三人の話についていけなくて、ぼんやりと空を眺めていた。そして先のように、夏みたいだなあなんて思っているところに、不意に世界の外側から声がかけられたような心地がして視線を戻すと、三人が三人ともこちらを見ていたのだ。もしかして私に質問したのだろうかと気になって、「なにか言った？」と私は訊いた。

「もう、カナはもつと人の話を聞きなよ」

友達の一人のその言葉に他の二人は笑いながら頷く。言った彼女は少し頬を膨らませて、こちらを上目遣いで見ていた。そんなことをされても何を言われたかは分からないので、「え？ なに？」ともう一度訊いた。

「高校の話だよー」

頷いた二人のうちの左側が、問いに答えてくれた。「高校？」と呟いてみると残りの一人が「カナはどこに行くの？」と続けざまに訊く。それでも一人は頬を膨らましたままだった。私が少し申し訳なさそうな顔をしてから「みんなと同じとこだよ」と答えると、その場にいた全員が驚きとも取れる声を上げた。

「え、なに？ 私なんかへんなこと言った？」

今度は私が驚いて思わず訊くと、さっきまで頬を膨らませていた彼女がいつもより少し驚いたような表情をして「いや、だって」と言った。それでも私は意味が分からなかったので、首を少し傾ける。

三人が三人とも示し合わせたように顔を見合い、まるで攻めあぐねているような、誰が先陣を切るかを決めかねているような、そんな雰囲気だった。

だって、ねえ、と漸く言っただのは誰だったか。その言葉に全員が頷き、余計に私は首をかしげることとなる。一人だけのけものになされたような心地がした。正直あまりいい気分ではなかったのだ。しばらく待つてから、「もう、なに？」と追求すると、しぶしぶといった風に、右の方から話し始めた。

「カナは私よりも頭いいから、私立とか行くのかと思ってた」

「うんうん。私立じゃなくっても、うちの市には公立でもそこより偏差値高いところあるし」

「隣の市にだって進学校あるよー？」

均衡が崩れたことと、さほど嫌な内容でなかったことに胸を撫で下ろす。けれど下手な発言はできないような内容であるので、安心はしきれない。そこまで考えてから、ひとまずは「いやいや」と返した。

「みんないつつもそんなこと言うけどさ、私そんな言うほど成績よくないよ？ 行っても中の上くらいだよ」

これは間違いなく本心だった。言いながら、もつと言いつくろったほうがいいかとも思ったけれど、本心にまざる嘘はないだろう。しかしどちらにせよ三人はそれを謙遜と取ったようで、「えー」と言葉を漏らす。

「でもカナがそんななら、私だけ頭悪いの」

「ね、そうだよね、あたし底辺？ みたいな」

「むしろ頂点だよー」

ねー、なんていいながら三人は顔を見合わせる。そんなことをされたので、途端に先ほどのように答え方に困ってしまう。とりあえず苦笑を浮かべながら考えて、「でもね」と言う。

「でもね、高校って入るときは成績よくっても、その後落ちていく人が結構いるみたいだしさ」

「そりゃそうだよ」

だから困っていると言いたげな風に三人は私を見る。今度は本当になんといえいいのか分からずに苦笑だけを返した。それでもなおこちらを見ているので、その視線に耐えられずに目をそらす。再び目に入った空を裂く飛行機雲は、さっきよりも広がっていて、川のように広がった。

「でもさでもさ、カナ」

ん？ と今度はちゃんと声も聞こえて反応も出来た。私が目をそらしている間になにかを話していたようでそのことを訊くのだろう。「今度はなに？」と返した。

「や、さ」

「もいつこのほうの高校に、カナの彼氏さんがいるんじゃないの？」

「そっち行かなくていいのー？」

「なっ」

このころ、この三人のうちの誰かがどこかで私と『彼』が話しているところを見たせいで、そのような噂が流れてしまっていた。

この噂が、私には不思議だった。なぜ『彼』と私が付き合っているように見えたのか。態度は、それはもう十年ほどの付き合いになるのだから仕方がないにしても、内面的にも外見的にも、私と『彼』が釣り合っているはずが無いのに。『彼』のような人間に釣り合う人なんて、なかなかいないのに。

そしてまったく予想も出来ていなかった方向の話に、少しとは言わずかなり驚いてしまった。なるべく平生を装うようにして「違う違う」と答える。

「俊哉くんは彼氏なんかじゃないよ」

「俊哉くんね」

「年上にくんづけかー」

「幼なじみみたいなものだから仕方ないじゃない」

「カッコイイ人なんだよね」

「いやいや、カッコイイってより、キレイだったよ」
「いいな」

返すべき言葉がまた見つからなくなって、私はかぶりを振った。
何を言えばいいのかが分からない。何を言っても意味の無いような
気した。とりあえずは早く話を切り上げようと口を開く。

「どっちにしたって、私が高校入る頃にはもう卒業してるんだよ」
「だからどっちでも同じじゃない」と幾分投げやり気味な言葉が出た。
このときの『彼』は今の私と同じ高校三年生だった。学校は今
私が通うところではなくて、善正くんが志望しているところだ。志
望理由は「近いから」だった気がする。よくは憶えていないけれど。
「高三なんだ」

「じゃあそっちも受験じゃん」
「進学するのー？」

上手いように話はそれたようだったが、それはそれで答えること
が出来なかった。けれど、自分にどうという内容でもないので、す
ぐに「よくわかんない」と返すことができた。

実際この時期はあまり『彼』と会うことも少なく、大学などの受
験についての知識も私にはなかったので、そもそもそのような質問
をすること自体無かったように思う。もしかしたら『彼』が話して
いたのかもしれないが、少なくとも私は覚えていなかった。

そしてきつと訊いていたとして、それは教えてくれなかっただろ
う。彼や良美さんが言っていたように、『彼』は私のように、迷っ
ていたらしいから。

「でもきつと俊哉くんのことだから、音楽家とかになるんじゃない
かな」

「音楽家？」

「あ、ピアノがすごい上手いんでしょ？ 大会でいつも一位だとか」
「聴いてみたいな」

そういえば、私暫くの間『彼』の弾くピアノを聴いていないよう
な気がした。初めて聴いたあの曲の切れ端のようなものが、耳の周

りを泳ぐ。

「でもカナも、バイオリンやってるよね？」

「うんうん。すっごい上手」

「こっちにきたらできないかもよー」

バイオリン、という言葉が胸にぐさりとささった。致命傷ではないかというほどの深いところまで。それでも「ああ、大丈夫」と平生のように返す。どうせ家でできるし、と言おうとしたが、それはかなわなかった。そして私は少し三人から視線を外す。

この頃の私はバイオリニストを手放しそうになっていた。というより、もう既に半ば手放していた。だから楽譜をもらうために『彼』の家に行くことも少なく、『彼』のピアノを聴くこともなかなかなかった。勿論のことバイオリニストなどという夢も持たず、せいぜい趣味としてのバイオリンを楽しむだけだった。それでいいとさえ思っていたほどだ。このままバイオリンなんて忘れてしまえ、とも言えるくらいに。

「でもさ」

ふと視線を戻すと、三人がこちらを、じいっと、食い入るように見ていた。今度は何を言われるのかとひやひやしながら「なに？」と訊ねる。なぜか向こうが躊躇うように、ゆっくりと口を開く。

「カナはさ、でも、カナって本当は」

とそこまで言って再び躊躇ったときに、昼休みの終わる予鈴が鳴った。次の時間は体育だったはずで、だから全員が急いで立ち上がった。早く着替えに更衣室に行かなければならない。誰が示し合わせるでもなく、小走りに校舎へと向かう。

「ねえ、さっき訊きかけたのってなに？」

その途中に、なんであれ途中に止められては気になるのでそう訊くと「やっぱりなんでもないよ」と返ってきた。その言い方が妙に気になって、ふざけ半分で何度も訊ねながら校舎に入る。いつも通りの昼休み。

飛行機雲は、もう消えていた。

放課後になつて、昼休みにした話がやけに鮮明に頭に浮かんできた。机に入れていた教科書などを鞆に押し込みながら、なぜそんなことを思い出しているのかと氣になった。なにか私の中で引っかかっていることがあるのだろうか。そこまで考えが及んだところで、その時の感覚が返ってきた。耳の周りで泳ぐ『彼』の曲の切れ端。そのときのこと。それからのこと。だからやけに、暫く触れていないバイオリンも恋しくなつてきて、『彼』の曲も聴きたくなつてきて。そんなことを思いながら、立ち上がった。

その私をすぐさま例の三人が取り囲んだ。遊びの誘いだつた。いつもなら誘われるがままについていくものの、この日はそんな気分でもなかったので、やんわりと断つて一人で教室を出た。いつもより早歩きになつているのが不思議だつた。

昇降口を出ると、昼間とは一転した少し冷たい風が吹いていた。明らかに冬のそれだつた。いくら強いので髪が舞つて鬱陶しく、前も見えなくなるので、体育のときにつかつたゴムで留めた。それでも前髪はどうしようもない。諦めて歩き出すと日向に出て、日差しは暖かいままだと言つことに氣がついた。早歩きのまま、家へ向かつた。

今と同じように当時も徒歩で登校していた。ぎりぎり自転車登校を許される距離よりも家が近くにあつたからだ。時間にして十五分今とさして変わらない。高校になつてからも徒歩で通うと決めたのは、このせいだつた。けれど、やはり学校が違つので通学路も全く違ふ。つまりは中学生の頃の私は、あの河原沿いの道を歩くことは、通学の上ではなかつた。

この季節にしては珍しく早く家に着いたのは、歩きがいつもより早かつたからだろう。玄関の扉を開けて入り、靴を脱いであがる。いつもなら綺麗にそろえるところだが、この日はそうしなかつた。何故なら、すぐに家を出るつもりだつたからだ。だから真つ先に部屋に向かつた。鞆を置いて、着替えて、バイオリンの入つたケース

を持って部屋から出るまでに五分も経っていなかった。脱いだばかりの生ぬるさの残る靴をまた履いて玄関をから出て、今度はそばにとめてあった自転車に跨った。ペダルを漕ぐ足は異様に軽い。『彼』の家までの十五分間、五分ほどにしか感じられないくらいに。

「あら、いらつしやい」

自転車をとめて、インターホンを押すと、迎えてくれたのは良美さんだった。『彼』はどうしたのかと訊くと、まだ高校から帰っていないと言った。訊くまでもない当然のことだった。

「まあなんにせよ、俊哉はもう一時間もしないうちに帰ってくると思うから。とりあえずあがってちょうだい」

「はい、お邪魔します」

促されるままに家上がり、また促されるままにソファに座った。一分と待たないうちに湯気のたつカップを二つ持ってきてくれたので、ありがとうございますと小さく頭を下げながら両手で受け取る。中身はココアだった。息を吹きかけてから口をつけた。熱い。暫くは飲めそうになかった。テーブルの上に丁寧に置く。一方、良美さんは熱さなど感じていないように、涼しい顔をして飲んでいた。憧憬の思いを少し、抱く。

「なあに？　じろじろ見て」

自分でも気づかないうちに見入っていたようで、その声にはっとした。なんでもありませんと言って、恥ずかしさを紛らわすためにココアを飲むとするが、熱くてかなわずに余計恥ずかしくなった。「随分、久しぶりじゃない？」

カップを置いた良美さんが尋ねた。私も、どうせ飲むことはまだできそうに無いので同じように置いて、顔を上げる。正面から顔を見る。良美さんは最後に見たときと全く変わらなかった。最初に見たときとも変わったような気がしないから、それもまた当然のことだった。疑問に思うまでもない。

「ええ。新しい曲をやりたくなっちゃって。それで、楽譜をちよっ

と借りに来ました」

思いついた嘘。前にこの家を訪れたのは一ヶ月ほど前のことだったけれど、それからこの日までの間にバイオリンに触れることはあれど弾くことはなかった。このような嘘をついたのは、彼女にそんなことを知られたくなかったからだ。

「へえ、そうなんだ。じゃあ先月からやってた曲をちょっと弾いてごらん。楽譜は無いけど、憶えてるわよね？」

そんなことを、けれど良美さんは何気なく言った。まるで私の嘘を見抜いているように。そしてそうなることを私は分かっていた。よくわかっていたのだ。それでももしかしたらと思つて。良美さんには知られたくなくて。答えにつまる。沈黙が続く。

「……まあ、いいわ」

嘆息。

良美さんはそうして、置いていたカップを手にとった。私は膝の上に置いていた手を握り締めた。悔しさともむなしさともいえない気持ちでいっぱいになる。とても飲み物を飲めそうな気分ではない。自然と顔を伏せるようにした。とくに意味は無かったのだけれど、良美さんの表情を窺うことができなくなったのは、助かった。

「別にね、私はカナちゃんならちゃんとわかつてるって思ってるのよ？」

そんな言葉を良美さんは続けた。私は顔を伏せたままで聞く。聞き流しも、聞き漏らしもないように。言葉をしっかりと受け止める。そして暫く言葉を連ねたのちに、良美さんはカップを再びテーブルに置いた。

「はい、お説教終わり」

その言葉で私は顔を上げた。良美さんはこちらに向かって微笑む。私もなんとか笑おうとして、しかし返せたのは苦笑だった。それを見てもう一度笑んでから、良美さんは「頑張つてね」と言った。

「カナちゃんが頑張るなら、私はカナちゃんの味方だから応援するわ。でも頑張らないなら、味方にはならないわよ？ だから」

私を味方でいさせてね、と良美さんは言った。今度はちゃんと、しっかりと笑みを返すことが出来た。私はカップを手に取り口をつける。ちょうどいい温度になっていた。そしてなにより、美味しかった。

「カナちゃんはもう、高校どこに行くのか決めたの？」

その日の昼間のようなことを訊ねられた。しかし今度は聞き逃すこともなく「はい」と答えることが出来た。

「一番近いところに行きます。友達もみんなそこに行くので」

「それでいいの？」良美さんは訊ねた。

「と、言いますと？」私も訊ねた。

「別に駄目だとは言わないけどね。本当にやりたいこととか、カナちゃんは考えた？」

言いながら、良美さんはカップをゆつくりと回した。中のコーヒーもゆつくりと回る。「考えました」

「考えた結果です。考えて、高校に先延ばした方がいいと判断した結果です」

「そ。ならいいわ」

まるで私の返答が既に分かっていたように即答して、コーヒーを飲んだ。それを見て私もココアを飲んだ。もう半分ほどなくなっていた。

「あ、姉ちゃん」

不意に階段の方から声が聞こえたのでそちらを見ると、善正くんがいた。どうやら二階の自分の部屋から降りてきたらしい。こちらまで駆け寄ってきて、少し短めの髪から覗く大きな瞳で、私と良美さんのカップを見た。そして良美さんにホットミルクを入れるようにお願いするが、あえなく却下され、つまらなそうな顔をして一人でキッチンへと向かった。それを見ながら気づかれないように小さく笑う。そんな私の姿に気づいたのか、良美さんは「いい加減私に頼るなって言ってるんだけどね」と苦笑いのような笑みを浮かべた。「まったく、俊哉とは全然違うわ。いつになったらあの子に似るの

かしら」

「善正くんは善正くんで可愛いですから、今のままでいいと思いますよ。それにすぐに似てきますって」

「そう？ 私にはむしろ俊哉がしっかりしてるせいで悪くなってる気がするんだけど」

「否定は出来ませんね」

「否定してよ」

そんなことを言いながら戻ってきた善正くんの手には、大きなマグカップがあった。きつといつも使っているものだろう。その中に入っているだろうホットミルクをすすりながら歩いていたので、良美さんにまた注意される。しかし今度はその注意を聞き流して、聞こえないとでも言いたげに私の隣に座った。

「なーなー、姉ちゃん。今日は何しに来たの？」

「うん、今日はね、楽譜を借りに来たの」

良美さんに言ったのと同じようなことを言った。緊張感はなくなっていたけれど、罪悪感のようなものが、今度はまわりついていた。「ふーん」と善正くんは頷いて、またホットミルクをすすった。とろけてしまいそうな甘い匂いが私の鼻を突き、少し思考が鈍りそうになる。自分のココアを飲むと、落ち着いた気がした。

「こら、善正」

その声に善正くんはびっくりと肩を震わせた。ゆっくりとそちらを、良美さんの方を向く。「宿題は？」

「終わったんでしょね？ ちゃんと」

「終わったよ、ちゃんと」と善正くんは口を尖らせて返した。「だから降りてきたんだよ」

「本当に？」と良美さんがさらに問い詰めると。「本当に！」と声を大にして反論した。その姿が妙におかしくて、私はまた小さく、隠すようにして笑う。「いいじゃないですか」

「今日だけは許してあげてくださいよ。私からお願いします」

「カナちゃんがそう言ってもねえ……」

「だから終わってるって！」

くすくすと、今度は隠しもせずに笑った。その私の様子を見て良美さんも困ったように笑って、「仕方ない」と言った。

「カナちゃんが一ヶ月ぶり来たことだし、今日だけは許してあげる。明日からはちゃんとするのよ？」

「だーかーらー！」

その姿に、今度は良美さんも含めて笑った。善正くんだけがつまらなそうな顔をしていて、それを見てまた笑った。面白かったのもあるけれど、なにより楽しかった。この空間が好きだった。この人たちも好きだった。それがなによりの理由だった。

しばらくすると「ちよつとトイレ」と言って善正くんは小走りに部屋から出て行った。その背中に「こら」と良美さんは投げかけてから、こちらに向き直り小さくため息をはく。「ねえカナちゃん」

「この子本当に俊哉に似るのかしら」さきほどと同じような質問を再び私にしたので、今度は少し真面目に考えてから、「さあ」と返した。「どうでしょうね」

「……私としては正直、あまり似てほしくもないと思うんですけどね。さつきも言いましたけど、善正くんには善正くんの良さがあるんですし」

「そうかしら」良美さんは頬杖をついて、物憂げに目を細めた。「私はもつとちゃんとしてほしいんだけどね」

「カナちゃんの言うとおり、善正にも善正の良さがある。それが間違いのないことは確かだわ。でもね、もつと根本的な部分では、俊哉に似てほしいのよ。表面的だけなら今のままでも多少は許せるんだけどね」

「それはちよつと無理がある気がしますけどね。表面的な部分のほうが人は似やすいですから。なんにせよ善正くん次第でしょうけど」

私はすっかり存在を忘れていたココアを口に含む。味が無い。しばらく放っておいたせいで、おそらく粉が沈殿してしまっているの

だろう。少し自分で回しながらテーブルに置いた。「実際」

「実際は」良美さんは言う。「実際はカナちゃん。あなたはど
つているの？」

「善正に、俊哉に似てほしい？」

「似てほしくはないですね」私は自分でも驚くほどの即答をした。

「逆もなんですよ」

「善正くんには善正くんの良さがある。それと同じように、俊哉くんにも俊哉くんの良さがあるですよ。良美さんならよく知っているはずです。そしてそれはその人しか持たない固有のものなんです。だから、俊哉くんの良さを善正が持っていて、また善正くんの良さを俊哉くんが持っていて、それはもう良さにはならなくて、ただの」

ただの。そこまで言って私は言葉が見つからなくなった。悪いとも言いがたく、良くないとも言いがたく。そんななか。まるでそのどちらの側面をも孕んだもの。まるで始まりと終わりのどちらも持つ、小説や漫画のページのような。

「……なるほどね」

それだけ言った良美さんを見れば、いつの間にか頬杖はやめていた。そしてなにやらいろいろと言った私よりも理解ができたように頷くと、「そうなんでしょうね」と言った。

「きつと、カナちゃんが正しいんでしょう。そういうものだものね」

「いや、そんな、言うほどでもありませんよ」本音を言う。「所詮はゆとり世代の戯言です」

「自分らしく生きるだのと散々言われてきましたからね。それくらいは言えます」

「いえ、でもそれは正しいのよ。自分らしくしろと自由を押し付けるのがいけないだけで、その生き方自体は推奨できると思うんだけどね」

「……そうなんですかね」

「まあ、そうですね」良美さんは席を立つ。「ココアのおかわり

いる？」

「お願いします」残っていたいくらか一気に飲んでから渡す。ついでに善正くんの中身がなくなっていたので渡す。

良美さんは受け取ってから一つ微笑んで、キッチンへと向かった。その後ろ姿に見惚れていると、入れ替わりに善正くんが戻ってきた。濡れたままの手を拭くこともなく、振ってしずくを飛ばしながらこちらに来る。「良美さんに怒られるよ」と私が言っても「いーよそんなの」と返した。

「母さんはいつも兄さん兄さんってしつけーんだよ」

「でもそれは善正くんのためなんだよ？」良美さんとしていた話もあって、私は諭すように言った。「善正くんがちゃんとできるように」

「兄さんと同じになることがか？」

それこそそれまでの話だった。それも私のほうが言ってた方で。

善正くんの茶色い瞳を見る。確かに『彼』に似てはいるが、いうほどのものでもない。もちろん似ていないわけでもないが、完全にというわけでは、少なくとも、ない。髪の色だって、それこそ顔のつくりだって。まして内面となれば少しなりとも同じであるはずがない。けれど私は「うん」と言って頷いた。

「善正くんは俊哉くんと同じになることが必要なんだよ」

「……どーして？」いかにも不思議そうに善正くんは訊ねた。「どーしてだよ？」

「姉ちゃんならそんなことは言わねーと思ってたのに」

「それこそどうして？ 善正くんがなぜそう思ったのかについて私は気になるけどな」

そんなことを言われたって、とでも言いたげな風に善正くんは顔をしかめた。「ごめんね」

「意地悪してるみたいない方しちゃったね、ごめん。ただ私も良美さんと同じで、善正くんに立派な大人になってほしいんだ」

「姉ちゃんだってまだ子供だろ？」善正くんは問いたですように言

う。「オレにそんなこと言えんのかよ」

「確かに姉ちゃんもちゃんとしてるけどさ、それでも兄さんと比べたら勝てないと思うんだけど」

「それはそうだよ。私じゃ俊哉くんにはかなわない」それは音楽の面でも、それ以外の面でも。「でも」

「それでも私は、俊哉くんになんとかして勝ちたいと思うし、努力もしているつもりだよ？ 私としては、だけどさ。それで訊きたいんだけど、善正くんは？」

「オレ、は……」と善正くんは少しうつむきがちになりながらも、なんとかして答えを探そうとしているように見えた。

「どんな努力をしてるの？ ううん、そうじゃなくてもいい、どんなことを思っているの？ お兄さんに、あの俊哉くんを持って、善正くんはどう思っているの？ 超えたい？ どうでもいい？」

言ってから、さすがに言い過ぎたような気がして、もう一度「ごめんね」と言った。しかし善正くんはすぐに顔をあげて「いーよ別に」と返した。

「オレが悪かった気がする。うん、気がする」

「妙に頑固だね」

でもそういうところ結構好きだよと言うと、照れた風にうつむいた。その前とは違う、いつも通りだったその様に、私はほっと胸をなでおろした。内心ではやはり言い過ぎではないかとひやひやしながらの発言だったから。

「あら、戻ってきたの？」と言いながら、良美さんもキッチンから戻ってきた。善正くんは「うん」と頷いてから自分の席に戻ると、自分の目の前に再び置かれたカップに首をかしげた。その様子を見たので、私は口をはさむ。

「ああ、なくなってたから。もしかしていらなかった？」

「あー、姉ちゃんのおかげか。ありがとありがと」

そう言っただけで安心したようにカップに口をつけた。熱かったのかわからないが、すぐに口を離す。その動作に少し笑いながら、私も力

ツプを手にとって口をつければ、善正くんと同じ目にあつた。それを見た善正くんにも笑われ、どちらも見えていた良美さんにも笑われ。少し恥ずかしかったけれど、楽しくて笑った。

「そうだった」

そうしていると、思い出したというよりは思いついたように、善正くんがつぶやいた。「どうしたの？」と私が尋ねると、「聴いてほしいんだ」と声を強めて言った。

「なにを？」

「ピアノに決まってるじゃんか！」

「オレも兄さんに教えてもらつてうまくなつたんだぜ」と指を鍵盤において弾く真似をした。「そうなんだ」とつぶやく。自分なりに考えた結果か、それ以外なのはわからないけれど、ひとまずはそれでいいのだろう。とても小さなことかもしれないけれど。些細なことだけれど。いい兆候ではないだろうか、私は思った。

そんなとき。

「ただいま」

『彼』が 岩代俊哉が、帰宅した。

008

「ただいま」

その声は大海原を割るように、大山を真つ二つに割くように。まるでその日の昼間に見続けていた真つ青な空に伸びる飛行機雲のよ
うに、私の心に、思考の最深部に介入してきた。「ただいま」とい
うたつたの四文字だけで私は情報量過多に陥つたコンピュータのよ
うに動作が緩慢になり、思考が混線する。それは言葉の力ではなく
それを発する者の力で、つまりは『彼』、岩代俊哉本人から余すと
ころも隠すところもなく発せられる力によるものである。言葉があ
ろうとなかろうとそんなものに関係はない。『彼』という存在その
ものに私はすでに屈服しきっていて、だからなのはわからないが、
私は『彼』の顔を直視することは、当時できなかった。まして目を
合わせるとなるとなおさらである。数秒ならまだしも『彼』はどう

いうわけか人の目を見て話す癖が幼少のころから随分と備わっていた。そのため、その言葉に驚いて振り返った私の目と『彼』の目が交差したその瞬間。なぜだかよくわからない感情によって、私は即座に目をそらした。「おかえり」と返したのは私以外の二人、良美さんと善正くんだった。

「うん、ただいま」

そんな風に『彼』は二人に答えて、こちらを見たようだ。視界の端に『彼』をおいたまま、私はそちらを向くことはせずに同じように「おかえり」と一応、取ってつけたように言ってみた。

「うん。ただいま、奏」

その私に向けられた言葉に、全身に鳥肌が立った。ぞわぞわと、足元からツタが巻き付いてくるような不快感。それに加えての束縛感。思わずまぎらわそうと目の前のカップに手を伸ばす。つかんだ手は今にも震えてしまいそうで、それを隠すことに精いっぱいになって。ココアの熱さも甘さも感じることはできなかった。その代わりに『彼』の存在をひしひしと、味覚と痛覚を犠牲にした分、余計に強く感じていた。

「ひさしぶりだね。一か月ぶりくらいかな」

そう言いながら『彼』は空いていた良美さんの隣まで移動して腰を下ろした。ちょうど私とは対角線上で、だから私はそちらではなく良美さんとちょうど正面から向き合う。あまりにも体も視線も正したせいだろうか、良美さんが少し不思議そうな顔をした。なにか言おうと口を開きかけたところを、隣の善正くんが私の服の袖を引っ張った。

「なー姉ちゃん。ピアノ聴いてよ」

その言葉が、一瞬何のことかわからなかった。一拍おいてからそれまでにしていた話の続きだとわかる。「ああ」

「うん、そうだね。じゃあちよつと聴かせてよ」

できることなら早くこの席から離れたくて、私は腰を少し浮かせた。すると、「ちよつと待って」と言葉をはさまれた。誰が言った

る。軽い立ちくらみのような感覚があったが、おそらくこれは気のせいなのだろう。

「じゃあ、行こうか、奏」

「うん、わかった」

足元に置いていたバイオリンのケースを手にとって『彼』の後を追う。そういえば入れてもらったばかりのココアを飲み終わっていない。けれどやはりそれを飲むこともそれを断ることもなく、振り返りもせずに歩く。すぐに例のピアノのある部屋にたどり着いて、『彼』から先に中に入る。その日一日の暖かい日差しが差し込んでいたせいか、部屋の中はいつにもまして暖かく、たくさんの楽譜からの紙のにおいが鼻についた。不快感はない、慣れたにおい。落着きすら、私には感じられた。

「さて、と。じゃあまずは奏、なにか弾いてよ」

部屋に入って数歩歩いたところで『彼』は振り向いて、突然にそのようなことを言った。え、と私が口を開くよりも前に「そうだな」と続けた。

「先月ここから持って行った楽譜があったよね。あれ、弾ける？」

まさに良美さんのときと同じことの繰り返しだと思ったけれど、『彼』はそのことを知らない。しかしきつと気づいてはいたのだろう、私がその楽譜を練習していないことに。『彼』の前で嘘はつくことはできない。それはたまに逆の場合もあったけれど、前者の方が大半だった。だから私は「ごめん」と言った。

「実はあれ、練習してないんだ」

「どうして？」『彼』は訊きかえす。「どうしてやらなかったの？」
「教えて」

「バイオリンが、少し嫌になってて。だから弾く気になれなかったんだ」頭を下げる。「ごめん」

どうして『彼』に謝るのだ。その必要はないじゃないか。そんな声がどこから聞こえてきそうだった。だがそんなことを言う人は現実にはどうやらいなかったようで、代わりにしばしの沈黙が流れ

た。頭をさげたままで『彼』の言葉を待つ。心臓は止まっているのではないかと思うほどの速さで脈打ち、腰から曲げた体が弾んでしまいそうなほどだ。自分のつま先ばかりを凝視する。そこさえも落着きなくもじもじと動いていた。意図もしていないのに。そのうちにためらうような声で上から「顔をあげてよ」と言った。大人しく従うと、困ったような笑顔を浮かべながら『彼』は言う。

「なんで奏が僕に謝るのさ。やりたくもないことを僕は強要もしないし強制もしない。そうしてきたつもりだったんだけど」そしてちよつと私から視線を外す。「ごめんね」

「僕が悪かったよ。無意識にそういうことを、きつと、していたんだろっね、僕は」

そして今度は『彼』の方が頭を下げた。日頃は見ることのできないつむじが見えた。そうか右回りなのかなんてどうでもいいことにはばかり思考が回り、状況を読み込むのまで数秒かかる。「ちよ、ちよつと俊哉くん」

「俊哉くんこそ謝らないで。私の方が悪かった」と言いかけて「俊哉くんは悪くないんだから」と言い換える。

「それで、だから、弾けないんだ」

いくらかでも話をそらすか、戻すかしようとしてその言葉が出た。『彼』も顔をあげてから「ならいいよ」と言った。「やってないんだもんね」

「じゃあ、丸一か月やってないってこと？」

「……うん」

「そっか」

目線を私からきつて背中を向けて、部屋の中央のピアノの前に置かれた椅子に座る。私は座るものがないのでその正面で立ち尽くして、『彼』の次の言葉を待った。「ということは」

「練習した曲を弾きに來たわけじゃないよね。今日はなにをしにきたの？」

「えつと、それはね。俊哉くんのピアノが聴きたいと思って」

「ピアノが？」

そう言つて『彼』は不思議そうな顔をした。しかし私が「うん」と頷くとすぐにまたいつもの笑顔に戻り「わかった。弾くよ」と言いながら鍵盤を覆うふたをあげた。ゆっくりと指を鍵盤に乗せる。

「リクエストとかある？」

「ううん」

「俊哉さんの好きに弾いていいよ」私は言つた。『彼』は右手を少し握つて顎にあてて、どの曲をするかを考えているようだった。数秒間そうしていたかと思うと、「よし」と言つて再び右手を鍵盤に私は今のうちにと呼吸をする。それが『彼』の深呼吸と合わさつた。それからは、よく覚えていない。

今までに聴いたことのない曲ということとはよくわかつた。ただ私の記憶の中にそのメロデーは残されてはいない。残っているのは連想したイメージと、『彼』のすごく楽しそうな横顔だった。

その曲は一つの物語的なものとして私の中へと介入してきた。どこまでも広がる雄大な空。雲一つなく青く澄み渡り、世界中総てのものがとけ切つてしまいそうな空が、次第に今にも落ちてきそうな漆黒に染まつた雲に覆われてく。しかし雲よりも先に雨粒が落ちてきて私の鼻先を濡らす。指で拭つて、見ると真つ青な、雲の奥に控えているであろう空の青さを持った雨滴だった。広い空ならば美しいその色も、小さくこうして落ちてくることで、ポスターカラーを溶かした水のように不快感しか抱かない。けれど雨は強くなる一方で、気が付けば私は全身が青に染まつている。見渡す限りの総てのものも、大地も、青く青く染まつている。まさに空と一体になったようだった。黒く重たそうな雲が緩慢に、ずるずると消えていく。そのあとにあつたのは青い空ではなく先ほどまで私が見ていたものと大地で、それもまた黒い雲で見えなくなつていつて、強い力で私が、引きずられていく。落ちていく視界のなかで、黒と青が調和した世界を見つめる。美しいとも、醜いとも違う景色。

「どうだった？」

いつの間にか目をつむっていたようで、その声で視界が真っ暗になっっていることに気がついた。ゆっくりと瞼をあげる。まるで違う世界に来たようだったが、それは間違いで、ただ単に私が別の世界に行っていただけだということだった。久しぶりの体験にまだ体がついていけないながらも、「すごいね」と一応言っておく。「そうでもないよ」と苦笑いを浮かべながら返される。「まだまだだ」「まだまだ僕は伸びるよ。ここが頂点じゃない。もっとすごくなる。それだけのことはする覚悟だよ」

その言葉がそのまま私を責めているような気がして、それが少し表情に出てしまっただろうか。そしてそれを感じ取ったのか、『彼は「そうじゃないよ」と言った。

「これは僕の考え方で、僕の生き方だから。別に奏にどうこうってことじゃないからね、勘違いだけはしないでよ」

「奏には奏らしく生きてほしいんだからさ」と、私の生き方そのものを握っているかのように言う『彼の』姿が、時折途方もなく嫌いだった。けれど、本当の原因は私にあったのだろう。私がそれまで『彼』にばかり影響されて生きてきたから。今となってはそれが理解できてはいるが、当時はいえばそんなこともできずにただ不満に似た何かばかりを抱いていた。だからこのときだって本当に『彼の』言葉が理解できていなかったはずだ。よく覚えてはいないけれど、というのも、私はいまだあの曲から逃れることができていなかったのだ。そしてそれならば『彼の』言葉は頭にさえ入っていなかっただろう。いや、頭には入っていても、考えはしていなかったのだろう。

「さっきの曲は」

そのように考えたことについて、もちろん根拠がある、それはあのようなことを言われたというのに、私のした質問がこれだったからだ。「なんて曲だったの？」

「今まで聞いたことがなかったような気がしたけど」

「ああ、それはそうだよ」

「僕が作ったんだから」『彼』は屈託なく笑う。「奏に最初に聴いて欲しかったんだけど」

「そういう観点からだ、どうだった？」

真正面から直視されて、私は思わず答えに渋る。そしてなにを言うべきかも決めかねていた。「すごい」という一言はそれよりも前に言っていたが、本当にそれしか思い浮かんでこないのだ。これまでに数々の音楽を聴いてきた。それでも「すごい」という一言でしか言い表せることができなかったのは『彼』の音楽だけだ。まあしてそれが『彼』の作った曲ならば。

「やっぱり、すごいよ」

認めざるを得ないのだ。私のような凡才にとっては。非才にとっては。認めたくなくても、認めたくても、どちらでも関係なく、ただ見せつけられて、魅せられる。自分でもなれるのではないかと身勝手で、傲慢で、不可能な願いさえ抱いてしまう。そんな人間だったのだ。『彼』は。誰彼かまわずひきつけて、誰彼かまわず引き込んで。その中には私も善正くんも、はては彼だって組み込まれているのかもしれないのだ。

『彼』は、いつの間にか笑っていた。珍しく声をあげて、心から楽しそうに。その姿が妙な感じがして、加えて唐突なことだったので私は反応ができずに、きょとんと、呆然とその様子を見ていた。ひとしきり笑って、『彼』はやっと私のことを思い出したように、「ごめんごめん」と言った。

「いや、奏も面白いなあって思ってたさ。うん」

まったく意味が分からなくて、まるで頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいるのではないだろうかと思うほどに悩んでいると、「ごめんごめん」と『彼』はまた謝った、今日はどうしてこんなに謝るのだろっ、と思ったほどだ。

「さて」

笑い終えて、いつも通りの表情になってから言った。なにがさてなのかさっぱりわからない。

「ここから本題に入りたいんだけど、奏はまだなにか僕に用事があったりする？」

嫌な、予感がした。

けれどそれも一瞬のことだった。「ううん、ないよ」とすぐさま返す。言い終えたのがざらざらとしているようで不快だった。唾を一つ飲み込む。沈黙の中でゴクリという音が空気を塗り替えるように響いた。『彼』の顔に笑みが浮かんでいく。ゆっくりと。「奏は」

「奏は、バイオリンが好き？」

心臓を貫かれた。どくどくと血があふれ出す。体温が、指先からつま先から奪われていく。視界も思考もにじんで、痛みよりも強い眠気が私を噛み砕いていく。『彼』の姿がぶれる。

胸に手を当てる、というよりは押さえつけるようにして、私は踏みとどまる。倒れない。しっかりと視線の中央に『彼』をおく。そのままの笑顔で私を見、口角を釣り上げる。いやらしい風でも嫌味な風でもなく、ただ、笑う。

「僕はピアノが好きだよ。それをやっているときが一番充実しているように感じるし、なにより楽しいからね。これがなかったら、もしかしたら僕は生きていけないかもしれない。愛ともいえるかもね、恥ずかしいけど」

嘘はやめてほしい、と思う。なんでもできるくせに、と思う。なんでもできるくせに一つだけを選んで、一つだけを愛して、そんなことが許されるのかと思う。本当にそれだけしか見ないで、ほかのものを消去して、愛しぬくことができるのかと思う。なんでもできるならその才能におぼれていつそ何でも愛せばいいのと思う。それらしくいればいいと思う。そして、それはあまりにも。

「奏は思つかもね、『それはあまりにも、ずるい』って。でもね、僕はこう思うんだ。『一つを愛しぬけない奴に、ほかのものは愛せない』って。だから人はなにかを愛しぬく。それが僕にとってはピアノだったただだよ」

「奏は？」『彼』は訊ねる。「奏には、そんなものつてある？」

「この際もうバイオリンでもそうじゃなくつてもいい。なにか一つ、愛しぬけるものはある？」

「私、は……」

答えが出そうでのどまで来てもそこで爆ぜる。脳まで届かず口だけで声だけで答えようとしてもできない。その逆なんて以ての外だ。体の中で循環すらしない。ただ瞬間的に生まれ、消えて、点滅を繰り返す。点の集合は線になることなく、零のまま無に帰していく。感情の差異すら生まない、ただ平坦な思考。歩きやすいが、続かない。

救いを求めるように『彼』を見つめた。こちらに向かつて微笑んで、けれど手は差し伸べてくれない。思いのほか長い時間目が合っているが、そんなことも気にならない。

不意に。

『彼』の視線が私からずれた。ゆっくりとその先を同じように追う。私の肩、ひじ、手首、手のひら、指先、そして。

存在すら忘れていた、それがあった。

途端、懐かしい感触が押し寄せてくる。バイオリンを習い始めたばかりのころの、遠い遠い記憶。耳がつぶれてしまいそうなほどの音を何度も聴き続けた、その日々。

もしかして、これが答えなのだろうか。視界の隅に押しやっていた『彼』に目を向ける。あいも変わらずに微笑んでいる。私もそこで初めて、笑顔を、返す。どこか胸を風が吹き抜けるような気がした。けれどそれは不快でも冷たくもなく、爽快で暖かな。

気づくと、ケースを開けていた。なかのそれを手に取る。顎ではさむ。弓を持つ。弦が震える。

「奏にとつて、それがちゃんとした答えだったら僕はとてもうれしいよ」

旋律の中、『彼』の声がすりぬけるように耳から入る。毛細血管の一本一本までを通じて私の中を染め上げてゆく。

「突然こんなことを訊いて、ごめんね」

手が止まる。『彼』の表情も変わる。「どうしたの？」

「まだ終わってないでしょ？ どうしてやめたの？」

「こっちが訊きたいよ」

バイオリンをだらりと下げて、私は問う。「俊哉くん、今日はちよつとおかしいよ」

「いつもと違う」

「そうかな？ 僕にはよくわからないんだけど」

「私にはよくわかるよ」

「一か月も会っていなかったのに？」

「一か月しか会ってないだけでしょ？」

「ふう」息を吐く。「奏は本当にそういうのには鋭いな」

「まいっちゃうよね、本当」

「誰に似たと思ってるの？」

「はあ」息を吐く。「俊哉くんはそういうところに疎いよね」

そうしてしばらく互いの目を見合って、それから二人で笑った。

ここまで楽しかったのは、久方ぶりだったのだろう。短くとも一か月か、それくらいに。涙さえ出てきた。散々に二人で笑って、「ごめん」と『彼』が言葉をはさんだ。

「緊張、してたんだ」

「緊張？」

そうだよと『彼』は私から目を切って、鍵盤へと向け、なにを弾くでもなくただ指の下に來た鍵盤をたたいた。単一の音は長く伸びることもなく、一瞬だけ大きな音を立てて、反響を残して消えてゆく。そのあとの静寂は、それまで以上の静寂になった。

「ちよつと最近、いろんな話を聞いてさ。それで、情緒不安定ではないにしろ、少し弱ってたんだよね」

「俊哉くんでも、そんなこと」

「あるよ。人間なんだから」

少し悪いことを言ったような気がしてうつむくと、「大丈夫、気

にしないから」と言われた。気にしているのはそれだけでもなかつたけれど、顔をあげる。

「だから今日、奏が来てくれていてすごく嬉しかったんだ。話し相手が欲しかった、とかじゃなくて、奏の存在が、今の僕には欲しかったんだろっね」

「ちよつと意地悪しちやつたのは、そのせい」『彼』は照れるように笑う。「嬉しすぎて、自分でも何を言っているのかわからなかった」

「許してほしい」

「怒ってないから」

「大丈夫」と声は少し震えていただろうか。妙な高揚感と不安感が私を包んでいた。こんなことはこれまでで初めてで、だからどう対処すればいいのかわからなくて、困って、困って、バイオリンを握りしめた。弦と指がこすれて、きゅ、と音が響いて、それがまたその感情を加速させた。このまま沈黙が続くのがなぜかすごく怖くもなってきた。「それで」とこちらから口を開いた。

「俊哉くんは、結局私になにが言いたいのか？」

「それはね」

それはと言った口のまま、動きが止まる。その続きが、『彼』自身にもわからないようだった。もちろん私にもわからない。わかるはずもない。だから『彼』のその答えが出るまで待ち続けなければならぬのだ。どうしたってどうしよもないのだから。

バイオリンを握る力が自然と、強くなる。弦が指に食い込む感触ばかりが私を支配した。沈黙。耳鳴り。まるで自分からこの世の総ての音が発せられているような感覚。音源は自分。だったら。

なにかが吹っ切れたような気がして、私は再びバイオリンを構えた。『彼』はまだ考えこんでいるようだ。珍しいその光景が、なぜだか不意に面白くなって、笑みがこぼれそうになるのを留めるように、それをそのまま乗せるように弓を弾いた。自分でも初めて聴くような音だった。それはまさに始めたばかりのころと寸分の狂いも

ない、自分がいなければなににも始まらないといった自己陶醉にも近い感触。

けれど。

頭ではそうわかっていても、いつもなら抑制するはずの体さえ、わかっていながら言うことを聞かなかった。ただ本能のまま、欲望のままに音を紡ぐ。自分の手から新たな旋律が生まれ、自分に一番近い場所にいる。それだけでもう、総てがどうなってもいいような楽しかった。ただただ純粹に。嬉しかった。ただただ。自分以外の何物かがメロディーを定め、私を動かしているようだった。外側から授けられたものを、そのまままた外側に戻す。単純作業のようでもあった。事実私の頭は曲のこともなにも考えていなかったからだ。目の前にいる『彼』のことを、見続けて、思い続けて。

しかしそんな優越感もすぐに崩れる。いつかの私のように、あっけなく。

終わりが、見えないのだ。

確かに自分から生まれた曲を紡ぐのは気持ちいい。しかし、その曲の終わりがまったく見えてこないのだ。光の見えないトンネルの中にいるような感覚。次第に自分がどこにいるのかわからなくて不安になって、ちゃんと歩けているか不安になって、最後には自分が存在しているのかさえ不安になる。道の終着よりも先に、自己が終焉してしまう。そうならあとは惰性が続くだけだ。惰性と墮落の中でなにを目指すわけでもなく、呆然と今をやり過ごす。そんな風な演奏になってくる。涙さえあふれてきそうだが、終わらせられない。終わらせたくない。ちゃんとした終わりを、完成を目指すとする。

けれど。

けれど、そんなことはできないのだ。いつだってそうだ。始まりは順調に見えても、終わりには。先も見ないままに踏み出して、そんなことでたどり着くことはできないのだ。

「もついい」

「もういいよ、奏」気づけば私の両手を、『彼』は握っていた。自然と演奏もやむ。「思い出したから」

「ちゃんと奏に言いたいことがわかったよ。思い出せたし、気づくことができた。なにより決心がついた。ありがとう」

ありがとう。

いつも通りの『彼』に戻ったと思った。それ以前の言葉なんて耳に入らないくらい、その言葉だけに歓喜した。いや、歓喜とも違うなにか。そのなにかを、私は。

「奏」

その声に我に返って、「なに？」と訊く。「お願いがあるんだ」

「奏に、プレゼント、とも違うけど、なんていうのかな。なんていえばよくわからないんだけど、とにかく奏にあげたいものがあるんだ。だから」

「だから」言い洩るように、少し顔をうつむかせる。「ちよつとだけでいい。目をつぶってくれないかな」

「そこに座ってさ」

「目、を？」

目を瞑るとはなにごとかと不安になる。しかし『彼』の顔を見ればそんな気持ちは少しずつなくなっていく、しまいには「わかった」と言った。

「俊哉さんの言うとおりにするよ」

「ありがとう」

そう言って笑ってきたので、こちらも笑った。それから『彼』は私を、先ほどまで座っていたピアノの椅子へといざなった。エスコートされるままにそこに腰を下ろす。しばらくたっているためか、ぬるいほどにもならない温度が伝わってくる。それでもはつきりと間違いようもなく伝わってくるのだ。

「バイオリンは、じゃあ僕が預かっておくから」

「うん」

握りしめていたそれを差し出す。少しばかり抵抗のようなものが

あつたけど、そんなものはこの際毛ほども気にはならなかった。指に弦の跡がついている。それを反対の手の指でなぞってから、「目を瞑ればいいの？」と訊ねた。

「うん、それでいいよ」

できれば顔をあげておいた方がいいかな、と『彼』は言っただので、引き気味だった顎を前に出す。「それくらいがいいと思うよ」という『彼』と、ちょうど目の合うところだった。

『彼』は笑う。なにか緊張感のようなものを漂わせながら。珍しいな、とやはり思う。いつもならば自信满满で何にも臆することもないのに、今日はそんなところが少ない。なにか初めてすることなのだろうか。

「じゃ、目を瞑ってくれるかな」

もう一度『彼』は微笑んだ。いつも通りの表情に雰囲気に戻っている。しかし私はいつも通りとはいかず、その前よりも違和感を覚えながら笑顔を作る。なぜか鼓動が速い。ゆっくり、ゆっくりと目を閉じる。『彼』の顔が見えなくなっていく。上げて、と頼まれた顔も自然と下がっているようだった。最後に視界がとらえたのは、『彼』が持っている私のバイオリンで。

視界が、黒に染まった。

世界は、赤に染まる。

009

目を、ゆっくりと開けた。けれど私の目の前に『彼』はいない。いなくなったのだ。三年も経った。あの日から三年。長くて、短くて。とても忘れることも消え去ることもできない思い出は、思い返せば昨日のようなことだし、放っておけば三年よりも長く感じる。

沈黙のように。

沈黙の状態で沈黙と言えば、その状態はすでに沈黙ではなくなる。同じようなことだ。なにも思わなければ長かったと思っし、長かったと思えばそれは長くはなかったと感じる。収斂可能な体感時間の中と外を飛び交うように私は存在し、総じて俯瞰しているような感

覚。あの日や『彼』について思いをはせるとき、決まってそのように思った。さまざまな情報を再び取り込んだ今でも変わることはない。色あせることもない。帰ってきてしまった『彼』の存在を、強く感じる。

ひしひしと、まるで自分が『彼』になってしまったかのようにさえ思えるほどに。

回想なんて、まして『彼』と最後に会ったあの日のことを回想することになって思わなかった。これまでどれだけ『彼』のことを思い返したところで、ほとんどが幼少のころのものだとか、一緒に練習をしていた時のことだとか、言ってしまうえば、いくらか美化されているように見えるだけで、そう思い込んでいるだけで、私自身いかに自分が好きでいかに自分のことこそを知りたがっているのか、今を以て漸く理解することができた。

それも彼のおかげである、と言ってしまふことはたやすい。私の中で彼はそろそろ神格化でもしそうなほどの地位になりつつあった。彼と出会えたから今の私になって、嫌いな私も好きな私も捨てて、ちゃんと私以外も見ることの出来る私になることができた。ありがとう。感謝している。そう言ってしまうえば私はもう彼を神としてあがめてしまふだろう。絶対的な存在として、私の中に未来永劫刻まれる。

けれど、と実際に口に出してつぶやいてみる。そうでもしないと理解できないくらいに私はなにも変わっていないし、なにもわかっていないのだ。彼はなにもしていない。ただ単に私は自分で変わった。それこそ真実であると同時に彼の意図していたことでもあるように思える。当初の彼のやり方こそが顕著だろう。自分で気づかせ、自分で変わろうとさせる。自然に。おのずから。彼は私の、私たちの意志を汲み取るだけで、刈り取ってはくれないのだ。汲んで、また私たちに汲みなおして、それを元に私たちを組み換える。器を変えるだけで中身は同じ。繰り返すうちに熱湯はぬるま湯へと変わり、

冷水へと変わる。滾った思考は冷静になる。自分を俯瞰できるようになる。あたりまえのことと、そしてそれこそが彼の行く相談と言えるものの正体。

そんなことを、昨夜はずっと考えていた。

あるいはそれは的を大きく外した見当違いな解釈であるのかもしれない。彼自身なにも思うことなくただ気の赴くままに好きなことをしているだけで、結果としてそういうものがついてきているだけなのかもしれない。ただの偶然の結果を帰納的に解釈して、私は自分に酔っているだけなのかもしれない。酔いしれたいだけなのかもしれない。かつての私のように。

一陣の風が切り裂くように吹き、長い髪も、スカートさえはためかせた。完全なる冬。凍える指先。つま先の感覚も薄い。空はどんよりと黒く沈んで、ポスターカラーのグレー色に近く、いまにも泣き出しそうだった。このようなレトリックを用いたところで、私の感情は言い表せない。泣き出しそう、なんて、とてもではないがそのような気持ちにはなれない。なりたくない。風の音が遠く耳を打つ。吹き荒れて木々を揺らす。木の葉が舞い散る。触れればその瞬間に粉々に砕けて、跡形も残らず飛散してしまいそんな葉が一枚、目の前を舞った。思わず目を奪われて、再び視界を正面に戻す。

「よお」

彼がいた。

心臓が、体が、喉が。朽ちた木の葉とともに吹き飛んで、砕けて、飛散して。目と耳だけがこの場に残されて。

「ん？ おい、なんとか言えよ」

「少し黙って頂ければ嬉しいです」

よかった、口も残されたようだ。彼は、以前のようににやりと笑んで、ポケットから煙草を取り出して啜えた。ライターではなくマッチを擦って、火をつける。彼の方が、風上だった。吐き出した紫煙のにおいが鼻腔をくすぐる。懐かしいにおい。つい数日前にも嗅いだのに、そう思えた。以前ほど不快ではなくなったのは、彼のせ

いだろうか。

「……どうしたんですか？」

「まあさ、こないだはお前が俺のところに来たから、今日は俺の方から出向いてやろうと思ってな」

確かに、今は河原沿いを歩いているようだったが、まだ彼の『家』付近ではないようだった。あのやたら目につく青色は見つかからない。どちらにせよ、自分がどこを歩いているのか、よくわからない。感覚的にはちょうど彼の『家』のそばに来ていてもおかしくはなかったが、なにせ先ほどまで考え事をしながら、ふらふらと歩いていたのだ。いつもより長く感じて、実際に長く歩いていたとしてもおかしくはない。

「……要件は、じゃあ、なにかあるんですか？」

「んー、いや、まあ、とくになにもねえんだけど、な」

「こないだ言ってみたけど、なんとなくお前に会いたくなっただけだよ」とごまかすようにつぶやいて、煙草の灰を落とす。視線はその先にあった。彼の髪も、コートも、風に強くはためいている。気にする様子もなく、再び啜えた。

「なんです。自分で私のことをツンなんとかとか、なんとかデレとか奇妙な呼び方をしておいて、あなたのほうがそうじゃないですか」

「いやそんなつもりはねえよ」

間を置くことなく彼は言つて、「まあ」となんどもなんども使うその言葉を、また使う。

「まあな。なんとなく、なんだ。お前を初めて見たときから、なんとなく、放っておけなかった」

「なんです、それ」

「本当にデレるんですか？」と言いつ返すと。「かもな」と首を縦に振られた。肯定されてはなにも言うことはない。妙に心臓の奥の方がぞわぞわとしたが、それは不快感からだろうか。

「最近それについてよく考えるようになったよ。どうしてわざわざお前のことをああまでも構ったのか」

「ああまでもって……誰に対してもそうだったんじゃないんですか？」

「違うよ」

全然違う、と煙草を口から離して、両手を振りながら言う。「あんなことはしねえよ」

「いくら時間はないからって、お前の悩みの解決のためにあんな荒療治みたいなことやるかっての。一応は教師を目指した身なんだぜ？　できるわけないだろ」

「そんなことを私に言われましても……それに、事実あれで成功したんですから、あなたはそれを誇っていいじゃないですよ」

「成功？」

「ちよつと待てよ」彼は指先から煙草がこぼれるのにも、さらには踏み出した足がそれを踏み消したことさえ気づくことはないように、食って掛かるように言う。「成功だって？」

「俺が判断したわけじゃねえし、判断のしようもねえんだが……成功、したのか？」

「え、ええ、少なくとも私はそう思って、いますよ」

「あ、ありがとうございます」自然に頭が下がり、そう言っていた。気づかないうちに。気づいたころには、彼はもう一步、強く踏み出していた。もう一步、もう一步。本当に食って掛かるように、私の両肩をつかむ大きな手。揺さぶるようにして顔を上げさせる。流れに従って、彼の顔が私の視界に入る。

彼は。

「……そうか……！」

彼はぶるぶると震えながら、顔を伏せていた。その表情を窺い知れることはどうにもできない。

「……え、と……」

そのようなアクションをされるとはとても、まったく、毛ほど

も思っていなかったので、私の方はどんなリアクションもとることはできずに硬直して、ただ彼のことを見ていた。彼のつむじは左向きか、そういえば『彼』は右回りで、などと、どうでもいいことにしか頭はまわらなかった。三分ほどだろうか、経ったあたりで彼は私の肩から手を離れた。そのまま数歩下がって、笑う。「いやいや」「すまん。ちよつとびつくりしたただけだ。……うん、お前しかそれを成功か失敗か取れる奴はいないもんな。お前がそう思うんなら、成功だ」

「え、ちょ、それは、待ってくださいよ」それにはさすがに口を挟まずにはいられない。「もしかして」

「……もしかしてあなたは、失敗したと思っていたんですか？」

「あー、えつと」

わざとらしく私から目をそらす動きを見れば、それは一目瞭然だった。今度は私が顔を伏せる番だった。彼の心配するような声も聞こえるが、気にしない。「どうしてですか」と訊ねると、声にならない答えが返ってくる。

「まあ、あれだ。俺があのと見たお前はいつもあんまり元気がなかったからな。もしかしたら、とずつと思つてて」

「……すまん」と彼はもう一度言った。「いいですよ」と私が言つても、また「すまん」と言った。

「確かに私に元気がなかったというのは本当かもしれませんが。あなたがそう思っていたことなんてどうでもいいですよ。私はちゃんと、解決したんですから」

だから、と言って顔をあげる。なぜか彼は泣き出しそんな顔をしていた。大の大人がみつともない、と悪態をつこうと開いた口も動かず、従わずに、ありがとうございますと紡いだ。

「私はあなたに感謝しているんですよ？ 全部あなたのおかげなんです」

先ほど自分で絶対に言わないと、思わないと誓ったはずの言葉がつらつらと連なるように流れ出す。止めようと思つたが、止める気

にはなれなかった。思考の矛盾も、行動の矛盾も、総ては言葉とにも流れ出て、そして返ってくることはない。脈絡のないままの言葉でもなんでもいい。とにかく彼に感謝の言葉を伝えたい。そのことばかりが頭をよぎる。なぜなのか。どこから投げかけられたようなその疑問も、気づかないうちに排斥している。もう無理だ。彼の位置は私の中でシフトした。クラスアップしてしまった。とても手の届かないほどに。直接彼に言葉を伝えることによって。すがりたい。

何かにすがりたい。その感情が今の私を占めているのだろう。きっとそれは間違いなく『彼』のせいだ。『彼』のことを思い出して、身に染みて感じて、何もかもを当時に戻して。三年間を巻き戻して、やっとのことで真実に、真相に、ありのままに戻れたのだから。ありのままに気付けたのだから。三年もかかって、十年以上もかかって。やっと、やっと。

「ありがとう」

その言葉は私の口からではなく、彼の口から放たれた。一気に正気へと戻っていく。思考が澄んでいく。彼のことを直視する。どこか『彼』のような笑みを浮かべて、彼は。彼は。

「こんな俺にでも感謝してくれる奴がいるって、嬉しいもんだよな。それを求めて教師になりたがっていたころのことが懐かしいよな。なれなかったけど、ならなかったけど、諦めてしまったけど、お前のおかげで、夢が叶った」

「本当にありがとう」

そう言っただけで彼は再び頭を下げた。私は少し焦って、顔をあげてください、と言うと「そうか」と彼がつぶやく声がした。私の言葉を了承して顔をあげるとのことかと思っただけで違うようで、行いこそその通りであったが、その言葉は何かに気付いたものようだった。「俺がお前にやたらと構ったのは、そのせいかな？」

いつものような自信に満ちたりた風ではなくつぶやいて、考えながらというように、独り言のようにつぶやき続ける。「思えば」

「思えば、そうかもしれないな。俺の、勘としかいようがないにかでお前を引き当てて……」

「オカルト趣味ですか」

「いんや、でもそうじゃないと、説明できねえじゃねえか」

彼はどうやらボケでもふざけているわけでもなく、本当にそんなことを考え始めているようだった。ふう、と一つため息を吐く。

「……だから、なのか？ 俺がお前にやたらと構ったのは、そうなることをどこかで気づいていたからなのか？ わかっていたから」

「

「あのですね」

「それは」と言ったところで止まる。彼がいかにもどうしたといった風に顔を覗き込んでくる。

そうか。

私も今になつて気づいた。どうして彼とこれほど打ち解けたのか。出会ってすぐにも逃げ出さず、彼に相談を持ちかけたのか。そこまですぐ気づけば、あと考えるまでもなく、ここ数日で気づいたことにながった。「違います」と確信をもって言える。少し前までの私なら、あのときは彼が助けてくれると言ったことを信じたから、なんて言うかもしれないけれど、今は違う。「あなたは」

「あなたは、だって、俊哉くんを知っていたじゃないですか」

彼の動きが、止まる。

「あなたは俊哉くんを知っていて、友達だと言って。それくらいに、あなたの中で『彼』は大きな存在だったんでしょ？ あの『彼』を友達だなんて堂々と、自慢げに、嬉しそうに言える人のことを、私は」

私は、見たことがない。

「私だけじゃなくて、善正くんだって。『彼』のことをそんな風に思いませんよ。ちゃんと『彼』と対等の関係を築いていたのは、世界中であなただけです」

世界中、は言い過ぎかもしれないかと思ったが、世界中で『彼』

のことを知っている人なんてごくわずかだ。気にすることもないだろう。確かに有名かもしれないが、一握りにも満たない。「ですから」

「あなたが」

「ちよつと待てよ」

「な」

彼は私に続きを言わせるのを止めるように、手を開いてこちらに見せた。なんですか、いきなりと悪態をつくが、またも考え込むようにつぶやく。「どういうことだ？」

「あいつと、俊哉と対等な関係が俺だけ？ そんなわけないだろう？ そんなことはありえない」

「そ、それは」

どうしてですか、と言う間もなく、彼は口を開く。正解に気付いた子どものように、楽しげな笑みを浮かべて、

「俺と、お前だ」

と言った。

「『俺と、お前だ』……？」彼の言葉を反芻する。『俺』とはすなわち彼のことであり、と言うことはこの場合における『お前』というのは、疑う余地もなく。「わ」

「私のこと……ですか？」

「それ以外に、誰がいる？」

私が。

私が、『彼』と対等だと、本当に彼はそう言っているのだろうか。なにを勘違いしているのだろうかこの人は、本当に。そんなことあるわけがないのに。天才の『彼』と非才の私の、どこに対をなすところがあつて、どこを等しくしているというのだろうか。本当に、本当に、本当に。

「どこが……ですかっ」

一体。私が。

「『彼』と、俊哉くんと、私がっ」

どうして。

「対等だなんて、あなたは、言えるんですかつ」

「俊哉が、そう言ったからだよ」

「とつ」

『彼』が。

「このあいだ、あいつの前で言ったよな？ あいつは俺に『中学三年に、バイオリンをやってる可愛い幼なじみがいる』と言っていたこと」

「続きが、あんだよ」彼の顔がよく見えない。きつと笑っているのだろっけれど。「あいつが」

「あいつが唯一心を許せる奴だつてさ。なんでも言えるし、なんでも訊ける、唯一の」

「ああ、もちろん俺もだつたみたいなんだけどさ」自慢するように彼は付け足した。「あいつのなかでさ」

「お前の存在つてのは、そのくらいに」

「違います」

思わず口をはさんだはいいもの、なにも続きの言葉が思いつかない。とりあえずなにか言おうにも口が動かない。彼はそんな私を見かねてか、続けた。「そのくらいに」

「大きかったんだよ。奏」

奏。

かつて『彼』が呼んだ私の名。どうしてかその名を聞くのがひどく久しぶりのような気がした。それは実際に呼ばれていなかったから、ではない。事実今朝だって母親に呼ばれたばかりだ。ということ、つまり。

「そういう、ことなんですか？」

そうなってしまうのだろう。彼は笑顔を浮かべて、首を縦に振る。

ああ、本当にこの人は。この人は。

まるで、まるで、まるで。

「……名前」

「呼びましたね、私の」言うことがほかに見つからなかった。「京都さん」

「会って一か月でフランクすぎませんか」

「一か月も、とか一か月でやっとな、とか俺は思っけどな。実際呼びやすいし。それにお前だつて俺の名前」

「一度だつて呼んだことなかったくせに」とにやりと笑う。そうだ。この人はこうでなくちゃいけない。私の名前の呼び方が誰かに似ているなんて、彼の名前を呼ぶ感覚が誰かを呼ぶ感覚に似ているなんてことは本当にどうでもよくて、この人は、こうでないと。

「別にあなたの名前なら言いなれてますしね。あなたに言わないだけで、いろんなところで言ってますから」

「ちよつと待て、どこで誰に」

「さあ？ 秘密に決まってるじゃないですか」

「個人情報流出……！」

「あんな『家』なら流出というより、露出だと思いますけど」

「流出のほうかひどいだろ？」

「露出狂」

「狂ってはいない！」

そんな、久しぶりのようなやり取りをいくつか繰り返す。この会話がこんなにも楽しいわけが今ならわかる。そうだ。私は。

私は『彼』と、こんな風に。

「つと、お前、学校遅れるぞ」

ふいに発した彼のその言葉に腕時計を見ると、すぐに行かなくては遅刻してしまいそうな時間だった。いつかもこんなことがあったような気もするなあとと思うと、なぜか「さぼっちゃいましようかね」とこぼれた。

「出席日数はもう大丈夫でしょうし。一日くらい、学校つてさぼってみたかったんですよね」

「ばーか」

それを俺に言うなよ、と言わんばかり表情を作つて私を見る。「

わかってますよ、冗談です」と言いつくろって、歩み始める。ちょうど彼とすれ違いそうなところでまた口を開く。「あとで」

「あとでまた、お話できませんか？　ちょっとお話したいことが、しないといけないことがあるんです」

「放課後にまた来ます」と言って、彼の返事を聞くこともせずになれ違って、速足で歩く。どのくらい行ったところだろうか、彼が「おい」と後ろから私を呼んだ。振り返る。笑顔で手を大きく振っていた。

「じゃあな」

「はい、また」

会釈をしようとして、今回はやめることにした。胸の位置くらいで彼に向けて手を振る。すこし驚いた顔を見せて、また彼は笑った。そして振り返って歩く。私も同じようにした。始業までもう時間がない。足を速める。

不意に、違和感を覚えた。見慣れた何かが、どこか少しだけずれているような感覚。胸の奥がぞわぞわと、不快感が体中を駆け巡る。なんだ。いったいなにが。

どうにも落ち着かないので、もう、少しくらいの遅刻ならいいかと、彼の『家』の場所でもないが河原に降りる。相変わらずどこも似たような土手だ。降りきって、いつかのように水面を覗き込む。けれどそこに映った私はあの時とはいくらか違っていて、少しおかしかった。どこが、と詳しく訊かれても答えられないほどのものだが。

彼を救う。救うことができる。先ほどの会話の中でそう思えた。放課後に延びてしまったのが待ち遠しい。あんなに苦しんでいた彼を、悲しんでいた、縛られていた彼をやつと解放してあげることができる。その代わりに私かなれる。そしたら次は良美さんだ。そしたら、そしたら。

おかしい。

何かがおかしい。彼は苦しんでいた。それは間違っていない。今

まで苦しみ続けていたのだ。今まで、だけど、先ほどはそうは見えなかった。出会ったばかりのような調子で、それほど苦しんでいるようにも見えなくて。

溜息を吐き、上体を起こす。どうにもわからない。立ちくらみのような頭痛を感じながら振り返って、数歩歩いたところで、靴に触れるものがあつた。

石。

どういうわけか円状に組まれているそれは、その辺りに散らばっている砂利とは一目で、異なると判断できた。それどころではない。その中央には何かを燃やしたような跡があつた。青色の何かが黒く焦げて、どろどろと、ぐずぐずと、溶けて、もう固まっているようだ。おそらくビニール類だろう。燃やしていいわけがない。さらに段ボールの切れ端の燃え残りのようなものもあつた。いくら河原だからといってものを燃やしていいわけがない。

「本当に……」

本当に何を考えているのだろう、あの人は。そう思いながら、足は強く地面をけつて、来た道を引き返していた。彼の姿は見えない。そう遠くにはいないはずなのに。いない。呼吸が荒くなる。久しぶりに走ったせいか、それ以外の何かか。

「いけないで、くださいっ！」

誰もいない道で大きな声を出す。初めての経験。気にもならない。嫌な方にしか思考は回らない。やめてほしい。お願いだから、そんなことはなくて欲しい。

「あなたじゃないんですから！」

どれだけ走っても、彼はいない。走り始めてからまだ数分も経っていないのに、足が言うことを聞かなくなる。棒のようになって、呆然と道の真ん中で、突っ立って。

彼はいつものように「またな」とは言わなかった。だからなのか、一層不安になって。

「京都さんじゃ、ないんです。『彼』を殺したのは、本当に悪いの

は」

涙じゃない何かがこみあげてくる。ねっとりとした唾をのみこんで、せき込んで、アスファルトの地面が見える。視線をあげろ、と言い聞かせる。彼をまだ私は救えていない。恩を返せていない。遠くに行つてほしくない。もう二度とあんなことは味わいたくない。

「私……なんですから……っ！」

前を見て、今度こそ走り出す。

第四章

001

世界とはすなわち、視界だと思う。

私は目が見える。少しばかり視力が弱いので勉強などの時は眼鏡を掛けなければならないが、それがなかったとしてもなにも見えな
いということはない。ぼんやりとはしているが、確かになにかがある
ということとはわかるし、おおよそ予想もつく。目を閉じてみたところでも暗闇が見える。あるいはさまざまな模様が
見える。それは常に私の前に存在し、私を包んでいるように思える。私は私を常に包むそれが世界だ
と思うし、そう感じている。

もし目が見えない人がいたとしても、何のことはない。単に世界をはかるものが違
うというだけのことだ。見方（この言い方は怪しいが）が違ったところで世界に変わりは
ない。世界を定規で測るか、重量計で量るか、そんな話に似ている。異なる値が出て
も比べることはできない。大元は同じものののだが。

ただ、時折問題が生じることがある。

たとえば、目が見えて、それによつて世界をはかる私が目をつむつた時の話。見えるのは確かに暗闇で、だから暗闇が見えるということなのだが、頭では分かつていてもなかなかそうは思えない。尺度を失つたと本能的に困惑する。調べるものは同じでも、捕らえ方が変わ
り、それによつて世界が変わつて思えるのだ。

だから、目をつむつた私は耳を澄ます。

それが何の音なのかはよくわかった。十数年間嫌と言うほど、好きなだけ聴いた音だ。それはわかる。けれど、なぜその音が聞こえるの
はわからない。自分の手は手持無沙汰に開かれていて、なにも握つてはいないのだ。私が握らないと、弾かないと聞こえないはずの音なの
だ。私だけの旋律。私だけが奏でる旋律。けれど、それは私からじゃなくて、私の前方から聞こえてくる。録音した音声の

ようなノイズ交じりのものではなくて、今まさにその場で奏でられている音。にわかには信じがたい事象。受け入れがたい現実。閉じた視界を開く気にもならないほどの、絶望感。

なによりも、そんなことよりも決定的な現実。暗黒のただなかで紡がれているメロデー。聴きこんだ覚えはないけれど、はつきりと感じたことのある、弾いたことのある曲。けれど、私以外の誰も弾いたことのない曲。

これは、私だけの、私の曲だ。

先ほど『彼』の前で無我夢中になって奏でたそれは、もう一度、再び命を吹き込まれたように脈打って、その存在感をあらん限りに発揮している。始まりしか存在しなかったそれにも終わりが生まれ、そして今、その生を終えた。私が目指してつかめなかった終わりは、私ではなく。

「目を開けてよ、奏」

『彼』の手によって。

「どうかな？」

「……どう、って」

どう答えると言うのだろうか。さっぱりわからない。わかりたくもない。いや、わからうとも思わない。確かに一か月間まったく弾かなかった私も悪い。それはそうだ。反省している。だが。

こんな仕打ちは。

夢としか思いたくない。

「……バイオリン」

けれど、かろうじて開く口で尋ねる。「なに？」と訊きかえず『彼』に、気持ちを落ち着かせるために息を吸って、吐いて、それから言う。「俊哉くんは」

「バイオリンは、バイオリンだけは、弾けないんじゃないの？」

「そうだよ」と一度は肯定して見せてから、「でもね」と続ける。聴きなれたパターン。黒一色の世界の中で繰り返られる普段のイメージ。

「人間、変わらない人なんていないだろう？ 進化であれ退化であれ、なにがしかの変化はするわけだよ。それが僕にとって進化だった、ってだけさ」

「できれば、ふざけないでほしいんだけど」

「うん、そうだね」

「僕はとても気分がいいんだよ」と楽しそうに言う。けれどその表情は見えないので、本当に楽しそうなのかどうかはわからない。「なんていうのかな」

「今まで十年以上、たくさんの演奏会とかを経験してきたわけだけどさ。その中の上位と同じくらいの緊張が一気に解放されたからねだからと言って、まだ緊張感も恐怖感も、このまま床にへたれこんでしまいそうなくらいにあるわけだけど、それをまるきり払拭するくらいにこの解放感は」

「ちよつと」

「なに？」

「少し静かにしてて」

「わかった」そう言って『彼』はため息ではない、深呼吸のような息を漏らす。人が極度の緊張状態のときにするものによく似ていた。もしかしたら『彼』は本当に緊張しているのかもしれない。今日はそんなことをもう何度も聞いた。そう思ってから私も息を吐く。どうやら私も緊張しているようだ。理由はわかるし理解もできる。どうして緊張しているのか。そしてこうも思うのだ。この感覚は緊張だけではない。この感覚は緊張というよりは、憤りや怒りに近い。憤怒の感情を私は確かに抱いている。いつのまにか握りしめていた拳が、その事実を如実に表していた。

その原因たるものは当然目の前にいる。間違いのないことだ。どうあっても間違いはしない。全ての始まりで、私の全て。

「ねえ、俊哉くん」

ゆづに十分は経っただろう。私は『彼』に注意を向けてはいなかったが、『彼』の目はずっと私のことを見ていたらしい。目を合わ

せようと思う頃にはもう合っていたのだから。

「なに？」

さっきのように言う。どこか気取ったような話し方が鼻につくが、以前にも経験がある。あれはなんの大会の後だっただろうか。その時もかなり緊張しているようで、確かそれも最優秀賞を獲得したはずだ。つまり今はそのような緊張感の中で成功を収めた後の言動に近いのだろう。どこが緊張なのかは分かったけれど、どこに成功を収めたのかがわからない。

「バイオリンは、いつから弾けるようになったの？」

真っ先に気になったことを尋ねてみる。この質問の答えによって私は崩壊してしまうだろう。『彼』がこれだけはどうやってもできないと言ったから。これならば『彼』を超えられると思ったからこれでしか。自分に言い聞かせてきた言葉を反芻する。この言葉は、いつから無意味になったのか。

「難しい質問だね。じゃあ訊くけど、奏はいつからバイオリンを弾けるようになったの？」

「質問に質問で返さないでよ」

「いいから」

「よくない」私は『彼』の目を見据えた。「答えてよ」

「俊哉くんは私に会ったばかりの頃、唯一バイオリンはどうやっても弾けないって言ってたけど、あの言葉はいつ嘘になったの？」

「嘘になんかなっていない」と『彼』は言う。「ただ『過去』になっただけさ。僕が成長したっただけの話だよ。奏だって初めはバイオリンが弾けなかったわけでしょ？ でも今は弾ける。その頃の奏は『嘘』だったのかい？」

「そんなことが言いたいんじゃない」語気が荒くなるのを隠す気もなかった。「私は、未来を前提としていた。けど俊哉くんは違う。唯一これだけが弾けないって、言って」

「どうして未来を前提としていないことになるの？」

「それは」

言葉に詰まる。『彼』の瞳がこの時ほど嫌になったことは、しかし以前にもなかっただろう。自分が空回りしているようにしか思えない。勝手に個人的なところで憤っているようにしか思えない。事実それは正しいのだろうが、私は認めたくない。どれだけの人に咎められようと、そして『彼』に咎められようと。もつと極端に言ってしまうのであれば。

腹が立つ。

無性に、腹が立つ。

それだけだった。

「ねえ、俊哉くんは知ってる？ 私がバイオリンを始めた理由」

だというのに、これまでの話など無視して吐き出した言葉がこれだ。嫌だ。叫ぶ。これだけは、言っては駄目だ。言いたくない。言ってしまうえば、私が終わってしまう。もう、駄目になってしまう。

『彼』はゆっくりと首を振った。私は深く息を吸う。吸い込んだ空気で体が張り裂けてしまいそうなくらいに。いつそ張り裂けてしまえと思いつながら。

「それはね。俊哉くんがバイオリンだけが弾けないって言ったからなんだよ？ 俊哉くんの弾くピアノを聴いて、自分もって思ってた。いつかは俊哉くんを超えたいって思ってた。でも、無理って知ってた。知らされて。すごく悔しくて、悲しくて」

自分が、何を言っているのかわからない。

「でも俊哉くんはバイオリンを弾けないから。本当は一緒にピアノをしたかった。それでいつかは同じくらいになって、超えられたらって。でも無理だから。すぐることできる希望は、唯一これだけだったから」

やめてほしい。

「だから、始めたんだよ？ そうじゃないと褒めてくれないと思ったから。俊哉くんに褒めてほしかったから。『こんなこと僕にはできない』でもいい。『奏は凄いいね』でもいい。何でもよかったんだ。ただ、俊哉くん」

お願いだから。

「……ごめん」

どちらの口から洩れた言葉なのか。私にはわからない。自分で喋っているという感覚はとうの昔に消えてしまったし、耳もよく聞こえないし、前もよく見えない。ただ直立しているだけだった。なんなら立っているという感覚すらなくなっている。私はこの部屋を漂っている。ふわふわと着地点を探しながら。『彼』が捕まえてくれないかなどと、これも漂うように考えながら。

「ごめん」

今度は間違いなく、『彼』の声だった。なぜだかその表情はよく見えないが、少し視線が低くなったような気もする。「僕はただ、奏に」とだけ言つて、『彼』は口を結んだようだ。固く結ばれた口はびくりとも動きそうにない。何かが深いところから押し寄せる。私はどうするればいいのかわからない。どう言えばいいのかわからない。

「ごめん」

私が言った。そして耐えきれず部屋から出た。

いつの間にか帰路についていた。時間はかなり進んでいるが、バイオリンもちやんとある。自転車のペダルを無意識にこぐ。鼻のあたりが妙に熱い。寒い日の目覚めのようにだ。全てが夢のように目の裏で流れる。忘れたい。強くペダルをこぐ。

私が『彼』と話したのは、それが最後だった。

002

噴き出す汗は鋭い風に飛ばされる。体の芯は燃えるように熱いが、表面はまるで氷の膜が張りついているようだ。しかしながら、そんなものを見て確かめている暇もないし、この辺りは最低気温が氷点下に至ることなど滅多にないので、ただの感覚だということがわかる。息はとうに切れているが、一定のリズムで足を出しているため、惰性のようにまだまだ走れるだろう。息を吸うと喉がじりじりと痛むが、仕方のないことだ。

すでに川沿いの道ではない。一直線に伸びたその道には、彼の姿は全くなかった。加えるなら、どここの河原にもいなかった。念のため橋の下までも調べてみたが、いつだかに彼と会った橋の下にもいなかった。これでもう私が彼と会った場所は『彼』の墓しかない。さすがに町中を駆けまわることもできないので、とりあえず真つ先にそこを調べてみることにした。もしそこにもいなかったらと考えるとぞっとする。彼のことだ。罪悪感も、責任感も強い彼のことだ。なにをするかわからない。彼がどこにでもいる、私が一度見ただけでは覚えられないような普通の人間ならば、良美さんから逃げただけだと考えることだろう。しかし、彼は違う。そんな人間ではない。これは短い間だが彼と過ごした中で私が感じたことであるし、そうであってほしいという私の願いでもある。いや、しかしこの場合はそうであってほしくないのだ。ここだけは、彼に普通であってほしい。あるいは、いつか見たときのような普通な人間になってほしい。そんな願いを抱きながら私は走っている。

腕時計を見る暇もないので時間がわからないが、きつと一時限目はゆづに始まっていることだろう。彼に冗談めかして言った通り出席日数は足りているだろうし、そもそもこの時期になれば授業の参加にもあまり意味がない。だから私にとっての問題は、学校側から自宅に確認など取られていないだろうかということだった。いつも通りに学校に出たため、親は無論今私が置かれている状況を知らない。したがって、下手な心配をさせてしまっただろうし、そうでないにしてもあとが面倒になる。とまで考えて、どちらに転ぶにしろ、それは終わった後の話だということに気が付いた。それならば今は考えないこととしよう。考える余裕さえないのだから。

細い道に入る。肩で息をしていたつもりだったが、全身で息をしているようだ。むしろ息をしているという実感さえない。流れのままに空気を吸い、吐いているような気分。例えるなら鰓呼吸のような。当然鰓呼吸などしたことないので、実際はもっと違う感じ方をするのだろうか。

この間通ったばかりの道だ。覚えている。記憶を頼りに速度を落とさずに走る。もしも一時停止をしない自転車や車に出くわしたら、きっと事故にあってしまうだろう。構わない。彼を一秒でも早く見つけなければならぬこの状況で速度を落とすことは手を抜いたことになる。少なくとも私を救った彼と比較して、返す量が不足することになる。それだけは避けたかった。自分の命よりも、だ。彼にはちゃんと返したい。できれば利子も込めて。

ついに、その曲がり角が目前に迫る。ここだったはずだ。ここを左に曲がれば『彼』の墓はすぐに見えたはず。つまり、彼がいれば一目でわかる。さすがに曲がりきれそうにないので、最低限だけ速度を落とす。視線は左に持っていく。曲がらずともすぐに見えるように。

……いない。

どこにもいない。まったく見えない。速度はみるみるうちに落ちて、ついには立ち止まってしまった。

どうすればいい。どうすればいいのだろう。もうわからない。私には彼がどこに行くのか、どこに行きたいのか。わからないというより、知らないのだ。それはもつと現実的な問題で、少し考えれば当然のことだ。私は彼とよく話をしていたが、内容は殆ど私のことについてで、彼自身について訊く事など一切なかったのだから。畢竟、私は彼のことを何も知らなかったのだ。そのくせに理解者ぶって。

一歩踏み出そうとした。右足を上げるだけでも精いっぱいだった。脚が思い通りに動かない。日頃から運動をしていないせいだろう。距離にして家から学校の往復にも満たないというのに。それでもゆっくりと歩を進める。そして正面には『彼』の墓。

憎らしかった。『彼』が。傷つけるのは私だけにしておいてほしかった。私の大切な人にまで及んでほしくなかった。彼と初めから会ってほしくなかった。そうしたら彼と私の出会いもなくて、今の私はいなくて、墮落したまま日常に溺れて行くだけだったかもしれない。

ないけれど。それでも今よりはましだ。彼が傷つくことはないし、封じ込めて忘れてしまった私も傷つかない。

でも、そしたら。

不意に鞆が震えた。何事かと思えば、マナーモードに設定した携帯電話に着信があっただけのことのようだ。鞆から取り出して二つ折りを開いてみると、書かれていた名前は良美さんのものだった。自分の心が覗かれていたのかと思いつつ、どうしようかと逡巡してから意を決し通話ボタンを押そうとしたところで切れた。

掛け直すべきか、とそんなことを考える。時間はないが、この人ならば何か知っているかもしれない。気づけば通話終了を示していた画面が既に待ち受けに切り替わっていた。着信履歴が十件。その名前も全て良美さんだ。五分おきに一件。しかも呼び出し時間は全て一分以上。

気づいたときには通話ボタンを強く押していた。間違いない。この人は何かを知っている。彼がこれからどうするのかを知っている。コール音が続きながら、私の心臓は体内から逃げ出したいとばかりに鼓動を繰り返す。知ることを拒むように、この場から無意識に逃げ出そうとしている。嫌な考えばかりに支配されている。気のせいだから、と何度言い聞かせても効果はない。むしろ一層怖がっている。自分の言葉が嘘だということをわかっているせいだ。私は心からそうは思っていない。立っているのすらつらくなる。

「もしもし」

良美さんが電話に出た。いつも通りに落ち着いた声。違和感しか抱かないが、無駄な思考をする時間も無駄な挨拶もする時間もない。早々に話を切り出す。

「彼はいまどこにいますか？」

「あらカナちゃん、おはようも言わないの？　もしもしくは言ってもいいんじゃない？　挨拶は大事でしょう？」

「そんなことを言っている暇なんてないんです。教えてください」

「落ち着いてよ」と良美さんは妙に落ち着いて言う。「カナちゃん

がどうしてそんなに焦っているのか、私には全くわからないんだけど？ それに彼が誰のことなのかもわからないわ」

「とぼけないでください。京都弦一郎のことに決まっているでしょう？ あなたなら知っているはずです。彼は今どこにいますか？」

「知らないわ」

「嘘を」

「嘘じゃない」

電話越しに良美さんのため息が漏れる。耳に息がかかるようで気持ち悪かった。「じゃあ、どうして良美さんはこんな平日の朝から私に何度も電話を掛けたりしているんですか？ なにか理由がなければおかしいです。こんな時間は普通なら授業中ですから、私が授業に出ていないって確信をもって電話を掛けたわけでしょう？ 理由もなくこんな時間から電話をかけていたのだとしたらそれはただの迷惑電話ですよ」

「落ち着いてって言うてるでしょ、カナちゃん。確かに私はカナちゃんが今学校に行っていないだろうと思ってたわ。あいつがもうどこかに消えるだろうってこともね。でも、別にあいつが今どこにいるのか知ってるからじゃないの」

「じゃあ、どうしてですか」

電話の向こうから一瞬、良美さんが消えた気がした。ろうそくの火が消えるほどの小さなものだったが、私の体温が一気に下がるにはこと足りる。滾るように熱い心臓が次第に冷めていき、からからの喉の感覚が鮮明になる。動かせそうもない体も例外でなく、直立の姿勢を保つのが苦しくなる。

「善正がどこに行ったか、知らないかしら？」

ぐらり、と体が揺れた。「それはどういうことですか？」

「どうもこうもないわ。私は昨晚帰りが遅かったから今朝気づいたんだけど、あの子昨日から家に帰ってきてないみたいなのよ。さつき学校にかけたけど来ていないらしいし。それでカナちゃんなら何か知ってないかと思ってね」

「昨日の夜から？」

吐いた息が熱い、ぼんやりと体が徐々に冷えていく中で、唯一くつきりと輪郭を残すように白い。

「ええ、朝は見たから。たぶん学校から帰ってきてないんじゃないかしら。あの子最近よくカナちゃんと会っているみたいだったからなにか知らないかと思ったんだけど、知らない？」

「知りませんけど」

「あら、そう」と遮って良美さんは大したことでもないように言う。
「ごめんなさいね。じゃあ余計なこと訊いて」

「あの」思わず声が出た。「……善正くんが、いなくなたんですよね？」

「そうよ」良美さんは言う。「カナちゃんもしかして心配してるの？ 大丈夫よあの子なら」

「それは……今までもこんなことがあつたんですか？」

「いいえ、そうじゃないわ。私はあの子に無駄な心配なんてしてないだけよ……もしかしたら、さっきの私の言葉にカナちゃんはびっくりしたんじゃない？」

「……はい」言葉を弄する意味もない。

「やっぱりね。でも、もしカナちゃんが知っていると云つたとしても、私は今みたいな返しをしたと思うわよ。ただあの子がどこにいるのが気になったただけだから」

「どうしてですか？」足元の砂利が不安げに音を立てた。震える脚が原因だろうか。

「言つたじゃない。無駄な心配をしていないのよ。あの子にはあの子のやりたいようにやらせておけばいいの。私はそれを見るだけが仕事なんだから」

「……でも、それじゃあ」

「これはカナちゃんが教えてくれたのよ」
砂利の音が止む。

「あの日 カナちゃん、うちに来たでしょう？ その時に言つて

くれたことを私なりに考えてみたのよ。善正にはこれが一番だろう、
って」

「確かに私は、二人は違うつて言いましたけど」記憶をたどりながらなので、うまく言葉が見つからない。「それでもそれじゃ善正くんが少し可哀想じゃないですか？ 俊哉くんとの扱いがかなり違うと思うんですけど」

「それはあの子も気づいていたと思うけど、むしろ始めからそうして欲しかったように見えるわ。あの子は俊哉みたいにならずに俊哉を超えたいと思っっているみたいだから。だからあの子に関しては心配していないの。心配するまでもなく、あの子はちゃんと自分で決めるから」

「俊哉くんは、自分で決めていなかったんですか？」

思い起こす『彼』の姿を反芻する。やりたいように生きている、そんな人間に少なくとも私には見えていた。

「そうとも言えるし、そうじゃないとも言えるわね。あの子も自分でちゃんと決めたことがあるし」

「じゃあもしかしてそれ以外は」

良美さんは少し沈黙する。その沈黙が栓をするように私の息を止める。息の詰まりそうなんてもんでもない。ほんの一瞬の出来事だったが、彼女が何を思っているのか十分に伝わってくるほどの硬度と、押しつぶされそうな重量感を体全体で受け止める。

呼吸音が聞こえた。

「……事実、私が俊哉を束縛していたのは頷けるわ。あの子は私の願いをほとんど、文句も言わず受け入れてくれた。進んで私の言いなりになってくれていたの。だから」言いよどむような沈黙。「私のせいであの子が死んだ、ともちゃんと思っっているのよ」

「じゃあ」どこから振り絞ったのか、という声だった。「そんなことを思えるのなら、どうして彼にあんなことをしたんですか。おかしいじゃないですか。自分が悪いと思っっているのならどうしてそれを他人に押し付けようとしたんですか」

堰き止めていたつもりもない。こらえていたつもりもない。ただ、あふれていく。

「彼は苦しんでいたんです。私とも、良美さんと同じように……いいえ、それ以上にです。その全てを飲み込んで、そのせいで彼は夢をかなえることをやめたんですよ？ それなのに」

それなのに？

それなのに、なんだというのだろう。私は何が言いたいのだろう。彼は自分を責めていた。自分が悪いと。自分のせいで『彼』を死なせてしまったのだと、そう言っていた。だからこそ今の自分を望んで作り出したかのような口ぶりだった。確かに詳しいことはわからない。彼に訊かない限り解らないが、しかし、そのような人間が心から望んでいる言葉は。

あなたのせいじゃない、ではなく。

あなたのせいだ、じゃないのか。

「あ……あ……」

思いではなく息が漏れ出る。言葉ではなく沈黙が流れる。脳が溶ける。手足がもげる。眼球が落ちる。舌が縛れる。心臓が爆ぜる。自分が消える。世界が壊れる。

頭が万力で締め付けられるように痛んだ。どうやら息を吐き続けるだけで吸っていかなかったらしい。一気に吸い込んだ空気は肺中を凍えさせ、体の芯の熱を奪う。

「カナちゃん？」

良美さんの声がする。けれど、聞こえない。私の耳は内側に向いている。内側に向けて、耳を澄ましている。何を聞こうとしているのか、そこに何がいるのか。むしろ教えてほしいのは私の方だ。自分はどうしてこんなことをしているのか。

恥ずかしいのか。今までの自分の行いが。彼を救うつもりで傷つけていた自分が。勝手に彼と自分を同一視していた自分が。間違いを正解だと決めつけて答え続けていた自分が。

本当に向き合えていたのか、自分は。

本当に彼のことを思っていたのか、自分は。

「自分本位な考え方はよした方がいいわよ、カナちゃん」

良美さんの声がした。良美さんの声が、聞こえた。

「そう詰め込んで自分は自分はずて、カナちゃん、そんなことを考えるのはまだ早いわよ？ それに自意識過剰も甚だしいわ。そんなことは、一人の時に考えなさい」

彼女の言葉を聞きながら、開いていた口を閉じる。喉の具合から私は無意識に何か言葉を発していたようだ。まさか思っていること全てを言ったわけでもなからうが、全てを推測しうるだけの言葉は発したのかもしれない。だからこそ良美さんの発言だろう。

携帯電話を握る手が小刻みに震えている。これは寒さも影響している。直立の姿勢なのに、自分でなければ気づかないほどの小ささで膝が上下している。靴底が地面とこすれる音が小刻みに耳に入る。どれだけ吐いても吐き出せなかったものを全て、大きく息を吸って吐き捨てる。

「落ち着いた？」

「……はい」嘘だ。

「ならよかった。じゃあ、これだけは覚えていてね。カナちゃんはまだそんなことを考えるべきじゃないってこと。後悔は全部やつてからすればいいってこと」

「……はい」

開いた手を握りしめる。そうでもないと崩れてしまいそうだ。

「それで、カナちゃんはいいつを探しているのよね？」

「はい……良美さん、本当に知らないんですか？」

「知らないわ」きっぱりと答えた。「そろそろ出て行く頃合いだとは思っていたけどね。どこに行くのかまでは知らない。でもカナちゃんが思っているような最悪にはならないと思うわよ。少なくともあの男はそんなこと、できる男じゃない」

「本当にですか？」

「ええ。私が言うのもおかしいけど、あいつは責任感だけは人一倍

だから、全部を捨てるなんてことはできない人間よ。全部を背負い込みながらこれからもずるずる生きていく人間だわ。自分ではそれを贖罪と思っているんでしょうけど　本当、苛々するわね」

淡々と告げる口調からはさして苛立ちは感じられなかった。どちらかと言えば興味のないものを語る口調だった。正反対とも言えるだろう。

「だから、とりあえずカナちゃんはそんな心配はしなくても大丈夫よ。今は自分の心配だけしておきなさい」

「……わかりました、ありがとうございます」

電話の向こうで良美さんは微笑んだのだろう。顔は見えずとも空気が雰囲気は伝わった。こちらでも少し表情が緩む。固まってしまうていたような頬が少し痛んだ。

「……それにしても、どうして彼はどこかに行ってしまったんですかね」

小声で独り言を言うと、良美さんは「うん？」と返した。まさか聞こえるとは思っていなかったので、あわてて答える。

「あ、いや……そんな責任感も強い人が、どうして良美さんから逃げるようにしてまでどこかに行ってしまったんでしょうか、って」
ぞわ、となんだか嫌な予感がした。

考えればわかることだった。訊かずとも少し考えればよいことだったのだ。良美さんが実は昔とあまり変わっていないかったことに安堵して世間話のようなものを思わずしようとするなんて、絶対にあるべきではなかった。なにせ彼女はまだ私の『敵』なのだ。不用意な言葉は避けるべきなのだから。

だけど、言葉は消せない。

「何言ってるのカナちゃん、そんなの私が言っただけに決まってるじゃない」
後悔は避けられない。

「私があいつに消えろって言ったのよ」

強い風が吹いた。汗はすっかり引いているので、ただの身を裂くような風だった。

「どうしてですか？」と私は問う。

「どうしてでしょう」と良美さんは答える。

電話の向こうから張りつめた空気が流れ込む。動きを封じられたようだった。金縛りと言うには遠い。あれは体が眠っていて意識が起きている。ただこれは、体は起きていて、意識が眠っているのだ。一時的なものだと確信はある。しかし、彼女の言葉に左右されるに違いない。どうにも自力で解くことは無理に近いようだ。瞼が落ちてくる。眠くなってくる。私は夢を求めている。何の夢かはわからない。空想か現実か、それともどちらもか、あるいは中間か。なんにせよ、私はここにいたくない。

「考えるまでもないことよ」と良美さんは言う。その意味を反芻する。頭が痛い。横になりたい。どうでもいい。私の失態もどうでもいい。考えることを放棄したい。どうせ考えても無駄なのだから。「カナちゃんにはきつと私の言いたいことがわかるでしょう？」わかるわけじゃないか。なにを言っているんだこの人は。私にそんなものがわかるわけない。「それから一応だけど、私はあいつに死ねなんて一言も言っていないわよ。言うまでもないことだと思っただから……ああ、この言うまでもないって言うのは、私がわざわざ言わずともあいつがそうするだろうって意味じゃなくてね、私が言っても言わなくてもあいつはそうしないだろうってことなのよ？ さつきも言っただでしょう？ あいつの贖罪の選択肢に『死』なんてものは存在しないの。それがどれだけ意味のないもので、嫌なものか知っているから」

「俊哉さんの死を知っているから」確実な共通点を言ってみた。「そういうこと」と良美さんは笑った。「もちろん私もね。だからあいつにそんなことは絶対に言わないし、自分でもしようなんて思わなかったわ。私もあいつも、そんな気がまったく起こらなかったから、こうして三年も後にこんなことをしているんだけどね。お互

い未練たらしいってならないわ。俊哉はもう死んでいるのに」

「死んでいるんですか？」

「死んでいるわよ」当然のように返した。「あの子は死んだときに死んだわ、私の中でも。ただ、私はそれを忘れていただけなのよ。目を背けていただけ。あの子が自分で死ぬなんて、そんな意味のないことをするわけないって信じていたからね。だからこの前、私はまたあの子を死なせてしまった。でもそれを思い出させてくれた力ナちゃんには感謝しているわ」

ふ、と空気が緩み、ゆっくりと引き上げられる気がした。

「カナちゃんとあんな風に言い合ったのってずっとごく久しぶりだったし、あのくらいの内容の深さだと初めてよね。あの後少し考えちゃったわ。私の方が大人なのに、って。少し反省した」

私は、反省なんてしていない。そもそも考えてすらいらない。

「だからもうやめようかなって思ったのよ。あいつにあんなことをするのは。次の日からあいつのところに行くたびに、だんだん自分を見ているようになって気持ち悪くなっていったし、可哀想にもなってる行ったし、嫌にもなってるいった。今までよりも余計にひどくねだから昨日の晩、ついに言っちゃったの。『消えて』って」

私は鼻をすすった。風に舞った髪が鼻をくすぐるのだ。ゆっくりと、開いた手で髪を抑える。私はもう起きている。

「結局のところ、私は自己嫌悪してただけなのでしょうね。あの子が死んだとき、ああ、私のせいなのかなって思っちゃったから。そしてそれからもずっと思っていたわ。三年間ずっとね。そんな時にあいつを見かけたから」

良美さんは少し言いよどむように、「ちょうど自分と重なって、苛々したんだと思うわ」と言った。

「墓の前にいるあいつを初めて見たとき、蹴飛ばしてやりたくなったの。それからあの子の葬儀で見かけた奴だってことを思い出した」
そうか、彼は葬儀に出ていたのか。私も確か出たと思うがまったく記憶にない。おそらく彼も同じだろう。そこにいると言っただけ

でどこにもいなかったのだろう。ということは、私と彼はもう既に三年前にお互いを見ていたのかもしれない。確かめようのないことだが。

すぐそこにある『彼』の墓に目をやる。煙草の灰のようなものが落ちていた。彼は今朝もここに来ていた。おそらく私と会うよりも前に。そして、それは毎日の行いでもある。もう彼の日常に組み込まれているはずだ。

「そして私は、カナちゃんには謝らなければならない」

「……え？」

「あいつは俊哉を殺してなんかいないわ」

私の中で何かが壊れた。

「あいつは俊哉を殺していないし、俊哉は自分で死んだんじゃない。殺したのは私なのよ。あの子は自分で死を選ぶような人間じゃない」

「……それは」

違う。それは違う。『彼』を殺したのは良美さんじゃない。『彼』を殺したのは私だ。どうしようもなく私だ。誰を疑うまでもない。私に決まっている。

「もちろん私も死を選ぶ人間じゃないわ。だから死を償うために死ぬなんて馬鹿馬鹿しい道は選ばないけど、でも」

「違う」

声が出た。良美さんの言葉を遮って。

「『彼』を殺したのは私なんです。良美さんじゃないんです。私なんです。私が全部」

「言うと思った」

背筋が伸びた。幼い頃の、良美さんに叱られる時の私の癖だ。ずっと前に、少なくとも中学三年生だったあの日にはなくなっていたはずの癖だ。

「カナちゃんならそんなことを言いだすと思ったわ。だから言うけど、そんなことはないのよ。カナちゃんはむしろ俊哉を救った側の人間なのよ。どうして自覚がないのかはさっぱりわからないけど、

私はそう胸を張って言えるわ。そしてあいつも、似たようなことを言っていた」

「そ、んな」

一拍置いて、良美さんは息を吸う。

「『奏はきつと自分が俊哉くんを殺したと言い出すでしょうが、絶対に違うと言ってあげてください。奏なりに一生懸命頑張って考え出したことでしょうけど、完膚なきまでに叩きのめしてあげてください。彼女のせいでないことは僕がよく知っています。俊哉くんと同じくらい知っています。俊哉くんは彼女の為に生きていました。その彼女に罪を負わせるわけにはいきません』……だったかしら。よく覚えていないから適当に私の言葉も使ったけど、こんなところだったと思うわよ」

喉と眼球から水分が消えて、胃が強く締まる感じがした。「……今のは？」

「昨晚あいつが言っていたことよ。伏せてくれとも言われたけど、もうどこかに行っちゃう人間だからいいわよね。『僕は明日彼女に会ったら、もう二度と会うつもりはないのでお願いします』とも言ってたし」

「二度と？」

二度と会わない、なんて困る。私にはまだやらなければならないことがある。

「本当はこれを伝えるために電話したんだけどね。まさか善正がどこかに行くなんて思わなかったから余計な時間を使っちゃったわ」

「良美さんは、彼がどこに行ったか知らないんですか？」

何度も訊いたことをもう一度。一瞬の沈黙の後、「本当に知らないわ」と良美さんが答える。

「知っているなら、教えてあげたいけどね。そんなにカナちゃんが会いたいなら。カナちゃん、今どこにいるの？」

「俊哉くんのお墓です」

「……そこにいないなら、もう私にはわからないわ。残念だけどね」

「そうですか……」

ため息が思わず漏れる。彼が何ともないならそれでいい、という考えはもうどこかに行ってしまったている。私は彼に、何としても会わなければならない。どうしても。たとえ彼がもう二度と会いたくないと言ったとしても、だ。

「それにしてもカナちゃん」

不意に、軽い口調になって良美さんが言った。なんですか、とだけ返す。

「いえ、どうしてカナちゃんったら自分が俊哉を、なんて言い始めたのかなってね。よく考えれば考えるほどそんな考えはなくなりそうなものなのに」

「……そういうものですかね」

確かに少し考えてみれば、『彼』は私と喧嘩したくらいのことです。死ぬような人間ではないとわかる（そもそも喧嘩程度で自殺とはどれだけ死にたがりなのか）。あの日までだって何度か喧嘩をしたことはあるはずなのだ。もっと露骨に私が汚い言葉を使ったこともある。その差がどこで生まれるのだろうか。私の主観的な感情ならそれまでの何よりも『彼』に憎悪してはいた。唯一さえも奪われたのだ。あの『彼』だって、唯一という全てを奪われたら私のように憤慨したはずだろう。しかしその場合、私は死を選ぶことはない。むしろ両手を叩いて歓喜することだろう。

「……でも、小さい頃と言っても、あんなことを言っておいて、それなのに」

「あんなことって？」

「バイオリンは弾けないってことです」

電話の向こう側の空気が再び張りつめた。

「……ちよっと、カナちゃん。絶対に訊かないって決めてたことなんだけど」

「……はい？」

突然切り替わった空気に私は違和感しか抱かない。なにか私は変

なことを言ったのだろうか。

「カナちゃんと俊哉は、あの日二人で何をしていたの？」

一瞬、答えが見つからなくなった。

「部屋から先に出てきて善正の相手をしたカナちゃんも、後から出てきてそれから私と話した俊哉も、まったく変わった様子じゃなかったから、私は今まで訊かないできたわ。訊くまでもないことだと思って。二人の問題だと思って。あの俊哉があんな風にカナちゃんを誘ったことを深く訊くのは、さすがにいけないと思ってね。もしかしたら余計にカナちゃんを傷つけちゃうと思って」

良美さんの声が響く。それ以外の音は聞こえない。風の音も何も聞こえない。

「教えて」

空気が重く方にのしかかる。体が何倍にも重くなったようだ。閉じられた口を開く。万力をこじ開けるように。

「バ、バイオリン、を……」

「バイオリンを？」

「俊哉くんが……俊哉くんがバイオリンを私に弾いて見せたんです。それで、私は怒って……」

怒って。

怒って、それからどうしたのだったか。『彼』を咎めたのだったか。何を話したのだったか。思い出せない。思い出せない。バイオリンを奪う。部屋から出る。思い出せない。

「俊哉は、バイオリンを弾いていたの？」

驚いたような声で良美さんが訊ねた。驚いて声も出せず、首肯して、これは電話だったことを思い出してからやっと「はい」と答えた。

「本当なの？ 本当にあの子が、バイオリンを弾いていたの？」

「……ええ、私もすごく驚きました。俊哉くんはバイオリンだけは弾けないって言ってたのに」

良美さんの答えはない。しかしすぐそばにいる感じはまだ残って

いるので、ただ黙っているだけなのだろう。

私はどうしたものかと思案しながら、そういえば彼を探さなければと足を動かすことにした。とりあえずここにはいないことは確かなので、もう一度河原のあたりを探してみよう。走るのはつらく、良美さんの言葉にも対応できないかもしれないので走らない。振り返って、来た道をたどりながら、「大丈夫ですか？」と訊ねた。それでも返事はなかったので通話状態を保って耳に当てたまま歩く。曲がり角を曲がろうとする。

「実はね、カナちゃん」

良美さんが言った。立ち止まって、「どうしましたか」と答えた。またしばらくの沈黙が流れる。

「実は」

「いた」

唐突に後ろから声がしたので、条件反射的に、耳に押し当てた電話を離しながら振り返る。

そこには『彼』が いや、善正くんが立っていた。

004

「善……正、くん？」

耳から離れた電話からは絶えず良美さんの声が聞こえた。ただ何を話しているかは聞こえない。つい先ほどまでしていた話が蘇る。そしてどうしても重なってしまう『彼』と善正くんの姿。

善正くんはじつと、私を見ている。場所はちょうど『彼』の墓前。そのせいで『彼』に見えてしまったのかもしれない。

「……どうしたの？ 昨日家に帰ってないんでしょ？ 良美さんが心配してたよ」

なにか言わなければならない。そんな気がして思いつくことを言った。善正くんはいつものような表情でなく、いくらか堅いように見えた。もちろん私もそうなのだろうが。

「どうでもいいよ」

視線は私に向いたまま、誰か違う人に答えるように言った。言葉

が私に向かつていないような気がした。きつと気のせいだ。その証拠に、一転していつもの軽い表情に戻る。

「姉ちゃん電話してんの？」

「うん」

「母さん？」

「うん」

「ちよつと替わつてくんねーかな」と善正くんは言つて、私が返事をするよりも先に歩み寄つて携帯電話を奪い取り、そして私に声が聞こえないくらいまで距離を取った。私に見えるのは善正くんの背中なので、口元や表情から何かを読み取ることはできない。もちろんそんな技術を持つてゐるわけでもないが。

善正くんの後ろ姿を眺める。線が細い。少し触れただけでも怪我をさせてしまいそうだ。サイズが少し大きいように見える学生服。その頭には赤いニット帽。正直私は帽子の有無で『彼』と区別をつけているところがある。もしも善正くんがニット帽をかぶることなく、なにも喋らずに佇んでいたとしたら、私はきつと『彼』と本気で間違えていたことだろう。それももう、最近ではいつものことになっている。

ついこの前まで、全然会っていなかったのに。

「はい、姉ちゃん」

善正くんは私に向かつて電話を放り投げた。もう通話は終了したようだ。人の携帯電話を投げるような行為をしてはいけないと少し嫌味たらしく言つてみたがまったく気にもかけていないらしい。視線はもう『彼』の墓へと向いている。

そういえば私は、善正くんが『彼』に向けて手を合わせているところを見たことがない気がする。どころか、『彼』の前に立った善正くんの姿すら見た記憶がなかった。したがって、私は初めて善正くんが『彼』といふところを見ているのだろう。到底手を合わせるような行為も、語りかけるような行為もない。一瞥するようにすぐに視線を戻し、なにも見なかったかのように、「姉ちゃん、なんで

学校に行つてねーの？」と言った。

「なんでつて言えば、なんで善正くんは昨日家に帰らなかったの？」

「その話はどうでもいいーって言つたろ？」

「どうでもよくないよ」

「用事があつたんだよ」と少し嫌そうに視線をそらしながら言う。

「用事つて？」

「それはあとで話すから、とりあえずどっか違うところに行こーぜ？」

「ここじゃ、嫌だ」

「どうして？」

「訊く必要なんてあるのかよ」少し目が鋭くなった。仕方がなく私は「いいよ、わかった」と言つてしぶしぶ首肯する。「でも学校はどうするの？」

「そんなのどうだっていいーだろ？」

「いいの？」

「いいーんだよ」

善正くんは私を追い越して歩く。遅れないように一歩後ろを歩く隣に並んだりはしない。なぜなら、そうしてしまうと善正くんの姿がよく見えなくなってしまうからだ。後ろ姿だけでも見えないよりはましだ。

「で、なんで姉ちゃんは学校に行つてねーの？」

善正くんは振り返ることもない。仕方がないので答えることにしたが、どこまでを話せばよいのかわからず、数秒間考えた挙句、そのままに話すことにした。

「この前善正くんに話したと思うけど、俊哉くんの友人だつて言つてた人が今朝突然いなくなっちゃつて」

「ふーん、それで探してたつてこと？」

「そうそう」

どこか言葉に力がない。覚えのある感覚だと思つたら、知つている話を聞かされた人の反応に近いことに気づいた。内容がわかつてしまっているから相槌を入れるタイミングがわかり、そのせいで会

話がただの作業に等しくなる。ただ本当にそうかはわからない。第一、善正くんにはそれほど詳しく彼について話してはいないのだから。

「善正くんこそ、どうして学校に行っていないの？」

この質問をするのはいささか早いかもしれないと思ったが、思ったところには訊いていた。昨晩のことはもう訊かないことに決めたので仕方のないところだとは思う。

「あー、姉ちゃんを探してたから」

「私を？ どうして？」

「訊きたいことがあったから？」

「どうして疑問形なの？」

「わっかんねー」

そこにいない人と話している気分だ。明らかに善正くんが私じゃない何かについて考えていることがわかった。それでも訊かねばならないと思ったが、善正くんは一層歩みを早めるので、付いて行くことが精いっぱいだ。訊くことを考えて、実際に口を開こうとする頃には忘れている。いや、思考に氣を取られたせいで開いた間隔を詰めるために、早く歩くことしか考えられなくなっている。あるいは息が上がってしまったているせいかもしれない。それほど長い距離でも時間でもないとはいえ、久しぶりの全力疾走をついさつきまでしていたのだ。気分は回復しているとしても体力も筋肉も回復しきれてはいまい。

道順さえもわからなかった。ただ善正くんの背中ばかりを追いかけている。それについて行けばいいだけだと思っているからだ。だから、今自分がどこにいるか周囲を見渡せば気づくことはできるが、視線を変えないままに把握することはできない。私の瞳がとらえているのは善正くんの背中ばかりであり、その他風景は含まれていない。突然脇道から車が飛び出してもすれば私は気づく間もなく跳ね飛ばされてしまうだろう。私は背中だけを見て歩いている。では、善正くんは何を見て歩いているのだろうと不意に思った。善正くん

だけではない。知っている道を歩くとき、普段私は何を見ているのだろう。目の前に誰もいないとき、目印がないとき。それらは全て記憶の中から引っ張り出した地図を頼りにしている。あるいは単なる慣れといった無意識のうちの行動選択だろうか。常日頃からよく通った道、特に通学路などがそうだろう。

通学路と言って真っ先に思い出すのはあの川沿いの道だ。もちろん小中学校の通学路も含めて、その中で最も思い入れがあり強く心に浮かび上がるのがあそこだ。きつとこれからの人生でも揺らぐことはないだろう。彼との出会いを忘れることはないだろう。

きつと別れだって。

「姉ちゃんさ」

善正くんが立ち止まった。交差点だ。通学路には使っていないが、普段出歩くときにはそれなりの頻度で通る場所なので一見しただけでわかる。横断歩道の信号はついさつき変わったばかりのようで、青信号までの時間を表示する電光のゲージはまだ十分に残っている。「兄さんを殺したって言う人がいるって、話してたよな？」

首だけでこちらを向く。いつも通りの表情で空気も重くない。間髪入れずに「うん」と答えた。

「その人と兄さんってどこで知り合ったの？」

「学校……って言ってたよ。その人は高校生じゃなくて大学生だったらしいけど」

「大学生？」

「教育実習だって」

「ふーん」

善正くんは視線を前に戻すと、ちょうど信号が青に変わる。どうやら向こうが優先道路のため信号が変わるのが早いらしい。車が来てないか確認するそぶりを見せてから歩き始める。いくらか歩調は緩んだようだった。

考える余裕ができたからと言って、すぐに訊けるような言葉も見当たらなかった。そもそも私は善正くんとなぜ一緒に行動している

のだったか。

「用事って結局なんだったの？」

思い出して訊ねると善正くんはまた立ち止まった。しかし、今回は交差点ではない。私が通学路に使う道であり、ただの真っ直ぐに伸びた道だ。当然ながら車道には車の姿がちらほらとしか見えなかった。今日は平日で、しかもとくに通勤や通学の時間は過ぎ去ってしまっているのだから当然だろう。歩道を歩く人の私たちを除くと誰もいない。本当に学校をさぼってしまったのだと、この瞬間に強く感じた。

「確かに俊哉くんの前じゃ、善正くんが嫌なのわからないこともないけどさ。でも、もう教えてくれてもいいんじゃないのかな？」

「……わかった」答えると、また善正くんは歩き始めた。

一分タイミングが遅れて私も歩み始める。話してくれるならば、とすぐに隣に並ぼうとするが、そうするたびに善正くんは速度を上げた。隣に並ばれるのが嫌かのように。偶然という可能性がないこともなかったが、大人しく一歩後ろを歩き続けることにした。

「母さんの帰りが最近遅いつて、言っただよな？」

前を向いたままで速度も変えない。「うん」と私が答えても反応は薄かった。

「その理由が知りたくっさ。……ああ、あと姉ちゃんがどーして突然兄さんのこと言い出したのかったのな。なーんか関係あるのかなーって思っで、調べてた」

「……え？」

「だっでおかしいだろ？ 誰がどー考えたっで気になるさ」

当然のことのように、全く口調を変えることなく善正くんは言う。「母さんはまだわかるにしても、姉ちゃんの方は誰がどー見たっでおかしいと思うさ。三年も前に死んだ兄さんのことを突然思い出したように調べ始めるなんて、絶対にないかがあるはずだと思う」

確かにそうに違いないだろう。事実本人である私でさえ、このような事態が発生して、今更こんなことするなんて思いもしていなか

ったのだから。もし私と善正くん立場が逆で、突然善正くんが私の家を訪れて『彼』のことを訊き始めてもしたら、私は怪訝な顔をせずにはいられないはずだ。善正くんが私に対してそのような表情を見せたかは記憶にないが、少なくともそれに似た表情は見せたはずだ。そしてそれに類似する感情を抱かざるを得なかったから、善正くんはこのような行動をとったのだろう。

しかしまだ、『このような』の部分がわからない。

「……それで？ 私と良美さんがおかしいと思って調べることにして、それから善正くんはどうしたの？」

「それから？ ……ああ、別に何もしてねーんだよ。調べようと思っただけ、何も手段が思いつかなかったし」

「思いつかなかった？」

「正確に言つと、めんどくさかった」

善正くんは歩きながら頭を掻いた。ニット帽をかぶっているのその上からだ。なにも頭が痒いわけではなく、答えづらいところがあるからだろうとはわかる。しかし、問題は善正くんの話だ。それが本当ならばそこでもう話は終わるはず。なのに、昨日は結局帰らずに調べていた、ということとは。

「だから、偶然って言えば偶然だったんだよ、あいつに会ったのは」また、善正くんは立ち止まった。つられて私も足を止める。

「京都弦一郎について教えてくれ、姉ちゃん」

川沿いの道の上で いつもの場所の近くで、振り返った善正くんはやけに真面目な顔をしていた。

005

「オレがあいつを初めて見つけたのは昨日だよ。たまたまこの川沿いを歩いてたら、母さんと何か話してるあいつがいてさ」

「それだけで善正くんはわかったの？ 彼が私が言っていた人だった」

「わかれば苦労しねーよ」

善正くんはビニール袋から暖かいお茶を一本取り出して私に勧め

た。私が黙って受け取ると、彼は自分の分を開けて一口飲んだ。私も喉が渴いていたので飲む。ちょうどいい温度が少し冷え始めていた体に染みわたる。キャップを閉めてから指先を温めるようにしながら抱えた。

「最初に声をかけたのはオレじゃなくてあいつの方だしな。ほら、オレ兄さんにかなり似てきたる？　オレが今まで見た中であいつが一番びつくりしてたからさ」

「……それは、そうだろうね」

付近にはほかに誰もいない。普段ならこの時間でも散歩をしている老人が一人はいてもおかしくはないのだが、今日はそれほど寒いのだろうか。私たちにとって都合のいいことに変わりはなくとも時間の問題だろう。学生がいることを咎める人が現れないことを祈る。河原に降りた私たちは、彼の『家』があつた付近に腰を下ろしている。地面は砂利だが気にすることもしない。問題は寒さだが、私が彼について一通り話したあとに善正くんがコンビニで買ってきたお茶のおかげで、ある程度はしのぐことができそうだった。それも所詮は時間の問題なのだろうけれど。

「母さんがどこかに行ってから、河原にいるあいつを見てたんだよ。そしたらうつかり目が合つて見つかつちまつて」

「それであの人がびつくりして？」

「そーそー。それでここまで下りてきて話をしたんだよ。それも朝までずっとだぜ？　……まー、半ばオレがそーさせたんだけどさ」
彼が善正くんの存在を『彼』から聞かされていたのかは定かではないが、たとえ聞かされていたとしても驚かざるを得ないだろう。あらかじめ似てきたという事実を聞いていた私でさえ、一瞬本気で見間違えそうになってしまったのだ。

そして話を終えたのが朝ということとは、彼は善正くんと別れてすぐに私に会ったのだろうか。

「どんな話をしたの？」

訊ねると、善正くんは珍しく苦笑した。

「兄さんに関係した話ばかり……と思わせて、実はあまり兄さんの話してねーんだよな。なんかわかんねーけど、あいつオレに『なにか悩んでたり困ってたりすることないか』とかそんなことばっか訊いてきてさ。なんだっての」

「……ふうん」

やはり、彼だ。私の知っている彼だ。おそらくその頃にはもう良美さんに言葉を掛けられてある程度は解放されていたのだろう。

「だからさ、ちょっと悪いことしたかなって自分でも思ってるけど、オレから兄さんの話を振ったんだよ」

「善正くんから？」

善正くんは小さく頷いて、その先を話す。

「つつても、前に姉ちゃんに少し聞いてたからちゃんと直接的なことはあまり訊かなかったけどな。さっき母さんと一緒にいたけど、最近よくあってるのかーとか」

「それって結構……」

「まー重かった。失敗したと思った」善正くんは私の心配を受け流すように笑う。「でもあいつはそのまま教えてくれたよ。母さんがあいつにどんなことを言ってきたのかも。少し姉ちゃんに聞いてたのと少し違ったけど、大まかなところは同じだった」

自然と視線が川面に向かう。あまり善正くんの表情を窺いたくないと思った。いい意味も悪い意味でも、できることなら知らない方がいいと思ったからだ。良美さんのことをよく思っていないような話も、つい最近したばかりなので。

「あいかわらずどーしよーもねーって思ったよ。本当にさ。でもおかしかったのが、あいつがそれを嬉しそーに話してるってことなんだよ」

「嬉しそーに？」風が冷たくなった気がした。思わず善正くんの方を向く。

「うん。なんてーかさ、長年の夢が叶ったみたいな、そんな感じ？ 実際にあいつに訊いてみたけどそんな言葉が返ってきたし。あれ

かな、逆に言われてただけ言われてすっきりした、みたいな？
もうだいぶ前の話なのにな」

良美さんの電話を想起する。彼の本当の願い。自分が『彼』を
殺したと言う彼は何を望んでいたのか。

私はやはり間違っていたのかもしれない。だとしたら、それはす
ごく悲しいけれど。

「姉ちゃんのこと話してたよ、あいつ」

「私のこと？」

今思い出したような出た言葉に、少し動揺してしまう。

「えっと、『奏はたぶん自分が悪いと思うから』……みたいな。な
んつーか、あんまり聞く気がなかったから覚えてねーんだけどさ」
「……そう」

あの人は親子に同じことを言っただろう。まして善正
くんには初めて会ったばかりだと言うのに。以前抱いていた、実は
彼は何も考えていないのではないかという懸念が再発した。今更気
にかけてどうなるという話でもないが、それでも思わないと落ち着
かない。あの人はどれだけ私を気にかけていたのだろうか。

お茶を飲みながら、いつかこうして彼と話していたときを振り返
る。あの時は私がさらに肉まんを買って行ったのだったか。ついこ
の間のことなのに、もう記憶がぼやけてしまっただけではない。あ
あ、彼はお茶ではなくてコーヒーだったのか。苦いものが苦手だと
も言っていた気がする。私が何かを言っただけ、それを聞いた彼が手を
滑らせて私の口に肉まんを押し込んで。私は何を言ったのだろうか？

彼は何を言っただけ、何を思っていたのだろうか？

記憶までも滲んでぼやけてしまっている。

「姉ちゃん」

善正くんは声を掛けられて、ゆっくりとそちらに向く。気づかな
いうちにまた川面にはかり視線が行っていたようだ。特に深く思い
込んでいたわけでもないが、けだるいものを感じた。瞼が上手く開
かないほどに、緩慢とした冬の朝のような。

「あいつと話したり、今姉ちゃんにあいつのことを聞いて確信した。オレは、あいつが兄さんを殺したってことは、絶対にねーと思う」
意を決したような顔をして言う。「もちろん姉ちゃんでも母さんでも……オレでも、ないよ。兄さんは一人で死んだんだよ、自殺なんだから。オレたちがどーいう風に兄さんを傷つけたかは関係がねーわけじゃねーけど、殺したわけじゃねーだろ？ 兄さんが死を選ぶ原因にはなったかもしれないけど、兄さんが死ぬ原因にはなってねーはずだ。兄さんが死ぬ原因になったのは、兄さんが死を選んだからなんだから」

「……それは、どう考えたって間違ってるよ」

私たちのせいで『彼』は死を選んだ。死を選んだので死んだ。ゆえに、私たちのせいで『彼』は死んだ。……いや、これさえ間違っているとは思うが、それがわからずとも善正くんの言葉は間違っている。頭ではそう思っている。

しかし、心の底では救われた気がした。

私は彼にこういうことをしていたのだろう。それでも彼は今の私のように思わなかったのだろうか。答えはもう、考えずともわかる。彼も救われたような気がしたはずだ。彼はそんな自分が許せなかったのだろう。今の私と同じように。頭で、理性で、自分を責めて。

「でも、ありがとう」

私にはできない。

悪くないと誰かが言ってくれたとしても、私はそれを受け止めることしかできない。理性で抑え込んで、まだ贖罪の為になど考えることができない。彼のようになることはできない。

一体彼はどれほど自分を責めたことだろう。どれだけ私の言葉に救われて、それ以上の傷をまた自分につけたのだろう。全く計り知れない。それほどまで思い込んでしまうほど彼は何を『彼』に対してしたのか。

よくよく考えれば、私はそれを知らないのだ。彼が『彼』を殺し

たと強く主張することは知っていても、なぜそう思っているのかわからない。直接的ではないと確かに彼は言っていたけれど、自分が殺したと断言するほどの『何か』なのだ。彼がしたことは並大抵のことではないのだろう。『彼』に作用することで最悪のケースになってしまふ、私たちにとっては当たり前のことだという考えもよぎるが、しかしそれがなんなのかは当然わからないし、それならば彼だってそれがなんなのかわからないはずだ。なぜ死んでしまったのか知っているのは、もう死んでいなくなってしまった『彼』しかないのだから。もしかすると意見がかみ合わないことも十分にありうるかもしれない。たとえば、彼はAという行為をしたせいで死なせたと思っているのに、実際は『彼』はBという行為のせいで死を選んだのかもしれない。果たしてその場合でも彼が殺したことになるのか。

結局のところは、誰にもわからない。本当のことも、真実も、全てを知っているのは『彼』しかないのだ。死んでしまっても私もより優れているというのは、少し悔しいと思ってみたりもする。

「……一つ質問、いいかな？」少し照れたような表情になった善正くんは言う。「姉ちゃんはみんなを救いたいて言っただけだよ。その中にあいつは当然、含まれてるんだよね？」

「うん、そうだよ」とできるだけ平静を装って答える。あまり固執していることを気取られないように。その行為に意味はない。おそらく良美さんが彼ほどではなくなったことを知って彼に比重が傾いているだけなのだろう。

「それで？」

「いや、それならいーよ。安心した」

善正くんは私の目を見る。

「姉ちゃんはまだ、あいつを救ってない」

ずるり、と胸から血液が体内を滑り落ちるような不快感。まさに胸を突かれたような気がした。思いきり開いた瞼のせいで眼球が渴いて痛い。風は音も立てずに、体中を這いまわる。

「そーなんだろ？ あいつの口ぶりからも、姉ちゃんに会ってからさっきまでも、ずっとそーじゃないかと思ってた」

善正くんは緊張感を孕んだ口調で、頭の中にある原稿を読み上げるように言った。きつとこの話をしたかったのだろうとわかる。もうすぐ消えてしまう彼に対して、私はどうするのか。

私はどうしたい？

「ねえ、善正くん」

訊かずにはいられない。

「あの人が今、どこに行ったか知らない？」

しっかりと、善正くんの瞳を覗き込む。揺らぎはない。長いまっげが影のように瞳を隠したかと思うと、「知らない」と答えた。

「今いるところは知らないよ。けど、いずれあいつがどこに行くかはわかってる。つーよりは、知ってる」

「訊いたの？」

「いいや、聞いてない」善正くんは首を振る。「だけどさ、オレにはそれしか考えられなかったんだ。もうこの辺りからどこかに行くって言ってたあいつが最後にどこに行くか。兄さんのことに負い目を感じていて気にしていたあいつが」

私は、行かなければならない。彼に会わなければならぬ。確かめたいことも、やらないといけないこともあるのだ。

彼のために。

「それは、どこ？」

「それは」

善正くんは躊躇なく答える。風の音とともに私に耳に流れ込むと、瞬時にその意味が体中を走った。

006

雲が広がった空は閉塞感ばかりを私に与えて陰鬱な心持ちにすると同時に、向こう側の見えない不安を駆り立てた。

それは無論私の未来であるし彼の未来でもあり、もつと微視的に見るならば私たちの過去だ。互いに持ち合わせた『彼』の側面。私

と彼。違いが現れるのは足りない部分のせいなのだろう。私の知らない『彼』のせいで私は構成され、彼の知らない『彼』のせいで彼は構成されている。知っているからそうなるのではなく、知らないからそうなるのだ。事実私から見て、全くと言っていいほどに私と『彼』に類似する点はない。あれだけ長い期間付き合いながら、なかなかありえないのではないかと思う。あるいは『彼』がそう謀ったのかもしれない。私が『彼』と同一にならないように、意図的に『彼』がその側面を隠したのかもしれない。始めの頃に私が抱いた満足感や充足感はそのから来るかもしれないのだ。表向きには私の視点では 二人が合うことによって互いの足りない側面を補完し合って、満たされた完全へと近づく。

今朝の彼との会話を思い起こす。

彼と私の共通点は、『彼』に強く関係していたという点へと全て集約される。そこに触れ合った期間や時期は関係ない。私が幼少期に出会おうと、彼が大学生の時に出会おうと、出会った本人が『彼』をどう認識するかによって、あらゆる要因が混濁し、鮮明な結果が抽出される。その結果、私がどのような人間になってしまったのかは深く考えずともわかる。

人の目を気にして、保身ばかりに目を向けて。

対照的と言わないまでも、彼にはそのような部分はない。果たしてそれが『彼』がもたらしたもののなか、彼の元来の人間性なのかは判断のしようがないが（そうは言っても彼元来のものである可能性が高いのは火を見るよりも明らかである）むしろ問題は結果にこそ存在するだから、あまり重要視する必要もない。私と『彼』を比べたときに対照的な部分があり、彼もまたその部分で対照的であるというだけのことだ。土台に行くにつれてサイズが小さくなっている積み木の塔のようにひ弱で今にも崩落しそうなものなのだ。

そもそもそんなものに価値や意味を見出すことの方が間違っている。物事の大部分は無駄で無意味なものであるはずだから。多くのストーリーがそうだ。伏線に見える系を手繰り寄せたところでそこ

には答えなど存在せず、小さな紙切れ一枚がついていて、「はずれ」と書かれている。まだ書いてくれるだけありがたい話、現実はそうでない。それがはずれなのかどうかですらわからない。今は正解でなくとも、遠い未来には正解になるものもあれば、実は遠い過去では正解だったものもある。今という時点で正解でない、ということだけのこと。

数学的ではないのだろう。ちなみに私は数学がそれほど好きではない。一つの答え、というものがどうにも苦手なのだ。そのくせ質問以外となれば無意識によく「一つ」を追い求めている。矛盾しているかと言えば、口をつぐむしかない。ただ、私の考える範疇ではそうでない。結果的に一つを見つけるにしても、無意識に一つを求めているにしても、頭では無限にも思える何かを手の届く範囲で全て捕まえたいと思っているだけなのだ。樹系図の発端を捕まえたい。最終的には、広がっていく選択枝を束ね、共通点を列挙し、そこから探し出されたものが一つというだけの話で。

だから、私なりに考えた様々な答えが京都弦一郎と水島奏と、その間をつなぐ岩代俊哉という一人の人間の関係を発端としていると言える。それが全てではないにしろ、活用して語ることができるはずだ。私がなぜ私であるか、彼がなぜ彼であるか。

私と彼はなぜ出会ったのか。

運命だとか、偶然だとか、必然だとか、そんな言葉は聞きたくない。出会うべくして出会った、という言い方も不適當だ。出会うことに意味がありはしても、その先に意味はない。逆もしかり、出会うことに意味はなくとも、その先に意味はある。この二つがぐるぐると私たちの間を駆け巡る。私が今求めているものはどちらか。

彼との出会いが私にもたらしたもの。彼が私から取り払ったもの。それはどれも、『彼』から受け取ったものではないのか？

受け取った、という表現もまた適切でない。『彼』と過ごす時間の中で自然と体得したものだ。私にそのような意図はない。無意識の下で望み、手に入れていたもの。つまり、これは『彼』が私に見せ

なかった側面だ。それを彼が打ち破った。これはもう、如実に示しているだろう。

私の見ていた『彼』と、彼の見ていた『彼』は違う。

もしも同じであるとするならば、彼は私からそれらを取り払わなかったろう。『彼』の影が今でもちらつく彼にとって、私の行動原理は正しいものに映るはずだからだ。どうあがいたところでかわない天才を前にして、保身に走らざるを得ない惨めさを黙認するはずだから。私と同じように『彼』を見ていたのならの話だが。

そういえば、彼は以前、『彼』も私と同じようなことを悩んでいたと言った。同じようなこと……根本的な問題か、表面的な問題か。これは本当に訊かなければわからないだろうが、少なくとも、その時に『彼』が見せた姿は私とはそれなりに異なるはずだ。同じようなことと言っても、根本的な部分の話だろうから。表面的なところを見て、確かに『彼』もなかなか進路を決めようとしていなかったように見えた。何度訊ねたところではぐらかされて、それは良美さんでも例外ではなかったらしい。結局『彼』が何を選んで、何をしたいと考えていたのかさえ私は知らないのだ。多才ゆえの悩みとでも言えるのだろうか。私にしてみれば羨ましく思えると同時に、非常に強い嫉妬心を抱くのを感じた。死んでしまった今でもなお、私は嫉妬しているのだ。

表面的であれ、根本的であれ、『彼』が何かしらの悩みを持っていたことは確かだ。問題はそれが何であるのかで、おそらくその姿を見たことで今の彼があるのだろう。何かに悩んでいる『彼』が見せなかった側面が私に近しく、彼を形成したのだと思う。

だからこそ私は彼に対し、拒絶の念を強く抱かなかったのだろう。彼の姿が私の知る『彼』の姿に無意識的につながって　そして、彼の中でも同様に。

「姉ちゃん」

善正くんの声がした。聞えないふりをした。私はまだ考えていた。彼のことにについて考えてなければならぬ。まだ足りないのだ。

彼を完全に救うには。今までの私にできなかったことをできるようになるには、向上しなければならぬ。そしてまだ向上が足りないのだ。全然、足りないのだ。だからまだ、もう少しでいい、時間が欲しかった。

「姉ちゃん」と善正くんはさつきよりも少し声を張った。さすがにもう聞こえないふりはできず、「なに？」と普段通りに返事をした。善正くんの方を向く間に空が一瞬視界に入った。雲ばかりが広がる空に赤い光の筋が伸びていた。いくつもの線がまっすぐに、一点を目指しているかのように。本当は順序が逆なのであるが。

「もうすぐ時間だ」善正くんは言う。「一応もう一回言っとくけど、これはオレの予想だからな？ あくまで、予想だからな？」

「わかってるって」コートのポケットに突っ込んだまま、手を開いたり閉じたりしてみる。かじかんだ様子もない。感覚も十分だ。防寒のために早めの時期に買って置いてよかった。学校指定のコートではないが、今は別に構わないだろう。やはり一度家に戻って上着を持つてくるのは正解だった。「そんなに予防線張らなくてもいいよ、わかってるから。私だってそれしか考えられないし、そこに現れないならもうどうしようもないって。ほかの場所なんて思いつきもしないんだから」

「本当に、いーのか？」

「どうして？」

念を押すように言う善正くんがよくわからない。確かに私は初めて行くところだ。しかし、それは善正くんにも変わりがないはずなのに。

「どうしてそんなに気にしてるの？ なにか心配事でも……」

「いや、心配なことなんてないけどさ、なんてーか」言い渋るように視線をそらす。「姉ちゃんの顔が怖い」

「……え？」

「緊張、してるように見える」

「緊張？」

「かなりな」

ポケットから両手を出して頬にあてる。手のひらは冷たく、触れた私の輪郭を凍らせていくようだった。

緊張　なぜか思い出したのは、あの日の『彼』の言葉と姿。

「そんなに気を張る必要もないと思うけどな。相手はだってあいつだぜ？」

「彼だからこそ、私は緊張してるんだろうけどね」私は笑ってみる。無理矢理に筋肉を動かした気がする。「でも気づかなかったよ、自分が緊張してたこと」

「気づかなかった？」不思議そうに善正くんは問う。

「うん。緊張してるってことに気づかないくらい、今は必死なんだよ。たぶんね」

「たぶんってなんなんだよ。自分のことだろ？」

「自分のことだからだよ」声を絞り出す。「それ以上に、彼のことなんだから」

「ふーん……まー、オレにはよくわかんねーけどさ、それよりもう行かないと、あいつどっか行っちゃうぜ？　先に行って待つんだろ？」

「うん、そうだね」と言っただけで私は立ち上がった。時計を見ればもう五時を回っていた。本当に時間がないのかもしれないが、私にはわからない。そもそもそこまでどう行けばいいのかすらわからない。道順は全て善正くん任せなのだ。

「安全運転でお願いね」

「了解」

川に背を向けて土手を上る。上の道に置いた善正くんの自転車が、雲の隙間から差し込んだ光で赤く光った。

007

善正くんの後ろで、自転車に揺られながら考えた。

彼にとって私はどのような存在なのか。

答えはわからない。私にとっての彼と同じだとは到底思えないが、

それでもできることはあるはずなのだ。彼が去ってしまうにしても、救われていてもそうでなくても、私は彼に何かを伝えなければならぬ。けれど、なんの言葉も思いつかないのだった。昼間の時間を

本来なら学校で勉強していた時間を　すべて使って考えたところで、それは無理だった。かといって時間が足りない、というわけでもないのだろう。ただ単に、彼がそばにいないからなのだ。彼がいて、私がいて。そうじゃないと始まらない。

そして、終わらない。

「姉ちゃん、行こう」自転車から降りた善正くんは言う。「行こう」私は小さく頷いて、辺りを確認しながら後ろについて行く。誰かに見られるのはそれなりの問題行為だ。大したものではない可能性もそれなりにあるが、彼と会えなくなるかもしれない。もっとも、もしも善正くんの読み通り彼が現れたとしても、私たちが見つからずとも彼が見つかってしまえば、それはそれで意味がないのだ。

「本当に大丈夫なの？」前を歩く善正くんに問う。「不法侵入とかにはならないよね？」

「あー、いや、なるんじゃないの？　その辺のことはよくわかんねーけどさ。ほら、一応門には事務室に行けって書いてるわけだし」

「行けばいいんじゃないの？」

「なんて言えればいいのかわかんねーって」

善正くんは落ち着かず、視線をあちこちに送る。その行為をすることのでかえって不審に見えるのがわからないのだろうか。堂々としていれば他校の部活生とでも勘違いされそうなもののな。

職員室から一番遠い渡り廊下へと向かう。誰もいないことを確認してから中に入ると、靴下一枚だけの足の裏が、刺されたような冷たさに襲われる。脱いだ靴はもちろん手に持って、できるかぎり足を立てないようにしながら耳を澄まして歩く。すぐに現れた階段を慎重に上る。上から誰かが来た場合にはすぐ引き返せるように。下から来た場合はすぐ駆け上れるように。両方から来た場合のことは、できることなら考えたくなかった。心臓がやけに高鳴るので物

音が聞こえなくなりそうで怖い。

しかし、考えながら歩けばいつの間にか最上階の三階に辿り着き、その部屋は目前へと迫っていた。

「……姉ちゃん」前を歩いていった善正くんが振り返って言った。「そこだよ」

プレートを見れば一目でわかると思うのに、わざわざ指をさして言った。視線を細く長い人差し指の先へとなぞるように運ぶ。そらしてしまいたい気持ちも確かにあったが、それでも、彼がそこに来るといふのなら私は行かねばならないだろう。どこか強いられているような気もするが、これは間違いなく私の思っていることだ。

少し疑問に思わずもいられないが。

「本当にここに来るの？」

「だから、それは何回もわかんねーって言っただろ？　姉ちゃんって本当にしつこいな」

「しつこいって言うかさ……まあ、私には何も思いつかなかったわけだし。ここを諦めたとしたら、もうこれ以外はないしね。慎重にならざるをえないなんて言うてる暇もないか」

「そーだろ？　余裕なんてねーのに、なんでそんなにうじうじしてるのかオレにはさっぱりわかんねー。もつと危機感を持てよ。さつきまでとはえらい違うぞ？」

「うん……なんかね」と言っ、私は頭を整理する。というよりは、目を覚ます行為に近い。眠りから覚めたばかりで働かない思考を、なんとかして働かせようとする。「時間が空きすぎちゃたのかな。なんだか現実味がなくなってきたんだ」

「現実味？」善正くんは噴き出して言う。「わけのわかんねーこと言ってんじゃねーよ、姉ちゃん。さつきまでと言ってることがまるで違う。緊張してたんじゃなかったのか？」

「緊張すると眠くなったりするでしょ？　あんな感じ？」

「適当なこと言ってんじゃねーよ」

善正くんは頭を掻きながら、また前を向いた。一歩ばかり後ろに

いた私は前に出て隣に並ぶ。

同じ高校と言っても自分のところとはまるで構造からなから違う。確かに高校に違いはないのだが、どこか実感というものがわかない。異質な空間に迷い込んでしまったような感覚に包まれている。現実味というものが普段よりも欠落してしまっている。そのせいではないかとも思ったが、それが全てでもない。単に私の心境を助長するような雰囲気だけをあちこちから受け取る。

息を吸って、吐く。

「それじゃあ、行こうか」

言って、私は何か言おうとしている善正くんを無視して戸に手を掛けた。そこでまた一息ついてから、一気に右に引く。

引けない。

「あ、あれ？」

「だーからさー、音楽室って大体鍵かかってるだろーが。ここは吹奏楽部ないんだから中に頻繁に人なんか入らないし……話聞いてなかったのかよ」

「あ、いや……その」

すごく恥ずかしかった。消えてしまいたかった。

「本当姉ちゃんには困りもんだよなー。そのくらい考えなくてもいいはずなのになー。小学生でもわかるはずなのになー」

呆れたように善正くんは繰り返す。下を向いている私には声しか聞こえない。もし顔を見てしまったら苛立ちで自分を制することができるなくなってしまうそうで怖かった。

「じゃあさ」私は感情を押し殺しながら言う。「これからどうするの？ 中に入れないんでしょう？」

「入れないからなんなんだよ。オレたちは何しに来たんだよ。姉ちゃんは何がしたくてここにきた？」

「京都さんに会いたくて」

「馬鹿」ほとんど載せるように、善正くんが私の頭を叩いた。「だったら待てばいいーんだよ。どっちあいつもここから入るしかねーん

だし、オレたちが中に入ってまであいつを待つよーな展開なんて必要ねーだろ？ 姉ちゃんはいいつに会えればいいーんだ。この場所は、関係ない」

「関係ない？」

「そうだ、関係ねー」頭に載せられた手を跳ね返して顔を上げた私の目をじっと見ながら、善正くんは強く繰り返した。「関係ないさ。兄さんが通ってた学校だからって、あいつと兄さんが初めて会ったところだからって、そんな設定も必要ねーし関係ねー。だから今は余計なことを考えるんじゃないよ」

余計なこと。

さすがに余計までは言いすぎかとも思ったが、確かにここではあまり『彼』のことを考えない方がいいかもしれない。結局のところ『彼』についての答えも出ていないのだから。私としては『彼』が話に出てこない方が嬉しいし、進めやすい。しかし、これはあくまで彼が触れてこないものとしての仮定なので、実際にはあっさりと崩れ去るだろう。彼の中ではそれほど大きいのだ。私以上に、今日までの三年間を引きずっている。友人になってからの期間はものすごく短いはずなのに。

「だーから、考えんなつつつてんだろ？」

善正くんは顔を近づけて言った。食い入るように私の瞳を見る。少しそらしながら「わかったよ」と答えると、「よし」と言って離れた。

「それでいいんだよ。兄さんのことなんて考えなくなっただけいいんだ。考えたって意味がねー。原因を知ってあいつを救おうなんて無理なんだからさ」

「……信じたくはないけどね」

善正くんの言うことには、私もわかっている。原因を探って、元を断ったところで関係ないのだ。深く張った根を引き抜いたとしても、跡が残る。ぽっかりと穴が残る。それでは意味がない。抜くだけではなく、埋めなくてはならない。けれど、そんなこともできそ

うにない。代替物になるものがなんなのかなんて私たちには当然わからないし、もしかすれば彼にもわからないのだ。よくわかる。自分のことのように　いや、自分のことだったからこそ、よくわかる。

「それで、どうするの？　このままここで待ってても、もしかしたら先生とかに見つかっちゃうかもしれないよ？」

「うーん、隠れるったってさっきの階段くらいだしなー。まー、しよーがないからそこにでもいるか？　あいつもそこから上ってくるだろーし。そうじゃなくても入口見張っとけば大丈夫だろ」

「そうだね」

「うん」と言つて善正くんは来た道を戻る。私は少し動かずに戸を見た。三年前、この中で彼は『彼』と出会ったと言った。その事實は消えないのだ。だから彼はここにやってくる。最後に訪れるのは、やはり最初の場所だ。

最初にその人と出会った場所。これまでの間、彼がここに幾度訪れたかどうかは定かではないが、少なくとも最近は来ていなかったことだろう。久しぶりのはずだ。彼はどうするのだろうか。何をしに、何を感じに来るのだろうか。『彼』が。

『彼』が　そこにいるのだろうか。それなら、私だって

「なにやってんだよ姉ちゃん、さっさと行くぞ」

少し離れたところに立った善正くんがふてくされるように言った。どうやら私はさっきから心配をかけっぱなしらしい。「ごめんね」と断ってから、私もそちらに向かおうとした。

がちゃん、と。

まるで鍵が開くような音がした。しかしそれは、もちろん私によるものではない。もちろん善正くんだって違う。廊下には誰も鍵を刺している人はいない。視線を鍵に持つていくことなく、善正くんの方に向いたまま目を見開いたので怪訝そうな目で見られた。何か言葉を掛けようとしている。私はそれに気づきながら、ゆっくりと視線を戸へと、強引に運ぶ。

大きな音を立て、一気に戸は開かれた。特有の楽器のようなおいが外へと流れ出る。よく知ってはいるけれど、確かに異なるそれを感じながら、私はもう身動きが取れない。

「……あ」

ぽかんと開けた口からはそれしか出てこなかった。目線をいつもより数十センチも上げて、見上げるように。慣れた角度だ。最近ではよくこうして見ていた

「……あ？」

京都弦一郎も目を丸く開き、私のことを見下ろしていた。少しばかりの驚愕と戸惑いと、それから後ろめたさのようなものが、彼を包んでいるように見えた。

「……どうして、ここが？」

彼が、口を開いた。私は答えられない。

「なにしに、ここに？」

再び彼は訊ねた。

答えなければならぬ。私は何のために来たのか。しっかりと思ひ出す。息を整える。答える。

「あなたに会いに」

言ってしまうと、確実な終わりが近づいてきた気がした。

008

「会いに……って」

彼はその言葉だけ発すると、口を閉ざした。口を開けたまま彼から目を離さない私と、その様は対をなしているようだろ。と、そんなどうでもいいことにはばかり思考が回る。本当に自分がしたかったことなんて、遠く投げ放たれてしまったもののように手元にはない。どこに行ってしまったのかさえわからない。

この状態で、おそらく一番冷静でいられるのは善正くんだけだろう。一步どころか五歩ほども私たちから離れて、しかも後ろに立っている。私と彼の二人がどういう状況にあって、どういう行動をとっているのかが見えているはずだ。はたから見ればただ呆然と突っ

立っているだけに見えるだろう。そしてそれは間違いでもない。私は彼に思考を集中させることができない。それ以外に集中しているというわけではもちろんなく、ただ拡散させられているだけなのだ。ほかならぬ彼のせいで……きっと本人に自覚はないのだろう。

今朝見た時のような瞳ではなくなっている彼を、私は注視することができない。

「会いに来たって」

彼はもう一度言った。その声にびくりと全身が波打った。冷や汗のようなものがにじみ出て、それとともに急速に体温が奪われていく。体にこもっていた熱が、そのまま全て流れ出ているようにも思えた。しかし、反比例するように頭に熱が昇って行く。自分が立っているという自覚が薄くなる。強烈な浮遊感が、私をここから逃がしたがつているように襲う。どんなに小さな風が吹いたところで吹き飛ばされるような儚さで、むしろ襲うというよりは語りかけているようだった。逃げるべきだと。あるいは逃げてもいいと。

「……あ、あなたに会いに来たんです」

私ももう一度言ってみたところで状況は変わらなかった。動けない。細く巻き付いていた緊張の糸が強く私を締め付けているようだ。そのせいで身動きが取れない。下手な動きをしてしまえば無数の切り傷に襲われてしまう。本能的にそれを察知しながら、理性的に覆そうとしても徒労に終わった。どれだけ頭で解っていたところで結果は変わらない。『本当にしたかったこと』は、私の手をすり抜けて、どこかへ行ってしまったのだから。

静寂が横たわる。遠くにあるグランドの方から部活生だかの声が聞こえた。誰も私の知らない人。ここも私の知らない空間。彼と『彼』だけが知っている場所。その事実を私を部外者のように押し出していく。ここにいるべきではない存在としてここにある全てになじられている心地だ。逃げ出してしまいたい。本当にそう思ってしまった。そうになった。

「姉ちゃん、ごめん」

途端、背後から聞こえた声に私の体は弛緩する。けれども振り返ることは許されず、突き出された手によって、音楽室内へと押し込まれる。その私に押し込まれるようにして彼もまた。振り返ったころには扉は閉まっていて、その向こうに凭れ掛かった善正さんの気配があった。

「姉ちゃん、何やってんだ」

責めるように、若干語気を強めて言った。その言葉にまた過剰に反応しつつ、言葉を返すことはできなかった。

「姉ちゃんは、あいつと会うことだけが目的じゃねーんだろ？ さつきからいじいじと何を見誤ってたんだ。自分を間違えるんじゃないよ」

「でも、じゃあ……」

「黙れ」その一言が強く私にのしかかる。「黙れよ。オレはそんな姉ちゃんのことなんて見たくねーんだ。それならまだいつも通りに自分は冷静だって見せようとしてる姉ちゃんの方がよっぽどいいさ。だから姉ちゃんは冷静になれ。落ち着いて、いつも通りにすればいい」

そう言つて善正くんは戸から離れ、おそらくこちらを見て言う。「オレはその辺にいて見張ってるから、姉ちゃんは気にしないで」

一瞬、逡巡するかのような沈黙の後、

「頑張れ」

と言つて、そして廊下を歩いてどこかへ行ってしまった。

「……うん」

聞えたかはわからない。実際のところは、自分にも言い聞かせたかっただけなのかもしれない。頷いて、何度も頷いて、それから、振り返つて彼に向き直る。冷静になれ、と自分に言い聞かせながら。「こんにちは」

まずは挨拶からだろう。いつも通り、いつものように。彼の瞳を見る。力が弱くなつて、本当に私を見ているのかどうかかわからない。

気にせずに続ける。

「何で私がここにいいのかと言えば、あなたがどこかに行ってしまうという話を良美さんから聞きまして、私としては、あまり探す気はなかったんですけど、善正くんに場所を言われてしまったら、ほら、なんていいまいしょうか、良心の呵責ですかね、そんな気持ちで、ちゃんとした挨拶でもしておいた方がと思いますして」

言うことは考えていても、口が滑らかに動かない。正しく言葉を発しているかわからない。言うたびに霧散していつて、それが言おうとしていたことかどうかの確認ができない。言ってしまった言葉を思い出せないのも、文章が正しく繋がっているかわからない。

「そもそも、今朝会ったのに、どうしてあなたはもつとちゃんとした挨拶をしてくれなかったんですか？ それなら、私もそこで理解して、こんなところに来ることもなかったというのに、本当にあなたが何を考えているかわかりません」

彼はただ、黙って聞いていた。

「……何か、言ってくださいよ」

耐えきれずに言ってしまうと、彼は少し困ったように顔を歪めて言った。

「……どうして？」

「どうして？ どうしてって、何がですか？」

「どうしてここに来た？」

「それはもう言ったじゃないですか！」

思わず声を荒げてしまい、自分の声で我を取り戻す。「すみません」と口だけで言ってしまうと、また何を言ったらいいのかわからなくなった。顔を伏せると、上から言葉が降ってくる。

「……昨日、初めて善正に会ったよ。俊哉から名前だけは聞いていたけど、そんなこと覚えてなかったんだよな、俺」

「そうですか」少し顔をあげて彼を見る。

「本当に驚いたさ」彼は力なく笑う。「俊哉が生き返ったのかと思った。生き返って、俺を」

彼は何か察したように言葉を切った。ばつの悪そうな顔をしていた。私も何か言おうとしたが、うまく言葉がまとまらなかった。

「俺は、行くよ。ここから消えろって言われたからな」

「……そうですか」

「……止めに来たんじゃなかったのか？」

最初は確かにそうだった。彼をここにとどめて、少し『彼』について話をし、また今まで通りに過ごそうと思っていた。変えてしまったのは良美さんの言葉だ。彼女の言葉で、私はどうしたらいいのかがわからなくなっている。

「あなたが自分でどこかに行きたいと思っているなら、私は止めることなんて」

嘘を言っているように、胸が痛んだ。

「それに、その方があなたにも私たちにもいいことは明白なようですし。もともと私にあなたを責めることなんてできませんしね。ちよつと前までは少し恥ずかしいことも思っていましたけど……そんなこと、する必要もないみたいです」

簡単なことなのだ。彼はもう良美さんから 良美さんの手によって、放たれようとしている。

簡単な答えなのだ。私はただ、私を救いたただけだった。彼を救うことによって。

「ありがとうございます」

これほど心の入っていない感謝の言葉を言ったのは初めてだった。もう自分を傷つけなくなかった。そうしたら、彼にもまた傷を与えてしまう。そんなことはもう嫌だ。言葉よりも態度で感謝を示すべきなのだ。私は

「お前、俺の言ったこと覚えてないのか？」

「……え？」

少しだけ悲しそうな顔をして彼が言った。その言葉の意味がわからずに、ただ言葉を返す。

「自分への嘘はやめろって、言っただろ？」

瞬間。

一気にクリアになった思考へと、彼と出会った日から今日までの彼との会話が津波のように押し寄せた。言葉の海に溺れて息ができない。周りを包む風景は走馬灯のようで、とめどなく明滅し、私を一点にとどめることはしなかった。私がいて、常に彼は前にいて、何かを話している。聞き取れなくても、思い出せなくても、私にはわかった。私が何を思っただけにいたか。なぜそこにあり続けたか。ただ単純で、虚飾など一切ないむき出しの感情がふつふつと湧き起こり、内側から包まれていく。

楽しかった。

どうしようもなかった。どれほど言葉を尽くしたところで、どれだけ思索にふけたところで、答えはその一言に尽きてしまうのだ。そんな簡単なことから目を背けていた。結局のところ、私は変わってないなかつたのだ。変わることができたとすれば、それは今の瞬間で、生まれ変わったとすれば、それは彼と出会った瞬間なのだ。そんな明白なことを今までの私は気づくことなく。

「京都さん」

「なんだ？」

「ありがとうございます」

驚いた彼をよそに、これ以上ないくらい深く頭を下げる。数秒間が滝のように流れる。今の彼はどんな顔をしているのだろうか。見えないけれど、想像に難くなかつた。きっと彼なら。

「こちらこそありがとう、奏」

小さな声が降ってきた。私の心の琴線に触れたかどうかはわからないが、何かがこみあげてくる。あふれる寸前になると私は顔を上げ、正面から彼を見た。彼の瞳はもう、初めて会った時のようになつていた。

「それで？ お前はどうするんだ？ 俺をとめるのか？ さっきみたいにとめることはしないのか？ どうしてここに来たんだ？」

にやにやと笑いながら彼は問いかけた。そうだ、私にはまだする

べきことがある。私自身が私に強いる、本当にしたいことがまだ確かにこの手の中には残っている。今度は逃がすことはしないと強く握りしめ、声を振り絞り、心の奥底から答えを引っ張り出す。

「少しいいです。話をしましょう、京都さん」

そうだ。私は彼を救いたい。その本心は私を救いたかったから。ならば、私たちが一番救われていた　縛られることなかった、あの日々に近づくべきだ。それこそが彼を救うという意味であり、私を救うという意味であるのだ。それが正しいと信じる。そうでなければならぬと思う。お互いの知る『彼』を共有するという、所詮はかりそめの行為。私たち自身を確かめ合うと言う単純なこと。始まりのこと。どうしようもないくらいに届かないものへ、手を伸ばすように。自分の答えを見つけるための話。

彼は満面の笑みを作る。私もそれに同じように応える。少し固まってしまっていた表情を動かすと、自分の表面を形作っていた何かがぼろぼろと剥がれ落ちていく。そんな風に感じながら、おそらく彼に笑顔を見せるのは初めてだったような、と都合のいいことを考えていた。

ゆっくりと時間が動き出す。私と彼に挟まれて、しかし確実に過ぎ去っていく。終わってしまったえば一瞬のことだったと、背を向けた彼を見て思った。

009

そして彼は出て行った。音楽室に私だけ残して、一人で。どれだけかもわからない会話。去り際に残した笑顔。それから、「またな」という言葉がずっと私の周りで泳いでいた。部屋から出ると、すっかり雲が消えていて、落ちてきそうなくらいの星が空いっぱいに広がっていた。駆け寄ってきた善正くんにお礼を言っ、また二人で自転車に乗って帰る。

全てが終わってしまったような、それでいて、やっと始まるような感覚が、星のように私の中にぼつぼつと灯り、じわじわと広がっていく。言葉にならない思いが朝もやのように立ち込めて　前の

見えない不安よりも、清々しさを覚えた。以前にも感じた清澄さ、きつとあれに似ているんだろうな、と細い肩につかまりながら、そんな風に思った。

ふ、と口元が緩む。消えそうだったのに、結局は細部まで欠けなかったあの旋律が紡がれる。頭の中で、心の奥で、記憶の海で。漂いながら耳を澄ませば、ただの思いへ還元される。

目を閉じて、息を凝らす。

答えはまだ、見えない。

終章

最高の終わりなんてない、と思う。

何においても、後から思えばもつといい方法や手順があったと思うものだ。そう思うたびに私たちは後悔し、その食い違いに折り合いをつける。事象へとこちらから歩み寄るのだ。あるいは最悪と比較し、まだこちらの方がよかったと安堵する。何かに対して何かを比較することしかできず、それ単体でよかったと思えることは、実は皆無に等しい。私で言うなら『彼』のことについてがそうだろう。『彼』の最期の日、どうしてあんなことをしてしまったのか自分の行動に後悔し、けれど折り合いをつける事の出来なかった私は記憶の隅の隅に押しやって考えることをやめた。

しかしながら、結果としてそれから三年後 『彼』と同じ年頃になって、考えざるを得ない状況が訪れた。まるで私の逃げを許さないかのように。三年越しになった自分と『彼』との整理はひどく困難で、しかも難解に見えた。私はただ当惑し、またも逃げようとしていた。

違いは一つ。それは私よりも悔いて、悩んで、苦しんでいる人がいたということだ。

京都弦一郎との出会いがなければ『彼』のことを振り返る必要もなかった、と言ってしまえばそれまでだが、いずれは私に覆いかぶさることであつたと考えるようにしている。彼の存在のおかげでそれが前倒しになっただけであり、またそれにより手助けも付与されたのだろう、と。

果たしてこの折り合いのつけ方が正しかったのかどうか、それはわからない。と当時の高校三年生の私は思うだろう。後悔はあまりなかったのだから、これでいい、と。

けれど、今の私には答えがある。

「ねえ」と隣を歩く善正くん、に声をかけた。「三年前のこと、覚え

てる？」

「三年前？」ブレザーに身を包んだ彼は私を見下ろしながら言う。

「……ああ、あれか。俺はあんまり姉ちゃんとかとはかわってないから、実際よく覚えてないんだけど、なに、なにか思い出したことでも？」

「いいや、善正くんはあの時のことどう思ってるのかなあつて」

「これと言つて思うことはなにもないな。その時は、確か俺は基本的に姉ちゃんのことばかり心配してた気がするけど、どうだろう」

「そうなんだ」

少し背の伸びた彼を見上げる。当時の『彼』と同じ年になった善正くんは、『彼』よりも大人びて見えた。三年前の段階で『彼』にそっくりだったのだ、それは当たり前なのかもしれない。だからもう見間違えることもなくなり、私の目にはどうやったって岩代善正にしか見えなかった。時折見せる仕草は確かに『彼』に似てはいるけれど。

「でも、どうして今頃ここに来ようと思ったんだ？ わざわざ俺を使つて許可も取つて、あんなところにまだなにか用でもあるのか？」

「もう一度行こうつて決めてたの。三年前に京都さんを探しに一緒に行ったときにね。同じだけ時間が経つた後に行ったら、どう思ふかなつて」

「ふうん」

本当の話、あのときに決めたわけではなかった。一昨日辺りにふとカレンダーを見たら、あの日から大体三年が経つていて、運よく帰省していたので行くことに決めただけ。要は単なる思いつきだ。思いついたのは、きっと実家の自室に置いてあったバイオリンを見たとせいだろう。結局これ全てなのだ。

「でも、それにしなつて突然だな。それならもつと前から連絡くれればよかったのに」

「びつくりさせたかったから」

「わけのわかんない冗談はいいつて」

笑いながら善正くんは私に道順を教えてくれる。あの時はびくびくしながら進んだのでよく見ておらず、だから今日初めて訪れた場所のようだった。

「そういえばさ」善正くんが不意に言った。「俺がここに入る前から、こんな噂があったみたいなんだけど」

「どんな噂？」

「うん、それがな。部活が終わって帰ろうとしたら、電気もついてない音楽室からバイオリンの音が聞こえてくるんだってさ。一応音楽室にバイオリンは一つだけあるんだけど、教師にそんなもの弾ける奴はいないしで、ちよつとした怪談っぽく話されてたんだよ。いろいろと脚色されて」

「……ふーん」

笑いをこらえながら答えると、善正くんもまた笑いをこらえているようだ。お互いの顔を見て、意味を理解すると、途端に我慢の限界になって嘔き出してしまった。

「幽霊にでもなったのかな？」

「さあ？　噂が流れ始めた時期がわかんないから、兄さんが生きてる時からなのか死んでからなのかかわからないけど、どちらにせよ原因がわかってるってのは面白いな」

「本当だね。じゃあ私たちは」

「うん、そうだな」と言って、善正くんはまた笑った。腹を抱えながら本当に可笑しそうに。

『彼』のことについて　最期の日『彼』の行動について、私が真実を知ったのは三年前の音楽室で、京都さんと話をしたときのことだ。

「俊哉はよく、ここでピアノを弾いていた」

彼は記憶に触れるように、そっとピアノを撫でた。すぐそこに彼が座っているように目を向けて。

「昼間はな。だからほかの生徒もよく見てたんだよ、あいつがピアノ弾いてるところ。ただ……何人が知ってたんだろうな。あいつ放課

後になって人が少なくなると、バイオリンを弾いてたんだよ。こ
でしか練習できないからって言ってたな」

言葉を失う私も見ずに彼は続けた。

「なんでだって聞いたら、そうでないと独学にならないからと答え
た。家で弾くと母親が嫌でも教えてくるから、そのせいでってな。
また俺がどうして独学にこだわるんだって言ったら、嘘をついたか
らだって」

彼は部屋の奥にある準備室へと向かった。日頃から管理が緩い
かその鍵は開いていた。そもそもどうやって彼はこの音楽室に入
ったのだろうと思ったけれど、そういえばそのことは最後まで聞か
ずじまいだった。

戻ってきた彼はバイオリンの入っているであろうケースを片手に
言う。「あいつが使ってたんだ。家から持っていくことはできない
から。そうしたら気づかれてしまうからって」

そして私にそれを渡した。「弾くか？」

「……いいえ」

「そうか」少し残念そうに言った。「あいつは、自分が天才である
かように言ったことを悔いていた。本当はたくさんのことを教えて
もらっていたのに、自分一人でなんでもできるようになった天才だ
って。だから、自分がまだ習ってないもの　まだ上手くできない
ものをその人に教えて、本当に自分だけの力でそれをできるよう
なってから、その人に見せようと思っただけ。今まで嘘をついて
いたことを謝って、これだけは本当のことだって言うことができる
ようにな。あいつはそのために努力していた。ほかにもやらなきゃ
いけないことがたくさんある中、本当に自分一人の力で」

私は手に取ったケースを撫でた。よく覚えのある温かみを、じん
わりと手のひらに感じる。

「すごく悪いことをした。その子が本当にやりたいことだったはず
なのに、それを奪って、泣かせてしまった。どうやったらそれにつ
いて本当に心から謝っていることを示すことができるか、あいつは

悩んでたんだよ」

「……そんな」

「うん。それだけのことだ。あいつはそれだけの為に悩んでいた」
静寂が満ちる中、私はケースの中に入っているそれに思いをはせていた。『彼』はこれでどれだけ苦しんだのだろう。私の感じた苦痛よりも、もっと大きなものだったに違いない。

「誰に対してなんて、言わなくてもわかってるよな？ 俺だってわかってる。最初からな。そいつが俊哉の出した答えにどう答えたかは知らない。今日伝えると言った俊哉に、次の日に会うことはできなかったからだ。勝手な想像はしていない。だから俺はそいつは悪くないと思ってるんだよ。結局決断したのは俊哉で、そいつは俊哉に答えただけなんだから」

「……それが、彼の全てを否定するものだったとしても、ですか」
「そうだ」彼は強く言った。「むしろそいつの方が正しい。自分のすべきことをした。ちゃんと伝わらなかったのなら、それは俊哉の方が悪いんだ。そいつは全く、悪くない」

私は。

「だからさ、奏。お前は本当に悪くないんだよ」

「私は……」

言葉は出なかった。結局その話だけはうやむやのまま、彼は出て行ってしまったのだった。

「ほら、姉ちゃん、こっち」

曲がり角を曲がっていつの間にか立ち止まっていた私に善正くんは手招きをする。小さく「うん」と言ってその背中を追う。

「ああ、そういえば」と彼は前を向いたまま言った。「あいつに挨拶行かなくていいのか？」

「ううん……どうしようかな」

「いいんじゃないの？ どうせならあいつもいた方が都合はいいんじゃないのか？」

「ううん……」なにか、妙に気恥ずかしさを感じる。「善正くんが

そういうなら、そうしようかな。でもかなり久しぶりだから」

「姉ちゃんなら大丈夫だって。……さて、そうなると校舎から出ないと駄目だな。どうせあいつ煙草吸ってるんだろうし。いつも同じなら、たぶん裏門のあたりにいると思うよ」

「善正くんは？」

「先に行つて。さつさと呼んできなよ」

じゃ、と彼は手を挙げると、私を置いて歩いて行ってしまった。

一人取り残された私は、ぼんやりとした記憶を頼りにして裏門へと向かう。三年前に善正くんと通つたところだ。門の場所位は覚えていた。来客用の玄関で靴を履きかえると、一直線にそちらへ向かつた。

いた。

裏門から数メートル離れたところで、壁にもたれるようにして地べたに腰を下ろし煙草を吸っている。周りにはスーツ姿の人が同じように何人かいて、多少の年齢のばらつきはあるが楽しそうに談笑していた。声をかけるのを一瞬ためらうが、善正くんを待たせ続けるのも悪いと思い、思い切つて声をかける。

「京都さん」

言つと、その場にいた人たちが一斉にこちらを見たので思わず一歩退いてしまった。恥ずかしさのようなものがこみあげるが、すぐに彼が煙草の火を消して立ち上がり、「はいはい」と返事をした。

一緒にいた人たちに断つてから彼は私の方に向かってくる。その人たちに私もぺこりと頭を下げて彼の隣に並んで歩く。

「久しぶりですね」

「あー、うん。何日ぶり？」

「そんなに最近じゃなかった気がするんですけど」

「帰ってきてすぐ会いに来たくせに」

少し睨むように彼を見上げると、すいと視線をそらされた。口元がにやにやとだらしな。私はため息を吐くと、正面に視線を戻す。
「音楽室に行きますから、連れて行つてください」

「なんで俺が？」

「あなたに用があるからです。それに道順もわからないですし」

「わかんねえの？ ふうん、わかんねえんだ」

「何でそんなところで人を馬鹿にするんですか」

「カナちゃんにもわからないことあるんだなあつて」

「どうしてあなたがこんなところにいるのかわからないんですけど、京都ちゃん」

ふん、と彼は鼻を一つ鳴らして、私の問いには答えない。

「……しかしまあ、なんでまた音楽室なのかね。何の用だよ」

目線は変えないまま尋ねられたので、私も何でもない風に答える。
「懐かしいなって思っただけです。なんとなく三年ぶりに行つてみようかと思っただけです。なにかおかしいことがありますかね？」

「いや、別に」彼は口元をまたにやりとさせる。「どうせ善正も呼んだんだろ？ なにをするのか楽しみだな」

「大方あなたが予想している通りだと思いますけどね。特に大それたことをするつもりありませんし、ただ」

「ただ？」

彼は立ち止まって私を見た。私も立ち止まって彼を見た。

「ただ、六年前と三年前にできなかったことを、今の私にできるのかどうか、不安なだけです」

彼はその言葉を一笑に伏すと、何事もなかったように歩き始めた。私もそれに倣った。

三年前にできなかった　そう言うのが正しいのかどうかはわからない。あの時、私は何も考えていなかった。訊かれたことにNOと答えたただけだ。特段深く考慮することなく、気にする必要もないと切り捨てた言葉だ。本心から出た言葉であるのは確かなのだが、いかんせん主体性に欠けている。その点六年前は顕著だが、これは純粹に私の甘さ（浅慮とも言えるだろう）のせいによるものだ。

その時々で足りなかったもの。そのどちらも、今の私は持ち合わせているはずなのだ。経験的なものと、精神的なもの。唯一の不安

要素は、あまりに私が長い間それを自覚していなかったということ
で、同時に、単に技術力が足りるのかということだけのことだった。

音楽室が迫る。戸の前に立つ。柔らかい緊張感が私を包み、彼が
開いた扉から漏れる特有のにおいに懐かしさを覚える。確かに、覚
えがある。そこにいるという感触もある。足りないのは、きっと私
だけののだろうか。

「遅かったな」善正くんが言った。「人をどれだけ待たせるんだよ。
さっさと始めようぜ」

善正くんは、既に準備を終えたバイオリンを渡してくれる。彼が
私の方を見て、何かを言いたそうにしながらも口は開かない。思い
切ってこちらから話しかけてみる。

「私が」緊張を紛らわせるように。「私が、弾くんです。弾きたい
んです」

「何のために？」

「私のために。それを善正くんと……ついでですけど、あなたにも
聴いて欲しくて」

言つて、およそ三年ぶりにもなるそれを構えた。感覚を取り戻す
ように、六年前を記憶のそこから引つ張り上げる。目を閉じて想像
する。その向こうで聞いているのは私だ。誰でもない、私なのだ。
善正くんでもなく、京都さんでもなく　もちろん、『彼』でもな
く。純粹に、これまでの私と今の私。

確かに、最高の終わりなんてないのかもしれない。

どんな終わり方をしても、結局私は後悔をする。ならば、その後
悔をできる限り払拭すればいいのではないだろうか。今の私にはこ
の方法しか思いつかない。真っ先に浮かんだこれこそが最善だと思
いながら、身をゆだねる事しかできない。

終わっていなかった話を終わらせること。私だけのものを、私だ
けの終わらせ方をする。『彼』の奏でた終わりではない、私だ
けの。

最高の終わりはないけれど、綺麗な終わりはある　私はそう思

っている。そして、そう信じたい。だからこれが第一歩だ。『彼』とのことの本当の終わりを、私は迎えたい。そうすることでなにが変わるのか、どんな後悔をまたするのかもわからない。それでも、迎えなければならぬのだ。他ならない私の為に。そして『彼』の為に。

今、どんな顔をしているのだろう。京都さんと善正くんは。『彼は、どんな表情をしていただろう。あの時のあの場所へ意識を飛ばす。もうあんな思いはしたくない。今の私ならできるはずだ。最後までをきつと、奏でられるはず。』

息を吸い、吐く。呼吸ひとつで世界は変わる。

子供の頃の夢は何か、と聞かれたら私はこう答えるだろう。

天才バイオリニスト。

それになることができれば、きつと『彼』に並んだことになるから。そうじゃないと、『彼』と一緒にいられないから。『彼』が褒めてくれるから。でも『彼』はもういない。なつたとしても、褒めてくれない。そんなことはもう、どうでもいい。そんなものになる必要もない。所詮子供の頃の夢だ。今の私はもう大人で、『彼』は死んでしまっている。

それでも。

きつとこれが最後になるのだろう。今までの私に全てをくれた俊哉くんへ、本当の私の曲を届けたい。あなたの思いに答えたい。できることなら、聴いて欲しい。全てを乗せて、今度はあなただけのために送る。

最愛の『彼』へ、届くように。

私だけが奏でる、旋律を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2680o/>

奏でる旋律を

2011年10月20日00時09分発行